邦は帝位に卽きて八年後に歿したれば、若し八年間に天下を一統せざらんか、鹿の逸して誰の手に歸するやを知るべからず。

「力拔レ山兮氣蓋レ世、時不レ利兮騅不レ逝、騅不レ逝兮可二奈何一、虞兮虞兮奈若何」

といふは籍一代の行事を盡くし、千古の絕調なり。劉邦の

「大風起兮雲飛揚、威加二海內一兮歸二故鄉一、安得二猛士一兮守二四方一」

といふは、斧鑿の痕の見え、拔山歌と並べ言ひ難けれど、多少邦の性格の顯はれたるを覺ゆ。茫漠にして捉へ難きが如く、而して猛士を得て四方を守らんとする所、旣に得たる位置を守るに汲々たる者にして、類例なき大風呂敷なるに拘らず、自らの位置を保つに腐心し、幾多の功臣を誅戮せるは、胸中の小人なるを示す。締め括り無くして權力を得る能はざれど、時に締め括りの宜しきを失ひ、殘忍刻薄に陷るを憾む。項籍と劉邦と、各々一長一短あり、之を合一せば千古の大英雄なる蒙古の成吉斯可汗に匹敵すべし。

後ち幾許か之に似たる者の歷代に出で、或る點に於て之に劣り、或る點に於て之に優るが、競爭者として宋代の岳飛と秦檜との如きは多からず。此の二人の關係は我が西鄉大久保の關係に似たりとて、當時實に其の議論あり。井上毅の如き、西鄉大久保より推して秦檜に一理あり、岳飛の妄りに賞讃すべきに非ざるを言へり。井上は支那との戰役をも好まざりし程にて、斯く斷定するの避くべからざるが、岳飛秦檜の關係が眞に西鄉大久保の如くならんには、井上に一理なしとせず。

但だ日本は爾後國運の進展し、西鄉の希望せしが如く爲り、宋は之に反し、久しからずして全滅に歸し、二者同列に言ふを得ず。且つ岳飛の爲すに任かせば一層早く滅亡を招きたるべしとの事なるが若し敵國と講和し、以て勝利を得るの明かならんには、一時屈辱を忍ぶの得策なりともせん。其の希望なく、唯だ一時遁れに小康を得て安んずるは、大戰して存亡を賭するに孰れぞや。明朝が宋よりも兵力强く、二十年も滿洲と戰へるは、南宋の滅亡に憤慨する所ありしが爲めとも見做すべし。其の日本に影響せること更に多く、靖獻遺言の擴まるに伴ひ、岳飛を崇拜して措かざるに至る。況や岳飛の如く猛進し、南支那の士氣を鼓舞し得ば、能く金に抵抗するを得、其勢を以て更に蒙古に抵抗するを得ずとせず。單に主張よりせば、國權擴張を先にすると內治整理を先にするとに於て、我が西鄉大久保に類する所あり。

岳飛は孔明と關羽とを兼ねたる者と稱せられ、支那史に有數の武將にして、兵弱く、權足らず、充分に將材を發揮せずして終れるも、軍事の全權を與へらるれば、金兵を擊破し得たるべく、飛の主戰論と檜の平和論と孰れの可なるやを決する場合、前者を揚ぐべし。されど支那の主戰論者は概ね言壯

にして行之に伴はず、口舌的主戰の爲めに事を誤ること少からず。清朝に入りて外國と事ある毎に必ず主戰論者の出で、而して皆な事を誤るべき者なり。

左宗棠と李鴻章と時に往昔の岳飛と秦檜との如く見られたるが、左は兎も角とし、張佩綸の佛國軍艦に挑戰し、砲聲を聞いて山上に遁れ高きに登りて衆を指揮すと奏上せしが如き、滑稽の好材料と爲れり。而して是れ獨り張ならず、支那の主戰論者は概ね此の如く、空言益なしとは彼等に於て之を見る。必ずしも彼等個人としての失に非ず、多年の習俗の强兵を困難にせるなるが、若し眞に戰はんとせば失敗を免るゝは甚だ難し。李鴻章の位置は國外に事を構へざるを以て維持し得たる者にして、太平の亂に功ありながら、秦檜を以て呼ばるゝを辭せざるは能く勢を知るの致す所とすべきに、何の慮る所ありてや、日本との開戰を避けず、鋭意出師の準備に着手せり。

陸奥宗光の如き、李は開戰を避くべしと信じ、參謀本部も平壤陷落を以て講和と爲るべきを豫想せしあるが、李は啻に開戰するのみならず、平壤陷落して尙ほ戰爭を繼續し、遂に自ら使節と爲りて講和を計るの已むなきに至る。李にして戰はんと欲せば飽くまで戰ふべく、卽ち北京を陷れらるれば他に遷都し曠日彌久、以て時機を窺ふべく、開戰を不利とせば、早く朝鮮半島を見限り、中立地帶を設けて永く平和を計るべし。其の孰れにも出でず、世界の英傑と見られし者が一轉して世の物笑ひと爲れること、自ら短所を以て事を處置せしに出づ。圓轉滑脫曖昧模稜の間に經過すべき者が、偶々勇往果決、鐵血を以て國威を發揚せんとし、自家撞着して一身の處分に苦めるなり。

斯かる事は現在の支那にも珍らしからず。實際の國勢を考へず、一時我が勇を衒はんとし、國家の不利を招くを顧みず。國政は外に寬にして內に嚴なるべきことあり、外に嚴にして內に寬なるべきことあり。列國競爭に臨みて後者の最も望ましきも、支那現在の事情の之を許さざるを奈何せん。日本には嘗て西鄕側の國權論に反し、大久保側の內治を先にして國權に及ばんとするあり、大隈の改進黨を組織せる際、之を一の綱領とせり。是れ日本に於て議論の餘地ある者、事實上に西鄕大久保の折衷說を以て進み來れるが、支那は何事を差措いても內治の整備を先にし、其の整備を得て然る後に他に及ぶべし。大言壯語、妄りに他國を罵りて快とするが如き、自らの愉快は或は之れ有り國家に寸毫の利益なく、却て不測の禍害を釀す。性急なる者は內を整ふるに全力を注ぐべく、鈍重なる者は成るべく事を起さず、徐ろに將來の安全の爲めに計るべし。將來或は岳飛の飛躍を望むべきも、今日妄りに是を以て居るが如き、思はざるも甚だし。今は金兵の壓迫し來るなく、强ひて兵力を以て外に臨むは、平地に波を起すよりも無思慮なり。

歐洲に於て速力と負擔力との競爭は、近世に於てカルロとビヨートルとの間に見る。戰略戰術に於

てピヨートルは到底カルロの敵に非ず、カルロ十二世は眞に天成の名將にして、其の猛進する處何物も能く禦ぐ無く、快速に於て歴史の珍なり。ピヨートル一世の長所は忍耐と勤勉とにして、和蘭に在りて造船を學びし遺跡今尚ほ存し、實に尋常に超ゆるの努力を證す。彼は眼前の戰勝を能事とせず、勢を知り、勢に隨ひ、勢を制するに務む。

カルロと戰て敗れ、敗れて教訓を得たりといふは、實に忍耐力の大なる所なり。カルロは勇に富み、智に富み、德亦た稱すべきも、洪水の氾濫し、須臾に跡なきが如く、勢の餘りに急にして久しきに續かず。ピヨートルは何等痛快なる無く、寧ろ蕃族の酋長が權力を逞くせる趣あり。新たに首都を經營するや、自ら一切を擔任し、工事の末をまで監督し甚だしきは自ら家を造り、馬車を造れり。彼は機を見て突進するの機敏なきも、我が獲得せる所を何處迄も保有し、之を有利に使用するの能あり。彼れ自ら倔强なる貨車馬の如く、身體長大、膂力衆に勝れ、而して經營の能力之に伴ふ。

斯く東歐に於て支那的英雄の竝び出でたるが、西歐に民選君主として英國と佛國とにクロムウェルとナポレオンとを擧ぐべし。共に匹夫より起り、群衆に推され、第一位に陞れる丈け、民族の性格を代表す。ナポレオンは速力に長じ、二十七歳にして征伊總司令官と爲り、後ち各地に轉戰し、連戰連勝佛國をして羅馬以來の大帝國と爲らしむ。彼はケーザルに私淑せしも、戰鬪の才に於て之を凌ぎ、眞に世界の軍神たるべき位置を占む。

されど後ち自ら捕虜と爲り、國家をして敵兵の蹂躪に任かすの餘儀なきに終れり。クロムウェルは歳四十まで世に聞えず、一躍して平民軍を率ゐ、國王を斷頭臺に上せ、自ら威を中外に振ひ、死すまで一世の畏敬する所と爲る。而もクロムウェルは莊嚴なる式を以て葬られながら、後ち發掘されて首を議院の屋根に曝され、腐敗して落ち遺骸の所在を知るべからず。ナポレオンは大西洋の孤島に葬られ、後ち莊嚴なる式を以て佛國巴里に改葬され、廟の壯麗なること他に比類なし。死後の禍福正に相ひ反す。されどクロムウェルが彼の如く死後に淩辱され、久しく逆賊とし取扱はれ、漸くして其骨頭の知られ來れる、二英雄の互に性格を異にし海峽の兩岸に對立する所なり。

此の二人は民選君主として對立するのみにて、時代に於て相ひ隔たり、直接に何の關係なく、時代よりせばナポレオンとウエリントンと同じく一七六九年に生れ同じくワーテルローに會戰せしを擧ぐべし。是れ將略に於て他に及ばず、作戰に於て尋常以上に出でざるも、軍隊を統率すること堅實、敵軍と對立すること堅實、堅實に於て當世及び後世の模範なり。彼の如く堅實なれば速かに勝利を得ざるも、決して失敗せず。ワーテルロー戰爭に於て、ナポレオンの作戰目覺ましく、眞に一代の傑作と稱すべく、而して其敗れしは種々の事情ある中、グルーシーをして適當の時に會戰し得ざらしめしを

重大とす。ウエリントン自ら作戰の妙を發揮せざるもブルッヘルをして適當の時に會戰し得せしめたるは性來の堅實の致す所ならずとせず。ナポレオンは當時既に衰弱の疑ひあり、遺傳なる早老の外、頭腦を極度に使用せし所あり、五十三にして歿せしが、長命して能く勢を挽回し得たるやは疑はし、ウエリントンは本來體格剛健にして、居常善く攝生し、ナポレオンと同年に生まれながら八十四歳を以て逝く。其の守舊的貴族にして政治上に民衆の不平を招き、石を投げらるゝことありしが、一旦上下軋轢の非を悟り、貴族院をして民論に從はしめ、死に際して輿望の焦點と爲れり。才に於てナポレオンに匹敵すべきも無けれど、已れの力を知り事の宜しきに應じ、大成を期するは、ナポレオンと竝べ稱して必ずしも不倫ならざる所なり。將材に於て佛のナポレオンと獨のモルトケと全く性格を異にしつゝ、執れの優るやを言ひ易からず。

實に佛獨兩軍の特色を表示すと云はる。されど民族は特殊の性格を具へながら、其の態度如何は時代に依りて變ず。嘗て善く攻むる者が後に善く守り、嘗て善く守る者が後に善く攻め、屢々豫想に反す。

馬の如く豫め特質を異にすれば斯く變ずるの困難なるも、馬よりも遙に複雜にして、乘馬をも時に貨車馬とすべく、貨車馬をも時に乘馬とすべし。現代戰亂に於て、獨軍は常に攻勢を執り、剩へ進擊の甚だ急にして、其反對に佛軍は概ね守勢を執り、善く守るに於て獨軍も驚歎を禁ずる能はず。ジョッフルとヒンデンブルグ、ベタンとマッケンゼン、執れの速力に長じ、執れの負擔力に長ずるやを決すべからず。各々時の宜しきに應じて事を處するに止まり、妄りに已れの長所を恃まざる所、卽ち其の大難に堪ふる所なり。長所は務めて伸ばし、短所は務めて抑ゆべきも、長所の用を爲さゞる場合、之を抑ゆるは之を伸ばすの道と知るべし。屋外には大刀を利とし、屋內には小刀を利とす。大刀を振ふに長ずる者が、小室に之を振へば、小刀に制せらる。

人に長短あるも、長に短の伴ひ短に長の伴ふを慮るべし。猿が樹より墜ち、河童が河に溺る、皆な長所に短所の伴はざるを知らざるに基づく。第一に長所を伸して短所を抑ゆるべく、第二に長所を警戒して短所を利用すべし。百年前の佛國は今と同からず、前に人口の多きを恃むべく、今は之を恃むべからず。ナポオレン三世が輕々しく宣戰し、準備整はずして出兵の遲延せしは、其の大敗を招きし所以にしてジョッフルが自耳義より敵に攻められて迅速に總退却を行ひ、敵の急攻し來たりて後方勤務の整はざるに乘じ、之に大打擊を與へたるは現に獨軍をして西方に一歩をも進ましめざる所以なり。已れの長短を知り、適處に應ずる者が勝ち之に反する者が敗る。政治に於て然り、軍隊に於て然り、百般の事物に於て然り。我が日本の官廳及び銀行會社は多く官私大學の出身を使用し、事務官の重要

なるは殆ど悉く大學卒業生なり。卒業生の能否に就て種々の說あるも、事實に於て其の最も力を伸ばしつゝあるを掩ふべからず。而して官私大學は系統に於て舊東京大學より發展し來れる所多し。舊東京大學に在りて最初に法科教授と爲りしは井上良一にして、謂はゞ法科大學の開祖なり。其の後に忘れられたるは狂死せしが故にして、狂死せしは虛弱なる身體を以て、大事を遂ぐるに熱中せし結果なり。性質善良にして任俠、眞に帝國を振興せんことを考へて已まず。其の關係にや、又は他の事情にや、一學究を以て居らず、ナポレオンに私淑し、一朝事あれば兵を率ゐて出でんことを期す。而して平素待遇惡しく、時に無能なる大官に愚弄せられ、憤懣に堪へざること數次、遂に演說を以て大學當事者及び政府要路者を罵る、其罵る時は旣に精神の健康を失へるなり。若し健康を得たらんには現に政府部內に樞要の地位を占め居るべし。彼れ米國に留學せし時、同鄕の金子十九歲を以て來り、外人と語る時に十四歲と稱し、少年の割りに事理に通曉するを以て人を驚かせり、其の金子は嘗て大臣と爲り、現に樞密顧問官なり。

井上は上官に容れられず、大に穎脫し得ざらんも測り難けれど、何等かの地步を占め、重きを成せるに相違なし。虛弱の身體にせよ、今少しく身を保つの方法を得たらんには、今日全く沒却せらるゝが如きこと萬々之れ無し。大學教授中最も初めに惜むべき者なり。在學中に學才を以て稱せられし者、大原及び村山あり。共に增島末延等と同時代にして、大原は同年に卒業し、村山は不品行の故を以て一時退學を命ぜられ、翌年宮崎等と共に卒業せり。此の二人は辯護士として立ちしが、刑事に問はれ、共に身を隱せり。大原は近年まで生存せしも、全く消息の絕え、唯だ秋田邊に住みしと傳ふるのみ。村山は初め橫濱にて英人ラウダーと共に法律事務に從事し、後ち海外に遁る。布哇に在りて頻りに酒を飲み、健康を傷ひ、禁酒して眞面目に法律事務を執りしが、天長節に祝杯を擧げ、次で再び酒を飲み、屢々泥醉し、幾もなく歿す。二人は性格に疵ありたれど、才識に於て同窓に秀で、後ち相應の位置にまで發達すべきに相違なく、唯だ己れの才に任かせ、法律家として法律を潛ぐり、遂に一生を誤れり。斯くまで甚だしき者の少けれど、之に似て甚だしからざるは計ふるに堪へず。在學中に俊才として聞え、後ち何處に居るやを知るべからざる者少からず。

特別に法律を犯さず、能く格式を守り。而して志を立つるの誤りしが爲めに力を伸ばし得ざるも之れ有り。初め大臣を以て期せし者が局長を以て終り、銀行會社の一役員を以て終るあるは世に寄とせられず。自ら方向を誤れるは、事情は事情とし、自業自得とされて致し方なきが、方向を誤らず、過度の力を注ぐが爲めに挫折するに至りては、頗る憐むべし。人は努力して豫期以上の力を發揮するを得、例へば火災に臨んで重量の箪笥を擔ふが如きあるも、元と力に限りあり、平素二十貫を擔ひ得る

は非常の時に三四十貫を擔ふべく、而も常に然るを得ず、常に三四十貫を擔はんとせば必ず病氣に罹る。臨時の費用は臨時に補ふべく、臨時を以て經常とせば破綻を免かるゝ能はず。

大學卒業生として最も論文に長ぜるは十五年卒業の渡邊安積を推す。在學中に主權論を東京日日新聞に寄せ、各新聞と論戰し、之が反對論を粉碎せずんば已まざりし所、實に當時の觀物なりき。福地は議論の材料なく、日日新聞をして一時論戰に重きを成さしめしは渡邊の力なり。卒業して太政官權少書記官と爲り、肺を病みて歿す。論戰に從事せざるも、夭死せずと限らず、怠惰なる肺病患者もあれど、渡邊に肺病の系統なきと、課業の餘暇に論陣を張りしとを以て病因を過度の勉强に歸するも不可なし。今少しく速力を減じ、若くは負擔を減ぜば、長じて有用の材と爲りたるべし。山口出身の事とて、現に仲小路を凌ぎ、寺內に次ぐの勢あるべし。

渡邊と同年に卒業し、同時に權少書記官と爲りし山田喜之助は、斯く過度の勉强なきも、才を恃むの餘り、不攝生にて頭腦の健康を傷ひ、伸ぶべくして伸ぶるを得ざりき。衆議院書記官長と成り、次いで司法次官と爲りし時歲四十、其比例を以てせば官吏としても、政黨員としても、重きを爲すに足るべく、而して五十五にて歿する迄、全く蹉跌の生活なり。親戚に相當の人ある筈なるに、彼れ歿して將に五週年ならんとし、尙ほ墓石の立たざるは何ぞ。彼の才なくして彼れ以上の位置を占むる者數人に止まらず。今日生存する所を以て言へば、二十一年卒業の柴原龜二は在學中に第一の才物を以て目せられ、養父は三縣令の一なる柴原和、到達する所測るべからずと見えしに、才を用ゐるの宜しきを得ず、同級の平沼が現に檢事總長として司直の重き任にずるのみならず、二十一人中の二十人が皆な相應の位置を占め、獨り彼れ柴原が殆んど居る所を知られず、唯だ最近の總選擧に出でて失敗せしと聞ゆ。少壯才を恃み、頭腦の健康を傷へば、殆ど治療の途なし。過度の勉强と過度の放蕩と氷炭の差にして、頭腦の健康を傷ふは一なり。

過度の放蕩は言ふに足らず、寧ろ一種の精神病となすべく、而して過度の勉强は惜むべし。勉强とせずとも死するならば、寧ろ勉强して死する方、生き甲斐ありたりとせんが、勉强を加減せば、身體を維持して效力を同くすべし。顏回が二十九歲にて髮白く、三十二歲にて歿せしは、生來蒲柳の質ならんも知り難きが、季康子が「弟子孰爲レ好レ學」と問ふに對し、孔子が顏回を以て答へしに徵し、其の學問に勵みしを察すべく、而して一簞食一瓢飲にて樂みしこと、營養不良を來さずとせず。

屈平が汨羅に投じて死せる、老衰の如く考へらるゝも、二十九歲との說あり、其の年齡にて國政に與かり、離騷九章等を作りては、能く神經衰弱に陷らざるを得べきか。湘水を渡りて屈平を弔ひし賈誼は、十八にて詩文を以て、郡中に聞え、二十餘にて諸老先生と共にし、公卿に列せんとす、其の策

論のみにても尋常の勞ならず、三十三にて逝きしは、果して衰弱の結果ならざるべきか。此類の事は世として之れなきは無し。カルクホワイトは十三歳にて詩を作り、ケムブリッヂ大學減費生に選ばれ、二十二にて歿す。本來壯健ならざるに、大學に優等を期して勉强し、能く目的を達し、而して倒れたり。少年詩人の死せしとて一世の同情を引き、スーゼイが其の傳を作り、實に倒れて已みしなるも、其の已むや餘りに早く、作詩の分量も少し。之に似たるは少からず、キーツの如き、其の比較的最も發達せし者にて、二十五歳を以て終りし割合に分量多し。大抵詩人文人は體格健康ならず、中には健康にして過度の勉强の爲めに倒るゝあり。

スコットは體格强健にして運動を好み、文學に從事せるは三十を越して後の事、大器晩成の資を備ふ。愈々小說執筆するこそ三十餘なれ、幼時より友人に昔話を語り、文藝の能力あり、專ら之を事とせば、老いて益々壯、能く晩成の實を示したらんが、會社に關係して連帶責任の下に債を負ひ、之を償却するが爲めに全力を小說に致し、月に一卷の比例にて出版し、遂に極端なる神經衰弱に陷る。誓つて負債を償却せんとし、力の限りを盡くせるは、實に稱揚に餘りあるも、已れの力を過大視せし跡あり。實業界に實業習慣あり、文藝を以て實業界の責任を果さんとしては、負擔し得ざる所を負擔するの餘儀なきに至る。百貫を負擔する馬とて、遂に限りあり、餘りに多く負擔せば中途に倒る。スコットは實業に携はりし以上、實業界の習慣にて責任を果すべく、文藝を以て之を償却せんとしては、そは粗製濫造を免るゝを得ず。何の能力あるも、一方に大金を造り、一方に傑作を出だすは、負擔に過ぐ。スコットとして實業界に負擔を償却するの天職なるべきや、將た文藝界に傑作を出だすの天職なるべきや、彼は之を併さんとし、寧ろ粗製濫造を辭せずして、大なる負擔の下に挫かる。

スコット同年に死し、而も之より二十二年前に生れしゲーテは、斯く切迫せる境遇なく、其の境遇に陷るも强ひて作物を以て負債を償却せんとせざるべく、恐らく或る貴族富豪に依賴して償却すべし。彼はスコットの如き武士氣質なく、寧ろ之を野暮とすべく、義務心の强きに於て之に及ぶべくも無きが、其の沙翁以後の詩人と稱せらるゝは、長命に負ふこと少からず。若しスコットと同じく六十二にて終りたらんには、今日人の重んずるが如きを得ず。ファウストは二十三四歳より思ひ立ちたれど、之を完了せるは八十三歳の時、實に死去數月前の事なり。シルレルが四十七歳に歿し、殆ど之に拮抗するは、速力の優れる者にして、ゲーテが同齡にて歿せば、文藝的生涯の四期の二を卒へ、第三に入れるのみにて、第三の大部及び第四の全部を失ふべく、其の福を得、祿を得、壽を得たるは、文藝に成功せる所とす。短命にして天職を果せば、長命にして天職を果さざる者よりも世に貢獻すること多きが、幸福を享受する點に於て如何なるべきや。

ラファエロは三十八にて歿し、多作にして且つ傑作に富むこと、殆ど他に匹敵する無く、長命せば更に傑作を遺したるべきも、彼の如くにて充分なりと謂ふべし。されど壽を得ざるの不幸を認めざるべからず。

チチアノはラファエロに先んずること六年にて生まれ、之に後るゝこと五十六年にて歿し、實に百歳の長きに亙り、畫く所六百に上る。百歳まで努力せしはチチアノ畫界に傑出する所以にして、ラファエロが其の半分に足らざる壽命を以て之に匹敵し、寧ろ之を凌駕するの勢あるは、如何に努力の猛烈なるかを表明し、繪畫卽ち生命、生命卽ち繪畫、天職に於て百歳の壽命を得たるに同じく、尋常畫家の千歳を得たるに異ならず。されど是れ普通人士に望み得る所ならず。普通には此類を以て人間以上とせずんば人間以下とし、人間としては、己れの天職以外に多少の餘裕あり、人間と同樣に苦樂を分つを欲す。チチアノの如く百歳まで壽命を保てば、如何に努力するも相應の餘暇を得、能く人生の愉快を感じ、或は尋常よりも多く之を感じ得たるべし。されどチチアノが百歳の壽命を以て有らゆる人生の愉快を感じ得たりとし、其の百歳の果して賀すべきやは疑ひなきに非ず。百歳に達して疫病に罹るや、從者は其の財産を奪掠して去り、彼れ之を奈何ともする能はず、苦悶の裡に死せり。彼の如く老齢に達し、而して從者に斯く取扱はるゝは、老衰して適當の判斷を失ひしに因るか、老衰せざるも平素の心掛けの足らざりしに因るか。從者は言語道斷の次第ながら、彼の如く死しては、晩年の程も聊か察すべし。過度の努力を以て健康を傷ふは、豫め警戒を要すると同時、能く長壽を保つ者も其れ相當の心掛けなかるべからず。

チチアノは業績に於て何の不足なく、實に百歳を最も善く活用したりとすべきも、日常の生活狀態に今一層注意を拂ひしならば、別に觀るべき者ありたるべし。短命にして大家と爲ることラファエロの如きは無く、長命にして大家と爲ることチチアノの如きは無く、多くは其の中間に在り。生來精力に多少あり、常人に倍するの勞作に堪ふるあり、常人に半するの勞作に堪へざるあり。精力の多き者も、養成すると養成せざるとにて差違を生じ、養成して之を增進する者も之を發揮するの宜しきを得ると否とにて結果を異にす。馬術に長ずる者は馬の性に應じ、其の最も宜しきを制するが、尙ほ時の必要に迫られ、馬の性に違ふこと稀れならず。急用ありて急行せんとし、頻りに鞭ち、謂ゆる乘り倒すことあり。巨大なる材木を運ばんとし、馬の進まざるを怒り、鞭韃して途に斃れしむるあり。さりとて馬の疲勞を恐れ、其の休息する儘に任かせば、用務を果さずして終らざる能はず。

歴史に顯はるゝ人物は必ずしも能力の優れるに非ず、何等稱すべき徒輩の世に知らるゝあるが、事功の稱すべきは多く生來能力の優れる者にして、之を使用するの如何は殆ど全く運不運に歸す。ラフ

ァエロの如き、チチアノの如き、共に本來大なる能力を備へ、能く之を發揮し得たるも、眞に之を使用するの巧みなるを得たるやは疑ひを免れず。ラファエロは攝生して二三十年を延壽し得たるべく、チチアノは百歳の老翁を以て福祿壽を圓滿にし得たるべしと思はるゝが、如何にや。何人も運不運の伴ひ、幸福を以て其人の巧みに歸し難く、不幸を以て其人の拙きに歸し難たし。されど偉大なる事業を成し遂ぐる者は能力發揮の加減に於て比較的巧妙なるは言ふを待たず。

ジョージ・スチーヴンソンが貧家に生まれ、丁年まで文盲にして、後ち努力黽勉遂に世界の交通機關を一變せること、大部分は己れの能力の使用如何に歸すべきが、其の就業者を戒めて「吾の如く努力せよ」と曰ふは事業を以て努力に在りとせるなり。然るに人の過度に努力するを見るや、又た其の無益なるを戒む。リンドレーが孜々勞作し、疲勞の跡あるや、之に注意して曰ふ、「リンドレーよ、一磅より三十志を得んとするは無理、吾は助言を與ふ、仕事を捨てよ」と。其の常人に幾倍せる事業を成就せるは他人の及ばざる才能を備へたるに依るも、能力を使用するの手加減を得たること最も多く與かる。大なる能力を備ふるとて、之を不適當の方法を以て使用せば、乘馬を駄馬にし、駄馬を乘馬にするに異ならず。

適材を適處に置くと云ふの事理明白なるに拘らず、不適材を不適處に置くが爲に精力を無益に費すの幾何なるを知らず。已れ自らの適材を適處に置くも困難、人の適材を適處に置くも困難、充分に適當なるを得ずとも、多少適當なれば其れ丈け良結果を得べし。古來馬を相するに就て種々の注意あり、呂氏春秋に

「古之善相レ馬者、寒風相二口齒一、麻朝相二頰子一、女厲相レ目、衞忌相レ髭、許鄙相レ眦股一、代楊相二胸脇一、管青相二廣脰一、陳悲相二股脚一、秦牙相レ前、贊君相レ後、凡此十人者、皆天下之良工也、其所二以相レ馬者不レ同、見レ馬之徵一也、而知二節之高卑、足之滑易、材之堅脆、能之短長一」

といひ、埤雅に

「相レ馬之法、肝欲二其小一、耳小則肝小、肺欲二其大一、鼻大則肺大、脾欲二其小一、脇小則脾小、心欲二其大一、目大則心大、上唇欲二其緩一、下唇欲二其急一、上齒欲レ鈎、鈎則壽、下齒欲レ鋸、鋸則怒、脊欲二大而抗一、額欲二方而平一、喉欲二曲而深一、胸欲二直而出一、兎腋虎口、皆欲二其開一、深肉輔肉、皆欲二其大而明一、耳欲レ如レ劈レ竹、睛欲レ如レ懸レ鈴、頭欲二高如一剝兎一、頂欲二起如一飛龍一、望レ之大、就レ之小、筋馬也、望レ之小、就レ之大、肉馬也、前視見レ目、旁視見レ腹、後視見レ足、駿馬也、毛束レ皮、皮束レ筋、筋束レ肉、肉束レ骨、五者兼備、天下駿馬也」

とあり、人の性格は馬よりも甚だ複雜にして、之を相するの困難なるは言ふを俟たず。皮日休が

「今之相工、言二人相一者必曰、某相類レ龍、某相類レ鳳、某相類二牛馬一、某至二公侯一、某至二卿相一、類二禽獸一則富貴也、噫、立二形於天地一、分二性於萬物一、其貴者不レ過レ人、焉有下眞人形而貧賤、類二禽獸一而富貴上哉」

といへる、則ち然り。されど人事は馬事に比して極めて複雜なりといふ迄にて、根本に於て相違ふべきに非ず。

馬を以て人に喩ふるの普通なる、實に進退に於て同一原理に基づく所あるに因る。列子に「得二之於御一、應二之於轡一、得二之於轡一、應二之於手一、得二之於手一、應二之於心一」といひ、論衡に「御二百里一之手、而以調二千里之足一、必有二摧レ衡折レ軛之患一」といひ、尸子に「夫馬者、良工御レ之、則和馴端正、致二遠道一矣、僕人御レ之、則遲奔毀レ車矣」といふの類多し。支那には夙に馬を使用すること多く、之を比喩として廣く世に解せられたるなり。

ゲーテは犬馬を歎美して曰ふ、「犬の智慧を以てして手を使用する能はず、馬の忠勇を以てして蹄を開くこと能はず、憐むに堪へたり」と。

古來犬馬の勞といふが、若し心を執るの善良なるよりせば、犬馬は多く人に讓らず、時として常人に優ること遠し。中にも馬は力を人に藉すこと多く、人が馬に施すの恩惠と、馬が人に施すの恩惠と孰れの大なるやを言ひ易からず。馬なかりせば、農工業の進歩の能く今日の如くなるを得たるやは疑はしく、戰場に於ける成功の大部分に歸すべきこと少からず。日露戰役後、馬を弔はんとする者あり、曰く、「戰場に馬の功を立てしこと莫大、而も其の戰死せしは捨てられ、其の生存せしは還りて農家に賣られ、悉く人の功と爲る、須らく馬の爲めに弔はざるべからず」と。

今日の處、椽下の力持は馬を以て甚だしとす。されど歴史上の英雄豪傑は概ね人を犧牲に供せし者にして、「一將功成萬骨枯」とは實に人と馬と共に捨てしを意味す。單に兵卒が骨を戰場に曝らすのみならず、農工商が苛斂誅求の爲めに離散する者、勝へて計ふべからず。「犬死」は徒らに死するを云ふ者、「馬死」も此と同一にして、共に憐まば憐むべきも、人にして犬馬と運命を同じくする者あるを掩ふべからず。士が農工商の上位にし、農工商が奴隷の如く取扱はれし時に較べ、農工商の位置を高め來れるも、尚ほ相當の勞作を以て相當の敬意を拂はれざる者多し。同じく商、同じく工、同じく農にして、或る者は多く勞せずして大に富み、或る者は終身勞作して衣食に窮す。人にして犬馬の勞を效す者多し、犬馬の勞を效す者が國家社會に貢献する所の認められて然る後眞の犬馬が眞の價値を認めらるべし。從來とても馬にして人よりも待遇の宜しきを得る者あり、孟子に「庖有二肥肉一、廐有二肥馬一、民有二飢色一、野有二餓莩一、此率レ獸而食人也」といひ、今日にても此と同樣の事あり、人にして名馬の食

住に及ばざる者多し。人より馬を厚遇するありとし、馬の人に益を與ふることも常人に過ぐる無しとせず。人に益を與へつゝ、遂に獸類として捨てらるゝを免れざるは、待遇如何の必ずしも人に於ける益不益に準ぜず、動物間の人閥の禦ぐべからざる所にして、何の功勞あるも、必ずしも以て相當の位置を占むるを得ず。人類間に閥の嚴重なる時代、動物の功勞を考へざるは怪むに足らず。彼の良馬を優遇するが如き、亦た實に其の持主なる人に對しての事、單に馬として馬丁の虐使する所と爲るの常なり。日本は七百年來武士時代にして、武士は乘馬を必要とし、馬の性を知りたれど、人を教育するの知識に長ぜず。

教育家なる儒者は武士と趣を異にし寧ろ机上に經を說き、乘馬の必要を感ぜず。馬上に天下を取るも馬上に天下を治むべからずとし、隨て馬の性を知らず、日常の談話に馬を引例すること少し。農家に馬を使用し、馬の性を知る者あり、鹽原多助の馬の如き、講談及び演劇に人の涙を絞らしむるが、今こそ馬の數を增したれ、前に牛を使用すること多く、馬を使用するに於て支那に劣り、馬を御するの法を以て人に對する術を說くの普通と爲らず、動物を良遇することも支那に若かず、又た固より牧畜を重んずる歐洲に若かず。封建時代を去ること近く、閥の觀念の人に固着する所あるが爲めとすべし。乃木大將は性慈仁、少しく阪に掛かるや、車より下りたれど、封建の遺習に據り、最も重きを士族に置き、其の言ふ所を聽き、士族以外の言ふ所を信ぜず、商人と言へば悉く卑劣漢の如く考へたり。實に卑劣漢の多く、一概に乃木の狹隘を咎むべからざるが、既に四民の障壁を撤廢し、國家を擧りて進步發展を期すべき時代、尙ほ士族を信ずること厚かりしは、如何に人が閥に拘泥するかを示す。

人類間に斯く閥を設けては、動物間に階級を分ち、人類以外を輕んずるは勢の然るべき所にして、唯だ能く動物の性を知る者は動物を愛護することを知る。最も多く動物に接近する地にては、之を虐待することを避け、動物を使役し、其の肉を食ふも、成るべく其の苦痛を減ずるに務む。而して動物の性を知るに伴ひ、之を人事に交へて考ふること多し。支那は土地に依りて差異あれど、動物の知識に富み、「牧民」といひ、「統御」といひ、動物を以て人事を律すること少からず。日本は軍備擴張に伴ひ、馬の數を多くし、其質を良くし來れるが、軍事と關係多く、市井に關係少く、其の漸く多きを加へ、馬車の增加せんとする時、電車出で、自轉車出で、自動車出で、或は軍事にも自動車の最も重きを占むるを見んとす。

馬は日本に於ける一の重要問題にして、歐洲の馬を視る每に我が及ばざるを歎じ、如何に馬匹を改良すべきをか考へ、既に着手せる所少からず。されど我が改良を全うする頃、馬の必要を減ずるの恐れなきや。

動物か器械か是れ世界に於ける重要問題に屬し、器械の進歩に伴ひ、就業人員を減じ、人が甲業より乙業に移り、器械に取りて代らるゝが如く、軍事に、農事に、器械の數と馬匹の數と反比例せざるべきや。塹壕戰に裝甲自動車が騎兵より效用多からざるや。全く馬の效用を失ふこと無く、常に多少之を必要とするも、器械の進歩に注意せざれば、將來に失望し若くは悔恨するが如きこと無きを保せず。馬の柔順なるは器械の意の如くなるに若かず、馬の疲勞を感ずるの器械の之を感ぜざるに若かず、但だ何の日に器械の斯く進歩するやが疑問なり。日本に於て從來の方針に依り、馬匹を改良し、寧ろ之を速かにせんとするも、別に力を器械の改造に注がざるべからず。之を併せて宜しきを得るか、又は其の一方に偏するか、抑々其の中間に惑ひ、孰れにも宜しきを得ざるか。今よりも馬の知識に富み、馬を以て人事を推すべきか。今よりも器械の知識に富み、器械を以て人事を推すべきか。斯くて馬に關して到底大陸諸國若くは英帝國の如くに至らざるも測り難けれど、馬は最も人に親しき動物にして、依りて人事を推すこと、馬の歳に興味なしとせず。

# 文化的ナポレオン

臺灣をコルシカに較べ比律賓をサルジニアに較べるのは無理と云ふ事は出來ぬ、コシルカは面積に於て臺灣の四分一、人口に於て其十分一、而して小さい割合に高い山があり、實に高さ九千尺に達し、四時雪を頂く、新高山の一萬三千尺を超ゆるに及ばぬけれど、一特徴とするに足る、種々な歴史がある事も似て居る、後にゼノア人が領有し、千七百六十八年佛國に讓渡し、翌年茲で將來のナポレオン一世が產れた、若し島が尙二三十年間佛國に有せられなんだならば、ナポレオンの傳記が全く趣を異にし、延いて之に關聯する歴史を變じたらう、島が佛國の領有に歸し、其翌年ナポレオンが產れた丈けの爲、ナポレオンが佛國で活躍し、王位傳承に騷ぎを起した、島がゼノアに屬して居つたならば、ナポレオンは伊太利に成長したであらう、若しバウリの下に獨立し、其儘で續いたならば、ナポレオンは生涯の大部分を島の內で送つたかも知れぬ、ナポレオンの祖先は佛國となんの關係なく、唯彼自ら產れた時佛國の籍に入つて居り、夫れで佛に渡り、其處で教育を受け、佛人と共に活動し、到らぬ處がなかつた、ナポレオンは伊太利で成長しても何か尋常に勝る事を爲したらう、佛國は革命を起し、

君主を死刑に處し、外國の平涉に屈せず、ナポレオン無くとも目覺しき事變を起したに相違なけれどナポレオンの爲に所謂驚天動地の戰亂を實現したのは認めねばならぬ、ナポレオンとて佛國以外に彼の如く手腕を延ばす事が出來なかつたらう、伊太利の兵を以てし墺地利の兵を以てし、どれ程戰得たらうか、多年特權階級の壓制に苦しみ、熱し切つた蒸氣が迸る勢に乘じ、滊車も無い時代に露國のモスコー迄遠征するを得た。

東洋の形勢は當時の歐洲とは大變違ひ、似ても似つかぬけれど臺灣が、支那に屬すると、日本に屬すると、島に產れた人が出で〻多く力を延ばし得るが、支那に屬して力を延ばし得ぬではなけれど、現在の支那では頗る事の困難を覺えるであらう、近頃奉直兩軍が衝突し吳佩孚氏が勝を得たけれど、夫れでどう云ふ結果になるか、支那の狀態にては尙幾十年か掛つて喧嘩するを免れまい、後になんとか片附くに定まつて居つても、纏つた仕事を爲すに難からう、日本でも功名主義なるものが餘り面白さうに感ぜぬにせよ、兎も角も相應の力を以て世界に接觸するの機會が多い、五大國の一とか三大國の一とか言ふのは、言ふを値せぬ事だが、力有る者は力を展ばすの機會あるを打消す事が出來ぬ、今日ナポレオンに習ふなど、時代錯誤も甚だしく、實に夢のやうな話なるが、日本で力を延ばすの機會を得、東洋に力を延ばし、更に世界に及ぼす事は決して不可能の事とせぬ、唯時代は既に變じ、單除を以て征服するなど想像するのみでも間違つて居る、ナポレオン一世の事業は屢々戰勝を得たのにあるか、法典を編纂したのにあるか決し難いと言はれる、夫れ程迄法典を重んず可きかの疑あるも、劍の外に力を延ばす可き餘地あるは疑を容れぬ、ナポレオンは佛國人の崇拜物であるけれど、嘗て或新聞の偉人の投票を募つた時、細菌學者パスツスルがナポレオンの上になつた、一時の戲れと言はゞ言へ、學術的研究が夫れ程に重きを爲して居る。近來臺灣に產れ日本內地に敎育を受け、成績の好いのが次第に多きを加へつゝある、學校は必ずしも人物を作らぬが、是或は臺灣に產れ、大いに力を延ばす可き者あるを暗示するので無いか、近年英雄豪傑の價値が減じ、古英雄に私淑するを好まなくなつて居るが、尋常に勝るの力を延ばすは、國內國外に利益を及ぼす所以である、武力的ナポレオンは既に過去に入つた、而して世界の文化に貢獻し得られる米國黑人間に、ガベー氏が盛に運動し、印度人三億の間にガンディ氏が盛に運動して居る、是世界の氣運の動く處でないかどうか。

# 西郷隆盛とガリバルヂー

## 第一　古英雄の再現

如何か是れ英雄、議論百出、紛々として未だ歸一する所あらず。而も英雄といふ語に、漠然ながらも人の頭腦を刺戟する何者かあるべく、地の東西と時の古今とを問はず、其の事殆ど一轍に出づるが如く然るもの、寧ろ奇とすべきなり。夫の大事業を爲し、若くは大戰爭を爲しゝ者の、大英雄として崇めらるゝこと稀ならざるも、概して何處となく物足らぬ感無きに非ずして、普通に人の理想なりとし描き出す所は、功業の遠く衆に拔くあるの外、幾許か人寰の上に出で、世俗の妄執を超脱せる所無かるべからずと爲す。此の如きは多く之を實際に求むべからざるも、英雄として必ず此の資格あるを要すべく、彼の邈漠の古代に在りて、此の種人物の絶えず輩出したるが如く見ゆるは、必ずしも古人の今人に優れりしに非ず、瑕疵ある所堙滅して傳はらず、唯其の偉大なる箇所のみ今に存して、人之を尊敬崇重するのみ。若し其の實際を求むる、則ち意外の失を摘發し得る、何ぞ之れ無しとせんや。

然るも眞の古英雄とし描き出さるゝ所、即ち比較的純性の發露せる所は、自ら英雄の理想とし認むべく、而して此に近似せる者の出づる、往々にして之れ無きに非ず。

伊尹太公は、千載の下尙ほ其の遺風を欽せらるゝ者、初よりして秋毫己れの爲めに求むる所あらず、蒼生の爲めに奮然として起ち、功成る、即ち人間の事止むと爲したるやに想はるゝが、歷史の事實に於ては能く其の然る所以を見るに由なく、俗寰に脫然たるが如き、寧ろ其の闕く所に屬す。降りて魯仲連の如き、張良の如き、榮達必ずしも志願に非ずして、稍々私なる慾念に遠ざかれる所あり。其の後諸葛亮あり、支那帝國中古の偉人として、盛名今に至りて泯びず。進退の度、去就の節、公明にして正大、正々として堂々、洵に以て後世の鑑と爲すに足れりき。但だ是れ亦往代の事、近世を距る既に遠し。事の詳細なるの得て知られざる、或は以て幸とすべき所なりと爲さゞる能はず。轉じて希臘羅馬に觀る、其の半神半人として崇敬せらるゝ者、多く此の類にして、シンシナタスの如き、千歲の間西人の等しく欽仰して措かざる所、天下事無き、即ち麋鹿と伍して田園に高臥し、一旦緩急ある、即ち鋤犂を投じて劍を帶び、禍亂鎭定して國家再び靜謐なるに至れば、乃ち復野に下りて耕耨を事とし、淡然として求むる所ある無く、今日よりして之を觀る、洵に以て偉とするに足るべきも、歷史の傳ふる所に虛飾多く、若しニーブールの指摘せし所を以てせば、全然無根の事實にして、毫も信を措

くを得ずとせらる。

古英雄とし人の腦裏に描き出さるゝ者、多くは世人の想像に止まるべくして、之を實際に觀んことは最も難く、人品の或は之に近きも、事功の之に伴はざるあり。事功の稍々稱するに足るも、人品の之に副はざるあり。眞に英雄なりとし、歴史の崇敬を惹くに堪ふるは、百代に一人を難しとすべく、只後世華盛頓の如きは、良々之に近き者、近代に至りて世態益々複雜と爲り、復古の單純なる動作を以て立つべきに非ず。乃ち所謂古英雄に近似する輩の者の輩出するを望む、豈亦得べけんや。然るに何ぞ圖らん、前世紀の中葉に於て、之に近似せる者、東西各々一人を出ださんとは。顧ふに此の如き素是れ時勢の促逼せるを多しとすべく、此の時西には彼れ伊太利の統一あり、東には我れ日本の統一あり。俱に前古稀に見る所の一大變革にして、彼には乃ちガリバルヂーを出し、我には乃ち西郷隆盛を出しぬ。

ガリバルヂーと西郷とは、不思議にも其の時を同じうして出でぬ。但だガリバルヂーや西郷より二十年前に生れて、之より五年後に死したりき。彼には才藻の絶妙なるあるに非ず、功業の絶大なるあるに非ず、事業家としては失敗多く、將軍としては、戰に長ぜりとせず、且つ又劣情弱點のなきに非ず。而も其の人と爲りや自ら一種氣品の高潔なるあり、山高く水長く、人其の風を聞いて貪も廉に懦立たんとし、ガリバルヂーの名は洵に天下の人士をして意を強くせしむるの概あり。若し其の才を以てせば世界の廣き、彼に優る者數ふるに遑なかるべく、若し功を以てせば、億兆の多き、彼に優る者數ふるに遑なかるべく、而も英雄の英雄たる所以に於ける、彼れ固より古今を上下して些の遜色あらざるなり。西郷亦然り。世の一般に西郷を重しとせるは、無意味の事に於てすること多く、殆ど平凡稱するに足らざるを偉として、推服し景慕し崇拜する無きに非ざるも、而も其の之を偉とする、常人の到底企て及ばざる所と信ぜるあるを疑ふべからず。只我邦の事たる、多く世界の耳目に接觸せず。是を以て西郷の名、ガリバルヂーに比して頗る劣るあるも、其の氣魄の雄大なると行動の豪爽なると幾ど彼を凌ぎて餘りあるべく、固より一長一短は數に於て免れずと雖も、若し前世紀に於て、古英雄に類する最も近き者を擧ぐる、卽ちガリバルヂーを推すよりも、寧ろ西郷を推すべしとせん。我邦近代に至り、人物の輩出せる、斗以て之を量るべきも、之を歐洲諸國の偉人に比するに、概ね其の下に掩蔽せられて爲めに光輝を失ひ、人物の存在すら認むべからざるあり。大久保、木戸、高杉、大村の類も、之をビスマルク、ゴルチヤコフ、モルトケに比すれば、言ふに足る無く、大隈、板垣の徒も、グラッドストーン、チェールの爲めに鞭を執ると雖も可なるべく、議院に於て如何に壯快の擧動を爲す者ありとも、ガンベッタの爲めに顏色を失はざる莫かるべく、其の他如何なる方面に於ても、彼には

常に倍大せる代表者あり、我れ殆ど彼に雁行だも爲し能はざるなり。然るもガリバルヂーを擧ぐれば、是れ或る點に於て西鄕に讓るべき者、ガリバルヂーを以て古英雄の再現、セコンド・ツー・ゼ・エンシェント・デミゴッドとせば、西鄕は少くとも同等に置かざるべからず。

## 第二　起身

ガリバルヂーと西鄕と等しく微賤の生れなりき。系統よりせば、ガルバルヂー少しく優れるが如くなるも、其の祖父及び父は共に船乘りを業とし、彼れ自らも夙に船業に從事したりき。膂力衆に勝れ、骨格太く逞しく、又能く游泳に熟達し屢々人の溺れしを拯ひしことあり。職業既に斯の如くなれば、其の教育も隨ひて一定の規則立てるは無く、只僅かに母の監督の下に在りては日常動作の法を習ひ、又僧侶よりして多少讀書の知識を得し位にて、世の謂ゆる教育の意味にては、彼は殆ど無教育なりしなり。然れども母の感化は極めて大にして、彼常に自ら言へらく、吾が愛國心は實に我母より胚胎しぬ。海陸に危險に遇ふ毎に、信心なる女の神前に拜跪し、其の兒の爲めに祈るを想像する時、髣髴として眼前に之を目覩するの感ありと。西鄕亦狀貌魁梧、崖然則ちガリバルヂーに讓り、巨然則ち之に勝り、巨然として肥大なる所、卽ち他が遒捷なるに似ざりし所なり。教育として擧ぐるに足るなきも當時の教育の程度より觀ば、寧ろ相當なりとすべく、或は藩の學館に入り、或は大久保長沼の徒と日を定めて近思錄を講じ、或は伊藤茂右衞門に就き傳習錄を學び、或は無參禪師に從ひ禪學を修めぬ。家貧にして早く郡方書役となり、心を學事に專らにする能はざりしとはいへ、武士たる教育に於て特に遺憾のあるなく、知識の分量は、西鄕の受けし所とガリバルヂーの受けし所と大差なかるべきも、西鄕や思想粗雜なる諸藩の士に應接して、毎に綽々として餘裕ある迄に修養するを得たりしと謂ふべし。

ガリバルヂーの鄕里ニースは、國勢に於て何等の價値あるなく、彼が事に着手するに當りて諸方を流浪し、蓬累して轉輾せざる能はざりしも、西鄕の生れたりし鹿兒島は、此の時既に優强を養ひ來りて、隱然海内に重きを爲し、而して其の夙に島津齊彬の知遇を受けしは、境遇として頗る順適なるなきに非ず。然るも僅に丁年に滿つる頃よりして、一身國家の重きに任じ、備に世事の辛酸を嘗めしは、二人者共に之を等しくすべく、ガリバルヂーは海に航して、オデッサ、羅馬、土京を巡歷し、千八百三十一年改革後、マルセーユに遊び、マヂニーと親善し、少壯伊太利を組織してサボイ遠征を試み、遂に成らず、軍艦を奪ひて、カラビニエリの砲塞を取らんとし、復も失敗して如何ともするに由なく遂にニースへ奔竄し、捕へられてマルセーユに放逐せられ、再び船手と爲りて黑海チュニスの間を航

行し、轉じて大西洋を横ぎりて南亞米利加に到りぬ。西郷年二十三、藩内繼嗣論の爲めに二分し、一は順當として齊彬を擧げんとし、一は側室と結びて其の生む所の久光を擧げんとし、高崎五郎右衞門、赤山靱負等諸士、側室の徒與を挫かんとし、事露れて自刃するに至りしが、西郷は親しく赤山の別辭を聞き、悲歎感慨措くこと能はず、血痕斑々たる衣に打伏し、泣いて夜を徹したり。幸にして齊彬困難の中に相續すを得、而して藩政漸く改革の途に就きたりしに、藩中尙ほ此に快からざる者多く、頻に妨害を加ふるあるより、西郷も一時決然として君側の惡を清めんと欲し、實に自ら刀を執りて起たんと爲しにき。而もガリバルヂーの如く、爾も無謀の擧に出でざる可らざるの必要に迫られず、たとひ事意の如くならざにせよ、當時海内第一の君主と仰がるゝ島津齊彬に信任せらるゝに及びては、則ち勢可ならずと雖も、猶ほ優に事を圖るに足るべかりき。西郷のガリバルヂーに比して幾許を胸中餘裕あり、綽々として迫らざるが如くなりしもの、固より天性の然らしめし所あるも、少壯時代に於ける境遇の如何に繫れりしも、亦少からざらん。但しガリバルヂーは冒險的動作の已む可らざる丈け、其れ丈け變轉極り無きの間に處して、能く其の危險の技を揮ふを得たり。西郷も冒險の事蹟に富まざるに非るも、等しく冒險にして趣は則ち異なり。之を波に喩ふ、西郷や大濤の山來して層々秩序を失はざるが如く、如何に冒險を試むるも、猖狂の態をなくすることなく、ガリバルヂーや、狂瀾の洶湧して澎湃空を打つが如く、或は泡沫四散して縱横亂飛し、或は渦旋と爲りて旋轉混淪し、其の間自ら亂脈の行動を免れず、動もすれば七顚八倒の奇觀を演ずること之れ無からず。西郷の擧手投足ガリバルヂーに比して慥に一歩偉大なる所あり。而して其の偉大なる所、卽ち比較的凡常の觀を呈する、是れ寔に避く可らざるの事とす。

## 第三　死刑に陷る

世には、西郷を以て死の鴻毛の輕きに比し、成敗利鈍の如何を顧みざる者と爲し、其の擧動の磊落奇偉なる、蓋し前古稀れなる所とするあるも、此の點に於ては一籌をガリバルヂーに輸すべく、西郷が一生の經歷は、時に奇變極り無きが如くに視らるゝ無きに非ざれど、其の中に於て自ら整然たる秩序の存するあり、未だ輕動して無分別の擧に出でしは曾て之れ無く、其の爲す所は固より時勢に惠まれたりしなるべきも、事每に豫め結局の成功を期して進みたりしものの如く、豬突して前後の計を忘るゝに至るは、是れ其の眞面目にあらず。其の萬艱の間に出入して試爲至らざる無く、九死に一生を得て僅に新生面を開き、波瀾あり、頓挫あり、後人をして其の短歷史を通觀して、思考に遑あらざらしむる者、卽ちガリバルヂーに在り。ガルバリヂーの一生は複雜にして急劇變轉、瞬時も底止する

莫く、忽ちにして大空一碧、明澄鏡の如く、忽ちにして陰雨晦冥、一天墨を流すが如く、一たび猛進するや、前後を辨ずるなきが如く、頗る智慮を缺くの觀ありて、而して其の一難は一難を經來るの間、勇氣益々倍加して、奇能縱横に迸出するを常とす。彼れ本國に事成らず、去つて南亞米利加に航するや、時にリオグランド共和國、ブラジル帝國と釁端を開き、干戈方に酣なり。ガリバルヂー乃ち輕舟に駕し、十二人に長とし敵船を擊ちて之を奪ひ、屢々勝を制せしも、時遂に利あらず、重傷を蒙りて身亦擒へられ、牢獄に投ぜられて、顏面をしたゝかに笞撻せられ、適々人の救助するに遇ひ、逃れて虎口を脫し、復共和國の爲めに戰ひ、或は寡兵を以て堅壘を攻め、或は單身敵陣に入りて奮鬪し、或は屢々數隻の小舟を以て優勢なる艦隊に當る等、あらゆる權數を盡しゝも、寡は衆に敵せず、舟は破碎して、其の股肱と恃みし者、或は溺死し、或は負傷し、僅に身を以て岸に遁れ、此にアニタを娶りて妻と爲しゝが、共和國の形勢日に益々非にして、己れ亦一子を擧げ、公私の困迫愈々急に、復策の施すべき無く、去つてモンテビデオに到り、或は家畜を飼はんとし、或は仲買と爲り、或は數學教師と爲る等、專ら衣食の計を爲しゝも、未だ幾くならずして、ウルグェー共和國とブェノゼレーとの間兵爭俄に開始す。共和國乃ちガリバルヂーに委囑し、小艦隊を以て敵の大艦隊をパラナ河に擊たんことを以てせり。而も是れ實に敵が彼を殺さんとの術策に出で、若し一歩を誤る、則ち徒死の外あらざりしに、彼れ能く此の間に處して悠然危局を脫し、以て恥無きを得たりき。其の後共和國益々振はず四百人を一隊とし、海に陸に、經營慘憺、然る後微しく功あり。四百人乃ち共和國中軍隊の首位と爲れり。其の伊太利本國に事あり、報に接して本國に歸りしは、實に斯る地位に在りし時なり。

西鄕は少しく此れと異なり。彼れ素より夙に島津齊彬の爲めに重用せらる。彼は當時の所謂武人なりしかど、自ら劍を拔きて戰ひしこと無く、其の江戸に出でて天下の志士と交游するや、時に阿部正弘閣老として幕權を執り、能く諸藩の說を徵して忠言を納るゝに吝ならず。島津氏の如き、蓋し其の最も善遇せられし者。而して水戸は德川の親藩にして勢威宗家の右に在り、人材の彬々として多士なる、時恰も列國の交通互市に請ふに際し、一藩の中早くも既に議論の一定せるあり、皇室を尊び、幕府を援け、民心を一にして大に海外に當るに在りて、之が爲めに廣く諸藩の有力者と結び各々其の藩主の爲めに說くあらんとせしに、水戸の有力者は不幸にも地震の爲めに死し、阿部亦久しからずして逝き、次いで幕府の基礎漸く動搖して、內には曾て爭鬪の絕ゆるなく、而して端なくも將軍繼嗣の問題玆に起りたり。此の時に方り、幕府の事を用ゐる者、多く紀州を推し、朝廷及び諸藩有志は多く水戸に傾き、兩々執つて相下らず、朋黨比周の增長する所、擠排構陷を事とし、井伊直弼の如き、殊に力を紀州に致しゝかば、紀州遂に立ちて將軍たることを得、井伊乃ち大老と爲る。是より軋轢益々甚

しく、井伊は飽迄國家の統一を信じて、斷乎として政務を執行し、殆ど快刀亂麻を截つの概あり。然れども井伊や、剛毅餘ありて頗る時勢を誤解する所あり。當時幕府の漸く衰運に達し、其の力以て諸藩を壓伏するに足らざるあるに拘らず、乃公ある卽ち幕府を磐石の安きに置くべしとし、一人威嚴を粧ひて徒らに時勢に對抗し、己れの才を恃みて諸藩の浪士を鎭壓せんとし、志士之が爲めに慘禍に罹る者多く、西郷の月照と、「大君のためには何か惜しからん薩摩の迫門に身は沈むとも」といふを辭世とし相擁して海に投じたりしも、實に此の時なり。西郷蘇生して、薩藩幕府に諱む所あり。乃ち以て死せりと爲し、之を大島に流しぬ。其の海に投じて蘇生し、死せりと稱して大島に流されし所、是れぞ西郷の一生をして戲曲的ならしめし所以の第一たるべく、當時他の幾多濟々の志士に比して、之が傳記に波瀾あり趣味あるもの、實に此の事あるが爲めにして、其の人物の常矩を以て準ずべからざる、此の事を以て之を察するに足る。然れども西郷の月照と海に投ぜしは、世人の往々にして議論する所にして、或は之を以て、西郷を義に勇みて遠圖なき者の如くに謗り、或は月照を生かしむる能はず、故に殊更に斯くして死せしめしなりと罵る者之れ無きに非ざるも、而も其の一たび身を海に投じて再び生くるを得、而して遂に流島せられしもの、兎も角、人をして其の凡俗の流ならざるを想像せしむるを所以とす。

然れども西郷の此の一事たる、之がガリバルヂーの崎嶇間關たる酸鼻の生涯に比するに、其の奇は殊に奇とするに足らず。其の一たび溺れて大島に流されしは、ガリバルヂーの南亞米利加に亂鬪せしに當るべく、自ら死地に陷りしは、卽ち一なりと雖も、流島は寧ろ易々の事、天下擾亂し、志士身を容るゝ處無きに際し、悠々として閒日月を樂み、以て讀書に親み、以て思慮を練り、坐して上國の形勢を靜觀することを得たる以上、乃ち流島は西郷の爲めに苦痛たらずして、却て以て偶然の幸福とすべく、今日を以て之を言ふ、寧ろ世事遁れの洋行に幾かるべく、之をガリバルヂーが南亞米利加に於て諸方に轉鬪し、辛酸を嘗め盡して僅に一縷の血路を開きしよりせば、卽ち傳記の材料として、頗る其の奇を減ずべきなり。然るに西郷や、ガリバルヂーの胸中常に切迫せしに反し、其の器局や極めて雄大に、其の氣宇や極めて廓闊に、雄大なる點に於て優にガリバルヂーを拔くある者、境遇亦之を然らしめしならん。西郷の死地に陷りしや溫雅なり、ガリバルヂーの死地に陷りしや粗禮なり。

## 第四　時なる哉

天下の事固より一人の能くする所に非ず、時勢亦自ら然らしむる所のものあり。醫の疾を治むるや、其の術他あること莫し、之を自然に愈ゆるに導くのみ。身體の組織は常に新陳代謝して絕えず健康の

狀態に向ひつゝある者、療治は此に幾許かの便利を與ふるに過ぎずして、手を下すも全く其の效無きあり、施術せざるに漸次に平快に赴くあり。其の匙加減は醫の巧拙の分ゝる所なるべきも、病の愈ゆると愈えざるとは、多くは病者自身に在り。英雄の由りて以て成功する所以に就きて之を察するに、其の勢の爲めに惠まれしを多しとすべく、彼の勢威赫々として天下を壓倒し、功名永く後世を照すあるが如き、自己の能力の與る無きに非ざるも、其の周圍の形勢に促さるゝや洵に大にして常人の認むるよりも一層甚しきものあり。ガリバルヂーは南亞米利加のモントビデオに落魄し、西郷は薩摩の大島に蟄伏し、自ら手を下して企畫經紀する所あらざりしも、勢は突如として變轉し、羅馬法王代り、シシリー謀反し、佛蘭西共和國と爲り、墺地利一揆に苦み、從來專制政治を主張せる者、悉く憲法を發布せざる可かざるに至り、ミラノ人は五日間の激戰の後、遂にラデッキーを放逐し、カルロ・アルベルトは國旗を飜してチシノを踰え、而して伊太利の內部は正に沸騰して、紛亂其の極に達す。ガリバルヂー是に於てか、乃ち初めて歸國を發念せり。西郷の時や亦此の如く、當時幕府の專橫なる、何處迄も其の權力を張らんとし、苟も幕府の意に反して、施政の障害たるべき者は、之を一打掃蕩し復餘類ある無からしめんとし、有志の拿捕せられて獄に投ぜらるゝ者踵相接し、西郷も海島に隱るゝの已むを得ざるに至りしが、此の時俄かに井伊大老の櫻田門外に殺害せらるゝ事あり。國家最上の權力を把握せる者、一朝惚然として白日城市の中に斬られしは、其の天下の人心を風動せるや洵に多く、殊に當時の勢、久しく封建の制に慣れて、人々皆門地を重んじ、井伊の大老たるは列藩の毫も疑を挾まざる所、其の橫死は尋常一大臣の死と同一視すべきに非ず。櫻田の異變は實に天下の一大事變と見るべかりしもの、當時天下雲の如く雨の如きの志士が、之を聞きて如何に跳躍して氣運の到來を歡呼せしやに察するも、以て其の一斑を窺ふを得べく、局面乃ち此に一變したり。而も西郷の此の狀を目擊せしは、彼が正に大島に流竄中の事にして、西郷もガリバルヂーも、等しく睡眠せる間に、時勢は轉輾して進行したりしなり。然れども、來る者は或は去るべく、氣運の二人者に順適なるが如くに見えしも、未だ其の大に雄飛すべき時機に非ざりしこと、後にこそ知られたれ。

ガリバルヂーは新法王の大に救世に意あり、將に墺と戰端を開かんとするを聞き、直ちに之を援助せんとし、往復して知照するの或は時日を遷延せんことを恐れ、八十五人と砲二門とを以て、倉皇として程を起し、大洋を亂りてニースに上陸し、進みてゼノバ、ミラノを擊ち、アルベルトのクストッツアに敗れて墺と休戰せるを聞き、乃ちマジニーと合し、之を謀反者として布告せり。然るもマジニー戰將の器にあらずして、ガリバルヂー亦事意の如くならず、ミラノの陷落を聞きて大に失望し、其の徒與多く瑞西に脫走し、從ふ者僅に三百人、且つガリバルヂー途にして疾を獲、新法王も人心を失ひ、

其の下の爲めに宰相を殺害されて逃亡す。其の後マジニー羅馬共和國を組織し、ガリバルヂー能く軍旅を整へて屢々佛兵を卻けしに拘らず、遂に其の功無く、佛人漸次に侵入して勢猖獗、ガリバルヂー徒與を率ゐて行々二千人を得、アペニン山を踰えて墺の大軍に扼せられ、サンマリノに隱れて一夜敵兵を欺き、船に乘じてベニチアに航し、復墺艦の遮る所と爲り、轉じてラベナの近岸に上陸し、深林の中を漂泊するの際、妻アニタ疲勞極りて死し、平生親善する所の諸友、頻々として逮捕に遇ひ、詰問を經ずして銃殺せらるゝもの多く、自ら遂に擒はれて、檻車ゼノアに送られ、此にラーマルモラが優遇する所と爲り、幸にして衣食に窮せざるを得て、チュニスに到れり。然るにアルベルトの子、ビクトリオ・エマヌエル敗北して墺と平和を締結し、ベニチアを陷落して大に力を失ひ、軻軻落魄、再び大洋を横絶してニューヨルクに著し、或は蠟燭を製して生業とし、或は勞役に服して少許の賃金を得止まること六年、然る後去つてサルヂニアの海岸、岩石島のカプレラの地を卜して微かなる住居を定めぬ。

西郷は藩命に依りて鹿兒島に歸りしが、時に島津齊彬已に歿して久光繼ぎ立ち、藩情一變して往昔日にあらず。小松帶刀、大久保利通等議に參して、氣運漸く將に熟せんとするの勢ありしも、藩論區々にして曾て歸一する所なく、久光の意見、西郷の執りて以て不可とする所のものなり。蓋し久光の意に以爲らく、薩藩を以て朝廷と幕府とを助く、即ち事最も可なるに幾しと、而して西郷や列藩を合同して、廣く天下の有志を糾合し、以て國政を更始一新するに在りしが、斯かる西郷の議は、大に變革を要するの困難事にして、事遽かに行ひ難く、久光の一橋慶喜を將軍の後見とし、春嶽を以て之を輔くるの意見は即ち行はる。然れども當時此の如きの爲す所を以て人心の動搖を鎭靜し、以て逼迫急促して間髪を容れざる中外の危局に當るべくもあらず。海内の尊王を唱ふる者、萬口一聲、必ず一大變革の之れ無かる可らざるを翹望し、所在の勢力ある諸藩、亦多く時勢の必至に鑑みて、漸く此に傾くの趣向あり。是に於てか、其の京師に集來して國事を談ずるの徒、動もすれば急噪して過激の言動に出でんとし、人心恟々、久光最も之を憂ひ、國家を誤る者は必ず此等浮浪の徒にありとなし、成る可く秩序を亂さざらんとして、益々姑息の策を取り、因循して一も果斷の處置に出づる能はず。固より當時の動搖を制する所以に非ざりき。久光衷心誠餘りあり、而して時勢は彼れ竟に之を達觀するの明無かりしなり。西郷や、必ずしも兵を用ゐるの意あらざりしが、當時門閥の徒は概ね謀るに足らず、國力を充實して大に外に向はんとするある、即ち大に志氣を振氣し、新たなる人物と經營を與に俱にせざる可らずして、常に門地ある者を排し、所謂浮浪の徒と事を圖るの狀あり。久光之を見、心に之を快しと爲さず、遂に譴責して德之島に流し、尋いで沖之永良部島に移し、獄牢に投ぜり。西郷は二

年の歳月を幽囚の間を費したり。

之を要するに西郷は一の政治家なり。尋常の政治家を以て目すべからずんば、則ち破格の政治家なり。其の議する所は列藩士の合同にして、其の爲す所は主として志士の間に交遊するにあり。曾て兵を執りて立ちしこと無ければ、從ひて戰場に經歷を有する無く、此の處頗るガリバルヂーと趣を異にするの點たるべく、ガリバルヂーとは如何程少數と雖も、必ず之を兵とし卒とし引率し、事あれば輒ち戰ひ、其の生涯を一箇純然たる武人とすべく、固より時勢の差違は卽ち之れあるも、西郷は深沈にして遠慮あるに於て長じ、事變に臨みて猛進し、豬突して退くを忘るゝが如き、是れガリバルヂーの長とする所にして、西郷の一籌を輸せざる可らざる所、快男子としては、ガリバルヂー實に一の好標本たり。但だ其の島に在るの日に於ては、二人者概ね境遇を等しうし、猛烈ガリバルヂーの如きも、カプレラの閒居に於ては、最も平和に、最も沈着に、悠々耕耨に從ひて、密かに時機の到來を期待せり。通常所謂豪傑とするは、間斷なく事を持續して曾て屈撓の迹を示さゞに在るべきも、二人者の殊絕して群豪に異なる所のもの、忽ち活動して忽ち靜止し、大に力を振ひて一世の耳目を聳動するかと思へば、遽然として身を社會の外に潛めて復時と相關せず、行動時に波瀾の妙を極むるに在るならんか。是れ二雄の特徵なりとす。

## 第五　功成り名遂げ身退く

大に動きて時に全く身を世外に逸し、傍觀して密に之が迹を察す、卽ち其の人に取りて意外の益たること鮮からず。局に當る者は屢々危疑して是非の判斷に苦むことあるも、一たび退きて靜かに變動する所のものも觀る、能く勢の向ふ所を會得し、又兼ねて、己れの何たるやを分明にするを得て、富貴安樂の外、脫然として別に存する所のものあるべく、大悟徹底と迄に行かざるも、其の人生に就き多少の悟入するあるは保證すべきなり。ガリバルヂーが一木强漢の故を以てして、幾許か修養の在るが如くに視らるゝ者、一に彼が隱遁して爰に社會に望み、世俗の繁褥を離れて心を幽靜の界に養ふを得たりしが爲めなるべく、西郷は一般の薩人と略々其の性質を同じうし、寧ろ之を代表者とし指稱すべきも、而も薩人の特質たる深慾にして榮華を貪るの習癖あり。己れ官位にありて何等の爲すある無きも、其の地位を固守して失はざらんことを之れ圖め、外淡泊を粧ひて實は金錢を愛しむこと甚しく天下の猾獪なる薩者人に限るとせらるゝ如くなるも、西郷の此の點に於ける頗る脫落せる所あり。斯かるは先天性に出づるを多しとすと雖も、而も其の孤島の中、必ずや靜修し得たる者あるべく、彼が熱誠の迸發する所、冷淡に國事を看過する如きは、到底爲し能はざる所なるべきも、隔絕せる西南の

一孤島よりし、遙かに上國の變動を窺へば、其の狂奔して或は煩悶する狀の、時には演劇に類するの觀の之を無きに非ざるべく、又自ら之に攜はりて行動を與に俱にするも、必ずしも終始身を此に投じて事に從はざる可らざるの必要無きを悟り、離るゝも離れざるも成功に於て毫も異なる無きを感じたらん。

ガリバルヂーのカプレラに在ること四年、其の間半島の風雲益々急に、佛蘭西とピードモンとは墺地利に向ひて宣戰を布告せり。ガリバルヂー乃ちビクトリオ・エマヌエルに屬し、佛軍の到著せざるに乘じ、自ら手兵を提げてアルプスに進み、佛兵のマゼンタ、ソルノエリノ等に勝利を得たると同時に、ヴァレース、サンフェルモ等に墺兵を破り、ベルンモ、ブレッシヤに進みて、遂にステルビオモの絶頂に達し、而してピラフランカの平和條約は此に締結せられ、夫れよりリゼノバに到りて伊太利統一の策を劃し、マルサラに上陸してカラタヒミに勝利を得、尋いでパレルモを降し、遂にミラッチの一勝殆ど全島を平げ、是よりカラブリアに航し、連戰連勝、サンタマリアを陷れ、カセルタを取り、而して周圍の形勢亦速かに一變し、全權ガリバルヂーの掌中に歸す。伊太利の死命は、今や彼が意志のまゝたるなり。

然れどもガリバルヂーは、當然に行使すべき權力を用ゐんとせず、ビクトリオ・エマヌエルに會し、庶般の國務を擧げて悉く之に附託し、一切の名譽、一切の俸祿、之を拋擲すること恰も敝履を棄つるが如く、飄然として去りて再びカプレラの岩屋に棲遲し、淡然として天然を樂しめり。彼や半生落託、雨に沐し、風に櫛り、屢々危道を踏みて幸に死せず、辛酸嘗め盡して然る後初めて國家統一の功を樹て、己れ寸利を享くるに及ばずして遠く海上に退隱す。是れ常人の爲す能はざる所にして、又豪傑の士の概ね難んずる所、歐大陸人のガリバルヂーを稱して已まざるもの、要は此の爲し難きを爲しに歸すべく、彼は之が爲めに、有らゆる歐洲の人より其の風采を想望せられて、殆ど半神半人の人たるやの感あらしめぬ。是れ西郷が維新の功業を大成しながらも、衣冠を一擲して故郷に歸農し、時に雉兎を逐ひて日の西天に春くを忘るゝの境涯に比すべく、東西英雄の爲す所符節を合はすが如き者あるを異とすべし。

ガリバルヂーは伊太利の統一を圖り、西郷は日本の統一を圖れり。其の統一を圖りしよりして之を言ふ、卽ち二者相異なるなけれど、ガリバルヂーは常に兵力を恃みて之を切り從へんとし、西郷は寧ろ政治家の態度を以て之を遂行せんとす。固より西郷といへども、其の恃むべきは武力なりとし、一日も之を忽にせしことあらざるも、而も其の事を爲すや、遊め謀りて能く利害得喪を稽へ、獨力若し能はずんば、他と聯合してなりとも必ず勝利を期して事に著手し、其の天下の形勢を揣摩する所、頗

る巧みなるものあり。然れども此の處往々にして薩人の代表とも見るべき者無きに非ず。薩人は外朴實にして事を解せざるものの如く、義のある所突進して顧みざるの風なるも、實は利害を見る甚だ敏に、己れの愚を利用して私福を營み、名聞に殉ふるよりも勢に依りて事を爲すは長じ、之が名聞は最も其の勢に適合せる所のものを擇ぶに在りて、初より必ずしも之を重んじてには非ざるなり。西郷は比較的道義の念眞摯の情に富める者、而も其の勢の間を巧みに潜行する所、薩人の特徴を失はず、決してガリバルヂーの如く爾く疎狂なるに非ず。長州人は頗る狡獪の邪智に長ずるが、而も名の爲めには時の滿腹の野心を濺ぎて事に當り、動もすれば名の爲めに倒るゝ事無きに非ず。元治元年長人の兵を執つて京師に向ひし時の如き、實に他に率先して勇進せるもの、若し薩にして尊王の二字を以て事を斷ぜば、此の時を以て宜しく之に和すべき者、而も西郷や之に應ぜず、却て兵を以て之を擊破し紛碎したり。蓋し是より先き、薩長屢々相合はず、時ありて薩或は長に凌がれんとする恐れあり。薩之を快しとせず、機會を得て一たび大打擊を加ふるを欲し、這回の事の如き、實に此の意に出でしものなり。西郷や此を以て毫も幕府を助くるの意なく、一たび長を挫きて然る後之と連合せんと欲しゝもの故に其の既に長を破るや、之が虜を好遇し、又征長の師に從ひて其の議に參し、急速事を了して簡易の處分を行ひ、尙ほ種々恩惠を施し、以て長と結ばんことを謀れり。長は困厄して他と結ぶを怯とし、高杉の徒、殊に薩を罵詈し、降參せば或は許す事もあらんと言ひ、銳氣當るべからざりしに、西郷乃ち從容として答ふらく、降參との仰せに候はゞ降參を仕らんと。長の壯士は、之が爲めに拍子の拔けたる感なりしとぞ。此の時の連合の勢、既に已に周圍より促逼せるもの、薩は暫く長を翻弄したりしのみ。幕府が長に處する所以の道に於ては、未だ十分と爲すべからざりしも、而も當時勢運已に衰微して、飽く迄事を遂行せんとの意無かりしに、朝廷には長の砲彈禁闕に近きしを怒りて幕府の處分に厩き足らず。長亦再び事を起すの用意頻りにして、親藩の士往々當路者の優柔を議して已まず。勢ひ幕府は再び征長の師を興し、膺懲して以て威信を樹つるに從事せざるを得ず、窮厄の中僅に兵を募りて軍を起しゝが、薩は戰の名無きを言ひて之に應ぜず、斷然謝絶して密に思を長に寳れり。幕府の疲弊其の極に達し、兵を出し、糧を裹みて戰ふは更に最も困難事とする所、而して諸藩の募に應じて長防の境に蒞む者、亦死を決して戰はんとする無く、只儀式迄に兵を繰り出しゝのみにて、かの薩にして無名を辭とし之を謝せる以上、之に倣ひて此を以て之を辭せんとする者多く、幕府の苦悶は殆ど言語の外に在り。二百里の外に兵を集むるは、平時と雖も易しとせざる所、戰ふの實利あらざるは分明にして、幕府の識者或は之を知りて之を止むるあらんとせしも、而も勢の驅れる所奈何ともする能はず。第二征長の師興りて幕と長と二つながら苦み、薩獨り力を此の間に養ひて悠揚として笑ひ、乃ち

長を率ゐて諸藩合同の中心たらんとし、西郷等の胸中自ら成竹の在るあり。薩人は單純ならず。

是時に當り、幕府の困迫愈々益々甚しく、必ず果斷英決以て一大變革を要するの秋に逼れり。國事の紛擾日に劇甚を加ふるに、諸藩の間、氣脈の疏通するある無く、三百諸侯各々三百諸侯の心を有して國政爲めに一致を缺き、之を匡濟し之を刷新する、必ずや大政の根本的更革を求めざる能はず。時に慶喜入りて任に將軍職に當る。其の人忠悃にして國事を憂ふる淺からず、又能く時務を知るの明あり、眼勉して治を圖り、鋭意して弊を矯め、能く人言を聽き、遂に政權を奉還して朝廷の下に列藩を會同し、以て庶政を議するに至るの氣勢に及ぶ。然るに幕府に快からざる者、事の爾く容易に行はるるを欲せず。薩は既に其の興し易きを看破し、必ずや兵力を以て之に加へ、以て天下の耳目を一新せざる可らずとす。陰雲漲り黑風催し、天空濛々たるに方りて、乃ち雷霆の轟然震化するを免れず。海内の情勢已に紛擾殺亂す、卽ち一たび血を流すの快擧に出づる無き、以て人心を治むるに足らざるべく、所在の人士皆殺氣を帶び、徒らに髀肉の歎を爲して鬱々たるに於ては、何れにか發散洩泄するの餘地あるを要すとし、勢の向ふ所日に月に明白を加ふ。慶喜の主張する所道理に合し、天下の諸侯と會し等しく國政を議す、卽ち國家の事是より漸く緒に就くべかりしも、殺氣を洩らすの一策は遂に得べからず。國政統一の順序は一定して動かざるも、先づ戰爭に由りて天下の耳目を驚動し、人心を一新して然る後事を行ふの已むを得ざる者あり。事を好むの徒、强ひて幕府の爲す所を妨害し、故さらに會津桑名を激せしめ、遂に鳥羽伏見の戰爭と爲り、而して幕兵一敗地に塗れて、三百年の覇業此に全く墜落し了る。若し其の經る所に就き一々之が名義を正す、卽ち幕府の順序を得たるを多しとせんも、而も霹靂の轟きて天の晴るゝは勢なり。人間亦終生謹嚴なるべからず、時に笑ひ、時に怒り、時に泣くことあり。社會の動靜を胸中に潛め、群陰の積重するや、一震して之を崩す。西郷は理の能動的なる者、ダイナミックなる者か。

幕府の興し易きは、當時苟も常識を有する者の等しく看破せる所なるべきも、而も爾く咄嗟の間に戰爭の起るべしとは、諸藩の多く待ち設けざりし所、土佐の如き實に然りき。但だ幕府に在りては勝の如き、夙に大勢を洞觀し、事の必ず此に到達すべきを豫知し、官軍大擧して東に下るや、早くも策を決し、江戸城を開きて之を西郷に引渡せり。事此に至り、會津に、長岡に、函館に、偶々戰爭の起るあり。唯大瀾の一餘波たるに止まり、毫も大勢に關するある無く、權力果して朝廷に歸し、西郷功第一に居り、而して身故山に歸臥し、暫く政界の風塵を避けて自ら休養す。其の勢の赴く所に由りて進退する所、眞に巧妙の技能あり。固より西郷といへども、其の自ら豫めせずして、知らず識らずの間勢に乘ぜるの多からんも、之をガリバルヂーに比するに、必ず初より大勢に由りて動くことを期し

無謀の擧に出づるは、決して爲さゞる所、而も一世の頽波を既倒に挽回して赫々の功業を立てし所、西郷もガリバルヂーも、共に勢に惠まれたる無くんばあらざるなり。若し勢の爲めに勝てば、勢の爲めに或は敗れん。成功と失敗とありて、玆に初めて人物の眞價を明かにすることを得んか。

## 第六　再び起つ

ガリバルヂーの死せる、タイムス記者之を傳し、且つ曰く、將軍が一切の功業を君王に委ね、榮譽報酬悉く此を辭してカプレラ島に隱退せしは、誠に光榮の絶頂に達せしもの、若し航海の間に破船したるか、或は足再び大陸の土を蹈まざるの決心を以て程に上りしならば、其の一生の偉績は永く冥眇に屬し、世人は應に彼を尊崇するに半神半人を以てし、全く凡俗の慾情を脱離せる者と爲しゝならん、凡俗の慾情は實に神的分子を減殺するものなり、而も惜いかな事は遂に然る能はざりきと。西郷の南船北馬大功を維新の際に樹て、然る後飄然去りて故山に歸りしや、一時の境遇亦ガリバルヂーと相似たるあり。當時西郷にして鄕里に病歿せしか、然らずんば隱退の後再び廟堂に上らざりしならば、必ずや後世其の人物を想像して、襟度の量る可らざるを驚歎したらん。而も是れ亦遂に然る能はざりき。何ぞ兩者の境遇相類するの甚しきや。然れども西郷のガリバルヂーと其の趣を殊にする所亦之れ無きに非ず。ガリバルヂーは素膽大にして敢爲の氣に富めるも、愼密周布の慮に乏しく、進退動止唯一旦の意に料りて決し、忽然として進み、倏然として退き、擧手投足毎に輕卒に失するも、西郷の此と違ひ、一進一退必ず大局の上に於て之を定め、決して苟もする所あらず。故に一代の功績、其の最も重要なるものは卽ち維新の際に在りしと雖も、維新の後に經營せる所、尙ほ頗る觀るべきものありて存せり。

ガリバルヂーは企畫して已むなく、孜々として倦まざるも、其の企畫する所餘りに疎漏に過ぎ、曾て深謀遠慮の在るあらず。西郷や一代の作す所、多く他人の手に依りて設計せられ、時には則ち事意と相背馳するありしかど、而も其の進むや苟もせず、退くや亦苟もせず、一旦敗るゝも泰然として動ぜず、宛も一定せる順序の豫め其の胸裏に存せるが若かりき。維新前の事を以て論ずれば、二人者の功業は殊に軒輊するあるを見ず、或はガリバルヂーの却て古英雄の資格を具備せること多きやの形なきに非ざるも、爾後二人者、共に失意の境遇に沈淪せるの時に方り、均しく失意の境遇に在りて猶ほ擧措行動の大に觀るべきありしは、西郷遙に他に優れり。普通に謂ふ所の名譽よりせば、西郷の傳記は、維新後に於ける行事の虧缺せるを可なりとせんも、其の人物の雄大豪爽なるを表するが爲には爾後の行事の一をも缺くを得ず。其の一代の事業に抑揚頓挫大波瀾を示すの趣あるもの、實に此に在

り。

ガリバルヂーは一たびカプレラに隱退して靜境に居りしが、後議員に推選せられて議場に出でぬ。議院に於ける駈引は其の得意とせざる所、事の不適當なる之より甚しきは莫かりしも、四圍の勸誘止む可らざるありて、遂に口舌を以て議會に爭はんとするに至れり。偶々ガリバルヂーが墳墓の地ニースを佛國に割讓すること、及び其の嘗て將ねたる義勇兵を親兵と合し、組織皆均一ならしむること等の議案、前後して場に上り、彼れ乃ち議會に參して大に討議に從事せしも、議論は元より其の長ぜざる所、カヴールの巧に辯明反駁し、論理的鋒鉦の當るべからざるありて終に自ら言ふ所を知らざるに至り、友人が斯場に討論するの徒勞なるを勸告するに會ひ、鬱々として去りて再び巖窟に歸れり。西鄉は此の若く輕卒ならず、一たび鄉里に還るや復容易に出づるを肯ぜず。乃ち藩政に努力して鄉黨の爲めに盡し、出でて大政に參與せんことを强請する者あるも遽に應ぜず。其の强請せられて尙ほ出でざりし際、實に多少世を遁れんとの心なきに非ざりしが、當時の形勢、未だ直ちに從來の功業を以て甘んじて隱退するを許さゞるあり、又將來を考慮せば更に大に力を致さゞるべからざるあり、且つ此に應ずるには實力の養成を必要とするよりして、藩地に隱退せる間も徒らに優游自適せず、偏に實力の養成に汲々とし、根據を鞏く兵力を蓄へて然る後大事を斷行するの方法を盡せし者にして、其の靜止するや、卽ち大に行動しつゝありしなり。時に中央政府の威信猶ほ未だ遍及せず、加ふに草創の際として、施設すべき事餘りあり。人皆不安の念を懷き、西鄉の勇斷を須つに非ずんば維新の鴻業遂に完成すべからずと爲し、仍て數々人を派して意を致ししも、彼れ敢て動かず。後岩倉の敕命を銜み、大久保木戸等と與に俱に到りて大命を傳ふるに及び、輒ち蹶然として起ちて東上せり。

西鄉既に鄉里を出でて廟堂に登る、果然種々の改革の斷行さるゝあり。鹿兒島に在りて訓練せる五大隊の兵、唯其の一を留め、四を朝廷に入れて親兵と爲し、權力の基礎を玆に定め、次いで政治區々に出でて統一を缺けるに因り、宜しく木戸をして之を綜理せしむべしとの議を提出し、而して木戸の辭退するや、大久保の議を納れ、木戸と相竝びて政務を綜理せしが、實際首腦と爲りて綜理の任に當りしは、卽ち西鄉其の人なりき。是より廢藩置縣の議の決行せられ、徵兵の令の新たに施かれ、帝國の面目益々革まらんとす。斯かるは悉く西鄉の發案に係れるに非ず、又爾く施設するの考慮の豫め彼の腦裡に存せしにも非ず、多くは他人が設計し審議して西鄉の贊成を求めたるものなるも、若し西鄉の此に贊成する微かりせば、其の決行や實に難かりしなり。設計し立案する才は西鄉の缺く所といふと雖も、大勢を達觀して概要を鑒識するの明に至りては、他の輒く企て及ぶ所に非ず。故に議案の出づるに方り、其の條款項目の若きは特に査問するなく、唯大體を聽收して是非を辨識し、時に狀勢に

應じて國家に須要なりと認めて、然る後に一言贊成の意を表す。而して其の一たび贊否を言明する、復敢て事を二三にせざるなり。當時西郷の無からざるや斯の如く、隨て其の負へる威望も決して皇師を率ゐて東下せし時に讓らず。

其の後時勢の推移以外に急劇にして、國事の變替せる、西郷の豫め想察せしよりも更に一層速かなるあり。西郷は大難の必ず起るべきを憶ひ、身を以て其の衝に當らんことを期せり。以爲らく、雜多の事務は他人當に此を爲すべし、時運最も困難なるに際して我れ自ら此に當らんと。乃ち兵力を以て彼の頑硬にして朝命に服せざる者を壓屈せんこと、眞に其の期待せし所、而して周圍の人亦皆此を以て望を西郷に屬せしが、事の實勢は決して斯の如き困難を惹き起すべくもあらざりき。是より先封建の制は既に壞敗の狀を現はし、閥閲者流は唯空位を擁して實務に與らず、實際者務に缺掌者は則ち祐筆足輕の徒にして、夫の維新の時、所謂志士なる者が實權を掌握したりしといふも、決して志士其の人の才力超邁なりしが故に非ず。當時三百諸侯は猶ほ當時の面目を保ちて居然儼立せしも、閥閲者流は概して名ありて實無く、苟も實務の擧げざる可からざるあるに際して其の衝に當る者は、閥閲者流に非ずして卽ち卑賤の地位に在る者なりき。偶々黑船の近海に出沒し、次いで各國の交通を强迫し來りしは、實に此の活動の機會を與へしもの、乃ち內部に潛在せし勢力の、之に促されて遽然として外面に發露し、虛名は其の要を喪ひて、實才ある徒の次第に地步を占むるに至れる者にして、所謂志士なる者が頻に要路に立ちて政務に參畫せしは、卽ち自然の順序なりしなり。斯くして維新の大業成り廢藩置縣の令も容易に行はるゝを得たり。然れども裏面の潛勢は容易に判知し難し。當時局に當る者は猶ほ多く形式の存在に重きを置き、以て難事の必ず發生し來るべしと爲せり。西郷も自ら決心し他人も亦西郷に倚りて剿討の功を擧ぐべきを思ひ、皆風雲一過、然る後維新の大業初めて成就し得べしと爲せり。然るに其の至難と爲しゝ所も、一令にして直ちに行はれ、爾後朝令暮改の憂は則ち之れ有りしも、兵力を假りて違背者を責罰するの必要あること無く、死を以て事に當らんの決心を懷ける者は、事の案外に無異なりしに失望し、空しく刀を敲いて、其の用ゐるべき處無きを卹てり。西郷は初めより此の機に乘じ、軍隊を提げて大に爲す所あらんことを期せし者、而も遂に何の爲す所も無くして已まざるを得ざるに至り、其の養成せし健兒も皆用務無きに苦みて、竊に有事の至らんを望みしが、時に維新の事業漸く其の緒に就き、政府の事務は復往日の如く壯快なるを要せず、寧ろ却つて小心周慮、纖細なる條目を逐うて案を立つる必要あり。從て種々の法案の提出さるゝある、殊に西郷の斷乎たる勇決に須つ所あらざるなり。西郷は大事に當らんことを欲して大事無く、唯日夜纖細なる雜務の處理さるゝを見るのみ。而して纖細なる雜務の處理は、事務の能を抱く者に須つ所多し。爲めに

嚮に己れの小人なりとして軍視せざりし者、案外に手腕を伸ばすことあり。延いて廟堂の上に權力の競爭を生じ、動もすれば己れ自らも、要無しとして外視せらるゝ無きにあらず。

元西郷は官職に戀々として久しく空職を守らんことを望む者に非ず。特に細事の爲めに他の爭鬪し猜疑する內狀を看て、彌々心に快きことを得ず。但だ偶々岩倉大使と爲り、木戸大久保之に副として政府の者多く海外に出で、朝廷の大事皆還歸の日を俟ちて決すべしと爲しに因り、暫く忍びて員に備はりしのみ。然れども當時國家の事、猶ほ正に改革の機運に際せり。若し爲さんと欲すれば爲すべきの事多く之れ有り。更に眼を海外に注げば、多樣の冀望の亦隨て萌生し來る。而して是れ皆西郷の勇斷に須つあるに非ざるは莫し。是に知る、西郷の纖細なる雜務の處理に與るに適當せざりしは、恰もガリバルヂーの議事に短なりしと比較すべく、寧ろ失意の境に沈淪するを免れざりしと雖も、亦ガリバルヂーの如く徒らに喪敗を以て終る者にあらず、其の胸中猶ほ雄圖の遠く尋常人の思想を邁絕するものありたり。

## 第七　進退の機

人事は一律に解すべからず。此の人の性は此の如し、故に其の計畫する所應に此の如かるべしと言ひ、彼人の事を經始せり、故に其の性應に彼の如かるべしと言ひ、性質に料りて事業を察し、事業を見て性質を稽ふ。而も其の眞相を猜し得て能く中れるは多からず。蓋し事や概して四圍の勢に支配され、或る事の經營さるゝ、必ずや幾何か個人の力の顯るゝあるも、四圍の勢の强き、此を掩沒して殆ど見る能はざるに至らしむ。特別に個人の力量の大ならんには、變動の起るに際して彷彿の間に之を認め、以て少しく其の人と爲りを料るべきのみ。人の事業を經營する、此が動機と爲るもの素一にして足らず。强ひて此をして一ならしめんとして互に相爭ふは寧ろ笑ふに堪へたり。ガリバルヂーと西郷とは共に個人として力量十分に外に發現し、其の特色は如何なる境遇に在りても認め得られたるも、只狀勢の變ずる方りてや、卽ち事の心と違へること亦尠からざりき。今夫れ百事創業の時に際し、强ひて改革を計れば、一廢一興一壞一成遂に限りあるべからず。而して紛々擾々の間に處する自ら二樣の見解の在るあり。眼を境外に驚せて國權の擴張を計る、一なり。意を國內に注ぎて內治の改善に務むる、二なり。凡そ國の立つや、獨り離れて存在するに非ず、交るべき幾多邦國の域外に存するあり。乃ち外に對して計る所無かるべからず。然れども、內部の靜謐、國民の安寧、亦須臾も忽にすべからざる所、宜しく意を此に致さゞるべからず。國權の擴張と內治と整理との偏廢す可からざるや明かなり。而して其の偏廢す可らざるは人皆之を知るも、兩者の孰れに傾くかは、實に其の人の性質如何に

よりて別る。試みに人の山水に癖する者を觀るに、同じく風景を愛するも、或る者は清麗の美を好み、或る者は跌宕の壯を喜ぶ。而して其の清麗と跌宕と孰れが勝れるかに至りては、誰人も明言し能はざる所と雖も、其の各々偏する所あるは、則ち孰れかに癖すればなり。之と均しく、國政に臨む者にして、或は內治を先にし或は國權を先にする、必ずしも初めより考慮の熟せるあるに非ず、其の時の勢に依りて是認する所を主張し、却て恰も年來確信する所なりしかの如く見ゆることあり。而して是とて一に性質にのみ因れるに非ず。性質に於て應に然るべしと考へられざる者にして却て爾く傾くことあり、又爾く傾くべしと考へられたる者にして全く之に反するありて、之を多數の上に徵すれば、頗る怪訝すべきものあり。ガリバルヂーと西鄕と亦共に勢の動かす所となるを免れざりしが、其の衆人と同じく勢に動かさるゝの際に在りて、尙ほ個人的特色の顯然たるあるは、卽ち偉大なる力量の存したる所以なりと雖も、其の主張と實行せし所を以て、或は年來の熟思に出でたりと爲し、或は臨時の偶思に過ぎずと爲し、臆測を逞しくする所あれば、恐らくは、人の望むる多きを以てするに失せん。

伊太利統一して國家の事將に更始されんとする時、偶々二派の政黨の議會に現はれたるあり。一を右黨と云ひ、他を左黨と云ひ、而して兩黨更に幾多の小派を包有せり。右黨はカヴール此を綜理し、次いでリカソリー、ファリニー等は早く歿し、セルラ、ミンゲッチ、ヴィスコンチ、ヴェノスタ等、皆黨中の錚々たる者なり。左黨はラッタッチー此が首領たり。初めカヴールと與に俱にせしが、後分れてガリバルヂーの一派と結び、クリスピー、ニコテラ、カイロリーを率ゐて共に立てり。元ガリバルヂーは必ずしもラッタッチー輩と事を共にする者に非ず、而して其の此に至りたるもの別に故あり。ラッタッチー性陋劣にして權數に長ず。ガリバルヂーの名望隆々たるを見、此を利用せんとして頻に結託を計る。ガリバルヂーは豪放な質、思慮粗大にして周密を缺き、能く隱微を洞視して人の心胸を料察するの明無し。是を以て屢々他の利用する所と爲るを免れず。但畢生の主眼とする所は全伊太利を統一して、外に向つて大に國權を伸張せんとするに在り、夫のカヴール派の內治に汲々たると全く相反せり。カヴール派は只管內治の改革に黽め、動もすれば外交に讓る所あり。其の戰勝の後、久しからずして地を佛國に讓與せるは實に之が爲めなり。此に由りて改革の效果の擧り、百事稍々整備に就きしと雖も、其の內治を計るが爲めに外に讓れるあるは、ガリバルヂーの特に不快とする所、ラッタッチーの一輩能く這間の情を察し、乃ち此を挑發して遂に彼に反對せしむるに至れり。是れガリバルヂーのラッタッチーと共に立ちて、カヴールに反抗せる所以なり。ガリバルヂーの主眼とせる所は斯の如く國權の擴張に在りて終始渝るあらざりしが、其の考慮の淺薄にして擧措の輕卒なりしは、寔に憫むべきものあり。初めカヴール歿してラッタッチー權を執り、右黨と結ばんと欲してガリバルヂ

ーに約するに、墺地利と戰ふが爲め一百萬フランを供給することを以てせり。後其の事行はれずして止むや、ガリバルヂー人に勸誘せられ、佛人を羅馬より逐斥せんことを計り、僅に幕下數人を率ゐてシシリーに上陸し、更に少許の壯丁を聚めてカラブリアに渡り、此處に佛兵驅逐の軍隊を組成せんことを期せり。ラッタッチーの事の餘りに暴なるに吃驚し、倉皇師を遣して其の進路を遮り、戰ひてガリバルヂーを傷け、之を捕へ囚置すること數日、終にカプレラに送還せり。當時英は深くガリバルヂーに同情を表し、大醫バルドリッヂを遣りて治療に努めしめ、後ガリバルヂーの英國に來り遊ぶや、非常の歡待を以て之を迎へり。而してラッタッチーの內閣は、ガリバルヂーに對する處置の宜しきを失せるの故を以て終に倒れぬ。後二年にして、普墺の戰起り、ガリバルヂー兵に將として普の爲めに出で戰ひしが、墺兵の敗る所と爲りて傷を被り、且つ病を得てカプレラに歸れり。尋いでラッタッチー再び權を執り、頗るカヴールの外交を踏襲する所あり、以て能く奈破崙帝を欺瞞し得べしとして羅馬を圖れり。是に於てガリバルヂーの子メレッチは法王領の境に義勇兵を嘯聚し、ガリバルヂー自らゼノバに上陸し、更にフィレンツに進みて群集に告示する所ありしが、政府其の言の過激なりとして此を咎責し、捕へてカプレラに送還せり。ガリバルヂー更に遁れてレッグホンに上陸し、再び法王領に迫る。而も法王の兵に加ふるに佛兵の救援を以てするありて、之が爲めに敗られ、失望して又カプレラに歸れり。ガリバルヂー島に在ること三年、偶々獨佛釁を啓きて佛兵羅馬より撤退し、斯くて羅馬は伊太利の領有する所と爲りて、統一の業茲に全く成りしが、ガリバルヂーは遂に最後の功に與ること能はざりき。既にして獨軍連勝、勢破竹の如く、鼓行境を踰えて佛國を蹂躪するや、ガリバルヂー乃ち一種の俠氣に動かされ多年己れを窘めたりし仇敵を援助するの念を起し、島を出でてカムベッタとツールンに會し、兵に將として獨軍と戰ひしが、ベルデルに破られて全軍破衂に歸せり。而して佛人の輕薄なる、却て其の敗衂を怒り罵りて止まず、終にガルバルヂーをして罵言聲裡に退きてカプレラに歸らしめたり。斯の若くガリバーヂは終始兵を執りて國權を伸張するに汲々とし、而して常に失敗してカプレラの巖窟に退かざるを得ざりき。此を以て維新後に於ける西鄕の行事に比する、勢頗る似たるあるも、而も西鄕は決して彼の若く無謀ならざりしなり。

維新の初、西鄕は衆と共に國事に奔走し、頻に國政の爲めに盡瘁する所あり。而して和衷協同は夙よりして既に困難なりしが、西鄕は猶ほ其の困難中に在りて殆ど內閣の中心と爲り、以て改革を斷行するを得たりき。此の時に方り、政治上の意見は區々に岐れ、未だ政派として分立するの甚しきに至らざるも、相互の間に於ける權力の抗爭は亦頗る激烈を極めり。岩倉大使と爲り、木戸大久保伊藤之に副とし、歐米巡回の行を了へて歸るに及び、內治國權の二派遽然として分立せり。實に當時の事情

は多様にして、人の考慮する所は其の面と同じく異ならざるを得ず。其の爭ふ所は獨り海外に使したる者と內地に止まりたる者とにのみ限らず、海外に使せる者は海外に使せる者と相爭ひ、內地に止まれる者は內地に止まれる者と相爭ひ、斯くて木戸は大久保と好からずして又伊藤と好からず。而して井上は財政の困難よりして職を辭し、爲めに頗る騷擾を致し、後幾くもなく征韓の論起り、西鄕は江藤後藤板垣等と議を同じくせり。由來征韓論に就ては疑議の存するもの二三のみならず、人の考ふる所は固より一を以て斷ずるを得ざるも、而も此に贊成するとせざるとは猶ほ幾許か其の人の本來の傾向の現はるゝ無しとせず。西鄕は每に國權を擴張するに意ありし者、其の果して如何なる手段を以て執れの方面に向ふべきやの成算は之れ無かりしも、國家を負ひて大に世界に雄飛せんとの志望は居常髣髴の間に露はれたり。是れ其の人と爲りの然らしめたる所にして、如何にして世界に雄飛すべきかに就ては、明かに計畫の定まれるあるに非ず、唯力を東洋に伸べざるべからざるを信じ、苟も力を伸ぶべきの機ある、卽ち悅びて此に應ずるの狀あり。機を相て勢に乘ずるは卽ち其の長ずる所、勢の來らざる間は茫漠として定まらざるが如くなるも、一たび機の到るを察すれば、乃ち斷じて疑ふあらず。征韓の事を以て、直ちに西鄕が本來の思考し計畫せる所なりと謂ふは大に不可、西鄕の此の議を主張して敢て議る所あらざりしは、此の好機會を利用して以て東洋に雄飛するの手段に供せんとせしのみ。

且つ當時維新の役纔に終へて、武人皆用兵の念に切なるの際、朝鮮政府我が日本人の其の地に在る者を攘斥するの擧動ありと聞く、更に兵を此に加へんとするは其の自然に想ひて到るべき所、是に於て西鄕は一意征韓の切要なるを唱へ、板垣此を贊し、江藤後藤亦此に和せり。而して此の議を主張するに最も黽めしは、西鄕よりは寧ろ板垣等なり。是れ薩長に對して別に工夫を運らせる所ありて然りし者にして、後藤江藤の如き特に然りとす。卽ち大に外征を利用して、以て內地に於ける權力の位置を一變せんとするに意ありしなり。獨り西鄕は彼の如き若き個人的考慮を度外に置き、敵愾の念大に勃發せるの時に乘じて力を海外に揮ふの利なるを判斷して、此に意を決せるもの。而も其の部下よりして見る、卽ち此に由りて大に薩摩の勢力を養ひ得べきこと、亦瞭々たりき。其の各自の行ひし跡に徵して眞意の存する所を察すれば、實に奇怪の至りとす。卽ち眞意の存する所を察すれば、爾く奇怪なるものの存するありしと雖も、西鄕は此の時既に意を決する所あり、征韓の事竟に已む可らざるを說き、直ちに兵を彼に加へず、己れ先づ使節と爲り、彼國に渡りて彼と談判を開かん、若し不幸にして其の殺す所と爲らば、然る後諸君大に進みて兵を加へよとの議を執りて動かざりし如き、事に臨みて頗る順序を得たる者あり。而して彼に對する作戰の議、當時亦實に之れ有り。西鄕は所謂袋攻めを主張し、盛に北方の境壤より兵を進めて京城を包擊するの利なるを主張し、副島之に贊成せしが、板垣

は執て不可なりとし曰く、縱令北邊の境壤より包擊するも、此をして孰れの方向よりも逃遁するに道無からしむる事は極めて難事に屬す、寧ろ江華灣の方面より兵を進め、其の遁ぐるを追ひ、更に汽船を以て北方に急進し、之が道路を遮るの可なるに若かざるべしと。西鄕乃ち莞爾として笑つて曰く、兵の事は君の長ずる所、それ必ずや君の言の若くならんと。是れ固より眞の軍議ならざりしも、當時實に此の議ありき。

斯かる時に於て、海外より使節の歸り來りたるあり、岩倉木戸大久保伊藤等皆朝に列せり。是れ皆和合協諧せしに非ず、行旅に在るの間より往々意見扞格して懷に不快なき能はざりしが、歸來閣議に列せるの時、皆非征韓の議に一致せり。其の此に至りしもの、固と種々の事情の存せるあり。諸氏皆親しく歐米の地を踏みて其の文物の盛なるを觀、大に內治を計るの切要なるを曉りて、著手に一日も忽にすべからずとし、特に岩倉は甚だ努むる所あり、海外の形成に斷じて、今の時徒らに兵を朝鮮に加ふるの得策に非ざるを唱道し、遂に群議を廢し非征韓に決せり。仔細に內治の諸政を考へ親しく施設の任に當りし者は、實に此の非征韓者流にして、明治の政府は卽ち此の一派の權を執り來りしもの、內治の改善、制度の具備に於て負ふ所誠に尠しとせざるも、征韓の議に對しては、見る所必ずしも當を得たりと謂ふべからず。獨り當時論ぜる所の曖昧なりしのみならず、 の臆斷せる所、亦多く謬妄を極めり。朝鮮に兵を加ふるを以て非常の困難事と思へるが如き、實に然り。當時征韓論者中にも、同じく此の感を懷く者無きに非ざりしが、偶々西鄕の部下に朝鮮の國情を偵察して歸れる者あり、切りに朝鮮の伐つべきを言ひ、且つ手兵を提げて以て道を蹂躪し得べしと爲せり。之に反し、非征韓派は征韓の擧を以て大困難事と爲し、究極の勝利遂に孰れに決すべきやすら、豫め判知し難しとせり。されど其の國力の尪弱なるは、日淸戰役の時に至りて全く判明し、鄕に手兵を提げて八道を蹂躪し得べしと考へたりしの、決して妄想に非ざるを證せるなり。露の干涉來らんことを憂慮せしも亦然り。露の此に平涉するに意無かりしは、後に至りて明白と爲れり。憶ふに當時戰端開け、而して政府にして能く愼むべき所を遺れざりしならば、寧ろ兵を彼に加ふること、却て利益ありしならん。征韓の軍、戰勝ちて將士功に誇り、爲めに二三の强藩、兵威を恃みて權力を獨占し、橫肆至らざる無きが如きことあらんか、國家の不幸より焉大なるは莫きも、若し征韓派にして意を用ゐること周到、豫め深く此に戒愼する所ありしならば、兵を加ふるは我國に少からざる利ありしならん。而も此れ發顯せざる現象にして、輒く得て證明すべきに非ず。征韓派の遂に一著を輸するに至りしは、全く非征韓派の勢力の猛烈にして當るべからざりしが爲めにあらず、西鄕の決心の一たび定まりし所、卽ち當日に在りて大勢力の存せし處たり。若し西鄕にして一意唯此が決行に銳なりしならば、以て十分に斷行するを得

しならん。且つ其の決然官職を辭して鄕里に歸りたるは、是れ足らざるを感ぜしが故に非ずして、却て、其の力を恃むこと多かりしが故なり。たとひ官を捐てて鄕里に歸るとも苟も爲すこと有らんと欲せば優に爲すに足るの力ありと信じたるが故なり。一意征韓の決行を之れ望み、議敗れて志を得ず、坎壈迍邅して帝都を去りたるに非ず。

維新後に於ける西鄕の擧措實に斯の若し。カブレラ隱退の後に於けるガリバルヂーの行事と較ぶるに、目的を遂げ得ずして鄕里に歸りしは後者と酷似せるも、其の鄕里に退きしは、力盡きて如何ともすべからざるの餘に出でしに非ず、猶ほ大に勢力を蓄へ、東隅に失ふ所之を桑榆に收め得べきを期して退けるなり。夫の到る處に志望齟齬し、進退兩難の域に陷り、氣沮み勢蹙まりて已むを得ず孤島に隱退せしと、日を同じくして語るべからず。

## 第八　勢力の蓄積

人の世に處する、翹に進むの難きに非ず、退くも亦難し。風雲に際會して一代に雄揚する、固より容易ならざるも、退きて終を克くするも豈易事ならんや。且つ風雲に會して功を紀籍に勒する者を觀るに、宏才雄略群を拔くの質に非ざるの人を以て、能く機に投じ勢に乘じ以て鴻業偉績一時に爛たるありて、闔茸下材の流猶ほ頗る見るべきの功を植つる無きに非ずと雖も、而も其の退くや眞相乃ち現發して全く馬脚を露はすこと無からず。實に退くの難きは、寧ろ進むの難きより更に難きものあるなり。ガリバルヂーと西鄕とは同じく進退を屢々せし者、特にガリバルヂーは進退動止西鄕に較ぶれば更に屢々にして、其の一進一退する往々輕擧に過ぐるの跡無きに非ざりしが、其の退くや常にカブレラの巖窟に閉居し、俗を離れて飄然仙客の風あり。累りに大陸に渡りて事毎に意の如く爲らず、失望の極、最後に巖窟に退きたる、略々自己の位置力量を考察して悟る所あり。羅馬に出でて事を擧げんことを勸むる者の至りしかど、斷然斥けて應ぜず、且つ曰く、伊太利は今や獨立して自由を享有せり我が爲すべき事既に了る、我れ何ぞ又政治に意あらんや、唯公共の事業を經始し殘年を送らんのみ、乃ち先づチベルの堤防を修築し、カンパニアの疏水を開鑿するより始めんと欲すと。此の言は敵味方をして頗る意外の感を懷かしめたりき。若しガリバルヂーをして斯くして功を擧ぐるを得しめば、老餘の事業として遙かに優るありしならん。然るに堤防の修築、疏水の開鑿は素と技術に屬するの事、爲めに往々山師の集まり來りて種々の提供を爲すあり、其の經費の多大なる、限りある資金の能く辨ずる所に非ず。是に於て公共事業亦空しく畫餅と歸し、乃ち永く巖窟に閉居して一切他の勸誘に應ぜさらんことを期せり。西鄕に至りては、其の進むや苟もせず、退くや亦苟もせず、進む時大に爲すあ

ると等しく、退く時亦處するに巧なり。兵を擁して大に海外に雄飛せんと欲し、議納れらずして故山に歸るや、卽ち獵犬を侶ひて山野に狩りし、又孜々として吉野村の開墾に從事し、自ら馬を飼ひ、肥料を運び、更に子弟を勵めて力を此處に致さしめ、猶ほ且つ將來の勢力を蓄積せんが爲め、彼の所謂私學校を興し、私財を拋つて子弟の敎育に黽めたり。是れ普通に言ふ所の私學校とは頗る趣を異にし武を練り兵を講ずるは軍隊に似たるあり、時務を談じ政事を議するは政黨に似たるあり。而も又孳々として咿唔の聲絕えざるありて、其の讀む所獨り和漢の書に止まらず、間々洋書をも交へ講ぜり。蓋し薩摩は維新改革の時に際して一の重要なる勢力を形成し、此に由りて居然樞位を天下に占む。若し薩摩をして始終斯の若く原動力を保有せしめざるべからずとせば、其の力を支持し且つ之を開發するの必要なるは固より言ふを俟たず。西鄕の私學校を興したるは之が爲めなり。從來養へる薩摩の勢力を支持し且つ開發するには、此を措いて他に術あらず。

西鄕の敎育に著眼して一意力を此に致せるは、甚だ宜しきに協へるもの、其の達識に稱揚するに堪へたり。但だ其の制や、敎育といふの意味に於て一種の嫌無きに非ざるも、子弟を敎導し訓練する所亦敎育たるを失はず、寧ろ薩摩武士的敎育と謂ふの可なるに邇し。其の敎育方法の全帝國の大勢と伴はざる所あり、爲めに折角の努力も左程の效果を顯はし得ざりしと雖も、殊に其の敎育に重きを置きしは、以て活眼と稱せざるを得ず。或は後の敎育より觀て、其の制の殆ど價無きを稱すれども、後の敎育は此を薩摩に施せば、亦實に缺點多きを免れず。私學校流の敎育は、彼に於て多少存置する所無きを得ざらん。後學制の進步と共に此の地に高等中學校の設立さるゝに方り、其の新學制の殆ど薩摩人の敎育に益無きを證せしに非ずや。敎育をして後に言ふ所のものに限らしめば、薩摩の特色は遂に復び養成し得べからずと斷念せざる能はず。

## 第九　勢力空しく散ず

國家の事、其の成るや勢に因る。夫の所謂英雄豪傑の士は、實に其の成らんとするの勢を活用するに過ぎず。況や他の碌々人に依りて事を成すの輩に至りては、一に其の傀儡のみ從令斯の徒無きも勢は則ち駸々として進前すべきなり。ガリバルヂーも西鄕も、共に退きて悠々日月を樂める間に、天下の勢は自ら其の向ふ所に進步せり、伊太利は國政益々整ひて憲章旣に備はり、ビクトオリ・エマヌエル崩じてウムベルト新たに位に卽きしも、社稷は磐石の泰きに居て、國內動搖せず。此より先き、マジニーは夙に共和主義を懷抱し、終始共和政治の創建に努力せし者、有ゆる手段を運らして大に盡瘁せしが遂に效無くして止みにき。ガリバルヂーは同じく共和主義

を唱へしも、忠誠の念暫くも已まず、毎に忠愛の情を王に寄せり。マジニーは居常ガリバルヂーを忌嫉し、嘗て參會の序で、ロシエリイを將て彼の上席に措けり。時にガリバルヂー些の慍色無く、曰く我れ國の爲めには一兵卒として戰ふも猶ほ羞ぢず、此の如きは毫も意に介する所にあらずと。而も之が爲め幾何か感情を傷ひしことは疑ふべきに非ず。是より後唱ふる所の主義は卽ち兩者相等しかりしも、其の關係は常に冷かなりき。然るにマジニー死して其の黨大に衰へ、頻りにガリバルヂー黨と合して俱に與にせんことを計れり。當時伊太利は已に統一せりとはいへ、歴史上より考ふれば、猶ほ外國に占略せられたる處尠からずして、悉く此を恢復するに非ざれば、以て眞の統一と謂ふべからず。是れマジニーの黨が、ガリバルヂー一派よりして贊成を得たる所とす。ガリバルヂーは忠誠の念、衷に熱せるも、苟も國權を弱らんが爲めには何等の場合にも劍を拔くに躊躇せず。乃ち時の政府に對して不平を挾む者は皆此の弱點を捉へて彼を挑撥使嗾し、誘致して以て自己に黨せしむ。斯くて版圖を恢復して國辱を雪ぐべきの必要なるを口にする者の續いて到るや、彼れ乃ち千八百七十九年を以て再び羅馬に現はれ、頻りに演說して民衆を鼓勵し、更に武器の購買、民兵の募集に斡旋せしが、屢々王に謁して其の盛德を仰望せると、又嘗て右臂と恃みしメヂッチーの現に參謀總長の職に就けるありて、親しく其の語る所を聞けるとに因り、遂に默止して動かず。周圍の人來りて種々勸說を試みんとするも戶を閉ぢて應ぜず。尋いで宿痾再發し、且つ周圍の勸說を煩はしとして、遂に巖窟に復歸せり。後義子カンチォ、共和黨に與して政府の拘囚する所と爲れりと聞き、憤然起ちて、誓つて此が赦免を得んと欲し、若し已む無くんば力を用ゐて奪回すべき由を言へり。偶々王の特赦に遭ひて事なきを得、更に諸方に徘徊して到る處に歡迎されしが、終に復カプレラに歸り。爾來島に在る數年、而も徒然爲すこと無く、既に死せる人と擇ぶ無し。要するに其の殘年は、實に觀るに足るもの無かりしなり。

西鄕の議協はずして故山に歸臥せるや、四圍の人來りて起たんことを勸むる、一再にして止まらず。而も西鄕は進退去就を決すること、ガリバルヂーに較ぶれば更に愼重を加へ、其の一旦意を決して退くや、勸說する者の言如何に巧なるも、頑として應ぜず。明治八年大阪會議あり、木戶板垣等再び入りて參議と爲り、西鄕亦就かんことを勸められしも、固く執りて應ぜず。時に政府に對して不平を懷ける者、竊に恃みて以て己れに與せしめ易しと爲しゝが、又遂に此に應ぜざりき。此に先だつ一年、江藤兵を佐賀に擧げ、翌年神風黨熊本に起り、前原亦亂を萩に構へしも、常に持重して動かず、又應援の議にも與らざりき。實に西鄕は容易に人言に動かされて進退を苟もする者に非ざりしなり。然るに十年に至り、群至せる他の勸誘して些も應ぜざりしも躬を以て、忽ち大兵を擧げて東上を計れり。世或は西鄕の擧兵を以て、實に當時の政府を轉覆するに意ありしなりと謂ひ、或は眞に擧兵の意あら

ざりしも、私學校の徒一たび激發して此を止むるに由なく、唯此に生命を投げたるのみなりと謂ひ、其の擧兵の眞意に至りては、今も尙ほ疑問に屬す。而も是れ必ずしも想察し難きの事に非ず。西鄕の事を爲すは、畢既往に行動し來れる所に徵すれば、自ら其の眞意を判知するに餘りあるべし。西鄕の事を爲すは、畢竟薩摩人的なり。豫め自己の意見を立て、此に據りて事を決するよりも、勢の向ふ所に依りて善く此を活用するに長ず。其の初より、當時の政府と相容れざりしは則ち明かなりしと雖も、又直ちに起ちて之を攻擊せんとの意を懷きしに非ず、唯徐ろに實力を養ひて他日の用に供せんと欲し〻のみ。政府を轉覆せんと企て、此に處するの謀策を建つるが若きは、毫も思ひ到らざりしの所といふべし。然れども大勢の向ふ所は徐々に觀察するを怠らず、天下の寖々政府に對して不平を懷けるを聞知したりしが、平素來りて事を告ぐる者は、故らに夸大の言を弄して事實を皇張せる無きに非ず、其の聞ける所は寧ろ事實を距るの遠かりしも、注意すべきは注意し居りしなり。國家亂れて如何ともすべからざるに至れば、己れ身を挺して此を定めんことを期待しつ〻、他の使令に從ひ相應じて事を擧ぐることは其の願ふ所にあらず。是れ佐賀の亂、熊本の亂、萩の亂の起るに際して、與り關するを屑しとせざる所以にして往に維新の前、長藩勤王を唱へて京都に戰へる時、兵を以て逆に之を伐ちしと恰も相同じ。居常大事を以て自ら任じたる丈け、瑣々たる細事の如きは深く意に介せざる所、海內大に亂る〻の時、乃ち兵を將て其の難に赴くか、否らずんば大に兵を海外に動かすの時乃ち進んで其の勞に當らんとは常に胸中に決せる所にして、又嘗て自ら明言せし所なり。之を外にして事一に勢の向ふ所に任すのみ。苟も大勢の向ふ所、己れを迎ふれば、則ち此に應じて動き、迎へずんば則ち止まる、漫りに懊惱する無し。私學校の徒に擁せられ兵を提けて起てるに方りては、直ちに此を用ゐて如何せんとの計畫の心裡に畫かれたるに非ず。隨て當時自ら進みて此を鼓舞振勵せるの行動なく、又其の强請を斥くるに由なくして已む無く起ちしにも非ず。但だ己れの養ふ所は則ち一箇の勢力たるを失はざるを知り、以爲らく業に已に其の擁する所と爲りて事を擧ぐ、幸に我れ勝を制するを得ば、卽ち能く之を抑へ、機を相て以て兵を海外に用ゐ、事若し成らずんば、卽ち此と共に斃れて已まんのみと。當時の心情、實に其の事の成功せんことを願はざりしに非ず、又必ずしも成らんことを望みしにも非ず。此の如き際に處して悠々緩々、唯勢の向ふ所に從りて最後の斷案を下さんとせしのみ。是を以て兩陣相對するや、時に自ら兵氣を振作するの擧措あるかと見れば、又特に戰の爲めに淬勵するの態無く、依然犬を侶として山野に狩獵し、而して其の間に在りて、胸中既に最後に處するの策を決せり。要するに、豫め胸裡に成策の畫ける無く、唯勢の向ふ所に依りて事を成さんとするは、卽ち普通の薩人と相似たるも、普通の薩人は、一意勢に依りて事の己れに利ならんを覗むる者、勢の向ふに任せて從容死に赴く、西

郷其の人の如きは多からず。是れ西郷の薩人より超脱せること一段なる所。

當時の戰爭は實に悲慘の極なりしが、畢竟政府に人無かりしに坐す。大久保にして一層の伎倆を備へしならば、更に此を轉じて大に有益の途に利用し得しなるべし。然るに唯剛毅果斷を以て能と爲し、苟も國家の秩序を保持するに要あらば、用兵且つ厭ふ所に非ずとし、爲めに維新の際に當りて其を與に共にせし同志と離絶せり。其の木戸と離れしや此に因り、西郷と離れしや亦此に因り、而して私學校の徒をして激發せしめしも、亦此に因る。當時西郷の爲しゝ所は多少時勢に後れしやの嫌ひ無きに非ざりしも、國權を張るの方面より觀れば洵に缺くべからざる所、然るに強ひて此を壓屈せしが爲め有用の勢力をして空しく消散し了らしめたる、何ぞ當路者の無能に歸せざるを得んや。大久保は政治家としての伎倆を備へしと雖も、經綸の略に至りては深く稱するに足らざるなり。西郷の兵を提げて起てるは、固より不穩の跡あるを免れず。而も西郷に責むるに斯の若き事を以てするは、則ち酷なり。或は又其の大事にして而も起るの名無きを責むる者あるも、是れさへ猶ほ西郷を議する所以の道にあらず。西郷は時局を大觀して勢力を養ふに專心し、其の勢力の向ふ所に依りて事を決せんことを努む。而して時の政府者、眼識に乏しく、徒らに內事に拘々として、遂に其の勢力を無用に消散せしめて顧みざりしは、誠に痛歎するに堪へたり。是に較ぶれば、伊太利政府は更に賢明なる所あり。若し彼を

して代りて我が當時の局に當らしめしならば、乃ち此に處するの良途、猶ほ他に存するありしならん。惜い哉當路者事を解せず、西郷をして雄强なる勢力と共に城山の露と消えしめたることや。然れども其の最後や眞に戲曲的なり。勇壯彼が若きの死は、容易に遂げ得べからざるもの、其の運去り勢蹙るを見、從容谿流を掬んで訣別を表し、從士を促して我が頭を刎ねしめ、而して同志の士前後相接いし皆刃に伏して彼に從ひしが如き、何ぞ其れ勇敢にして悲壯なるや。ガリバルヂーの餘命を保ちて無爲に終りたるに較ぶれば、却て事を勇壯偉大ならしむる所無きに非ず。實にガリバルヂーの餘命を保ち、寧ろ壽にして恥多かりし一生は、西郷の刃に伏して却て掉尾的運動を全くし得たるの優れるに若かざるなり。ガリバルヂーは終始經營に忙しく、東奔西走暫くも止まず、且つ屢々危難を踏みて些も難色無きは、寔に勇とするに足る。而も其の波瀾や區域小に過ぎ、更に洶湧澎湃の態無し。西郷は動くこと彼の若く頻々たらざるも、一進一退宛も泰山の崩るゝが如く、其の生より死に至る一代の行事を檢すれば、數回の波瀾、皆滔天浴日の勢あり。中に就て最終の大飛躍に至りては實に洪波狂瀾蓼々岸を拍ち巖に激せるの觀を極む。若し此を繪畫に寫さば應に無限の趣味あらん。

西郷とガリバルヂーとは共に武事を以て天下に立ち、終生軍人的生活を爲せる者、而も兩ながら共に兵略に長ぜりと謂ふべからず、特にガリバルヂーは殆ど將材武略の見るべき無く、一たび股肱と頼

みしアンザニーの死してより、戰略は實に拙劣を極め、自らも己れの兵事に堪能ならざるを慨ひて已まず、悵然として曰く、若し彼にして幸に生命を保ちしならば、外人を謳逐して統一の業を完成すること疾く、卽に其の功を竣へしならんにと。而も戰鬪の術は其の特に長ぜし所にして自ら兵を將ゐ、高處に陣して敵を俯瞰し、機を察して驀然下り來り、縱横に突擊する所、頗る敏にして巧なるものあり、西鄕も亦兵略に長ぜず、敵に臨みて畫策するは、大材の善謀善籌なるに如かざりしや明かなるも將に將たるの略は確かに之れ有り。是を以て幕下の諸將頗る作戰に長ずる者あり。嘗て皇師に參謀として東海道を下り、後私學校の徒に擁せられて兵を擧ぐる、皆親しく手を下すあらざりしにも拘らず其の威望は優に群將を服するに足りしなり。ガリバルヂーは如何に大兵を率ゐるとも、百戰して大陸を征定するは其の能くする所に非ず。西鄕は百萬の大軍に將とし、敵に臨みて勝を制するの能を具ふれども、兵を率ゐて自ら戰を決するは未だ嘗て試みざりし所、想ふに兵を執りて戰ふことは、西鄕或はガリバルヂーに劣りしならん。然れども兩者共に一種の德望を具備し、嘗て將士の心を喪ひしことあらず。ガリバルヂーの臨む處、部下の將士常に水火に投ずるを避けず、其の人心の歸服する殆ど神に邇きものあり。但だ其の弊とする所は、紀律の嚴ならざるに在り、老幼の別無きに在り。而も斯の若きを率ゐて、猶ほ能く四方に横行するを得たりき。西鄕の人に於ける、亦然るものあり。坦懷人を待ち、宏量物を容れ、威を示さずして將士服し、坐がらにして人心懷く。是れ洵に一代の群英を指揮し、大事に臨みて善く斷ずるを得たる所以にして、西鄕たる所以又此に在りとす。

## 第十　餘音

英雄の性は常に獅子を以て喩へらる。其の剛柔兼ね備ふるを以てなり。世のガリバルヂーを言ふ者萬口一辭、皆之を併せ具ふるを稱す。而して威ありて能く柔に、寛にして狎るべからざるは、西鄕亦甚だ類せる所あり、ガリバルヂーの人に接する、威貌嚴として犯すべからず。而して又溫容藉として親むべし。其の赫として怒るや、恰も山壑を震動し百獸を慴伏せしむるの態あり。而して舊怨一拋して心胸の豁如たる、宛として光風霽月の趣あり。レオナルド・ミランはを鞭笞して囹圄に囚へし者遺恨何ぞ忘るゝに堪へんや。而も其の失敗して賴み無きに方り、聲譽隆々爲さんとして成らざる無きの躬を以て、毫も舊もの報復を念はず、唯僅に一瞥を施し、以て往日の怨恨は銘記して敢て忘れざるも、謂劣汝が如きの特に心に介するに足らずとの意を示せり。居常共和の思想を懷き、立君政治を視ること寇讎も啻ならざりしが、ビクトリオ・エマヌエルに對しては嘗て忠愛敬重の情を失はず、政府との軋轢如何に極頂に達する時と雖も、少しも斯の情に於て變らず。頗る哲學的疑問を抱き、時に萬

有間の不可思議に懐疑せしも、神の存在は常に信じて疑ふこと無し。但だ粗豪の質、人を見るの明を虧き、薫蕕竝び納れしに因り、爲めに頗る紛擾を惹き起せることあり。家庭の修まらざる、亦顰蹙するに堪へたるありて、特に奇異なる婚姻は、萬人をして吃驚せしめたり。西郷の柔和にして寛弘なるは、寔に常度を過ぐるあり。宏量能く敵を容るゝは、恰も洪海の清濁を分たざるが如きあり、忠君の情甚だ厚く、意見扞格して最も政府と忤逆する時と雖も、國を憂ひ至尊を念ふの切なるは暫くも渝らず。多少王陽明流の思想を懐抱し、其の見る所頗る等輩と趣を異にせり。人を知るに敏慧ならず、其の薦擧する所往々器に非ざるありしかど、ガリバルヂーに較ぶれば則ち勝る所無からず。家庭に於ても、彼に比して、頗る修れりとすべし。二人の互に一長一短ありて、其の短なる所亦甲たり乙たるあるべきも、其の威ありて能く柔に、寛にして而も狎るべからざるは、伯仲の間に在らん。

二人は共に馬上を以て事を成すの志を懐けり。故に善後を籌畫し守成を全くするは能とする所に非ず。乃ち平素の修養は武備に在りしも、文事の嗜好とて亦之れ無かりしに非ず。ガリバルヂー、カブレラの巖窟に閒居せるや、書を讀み文を愛し、マジニーの著、ユーゴーの作は、特に好みたる所たり。少時の教育行屆かずして知識に乏しかりしは、夙に自認する所にして、數々明言する所なりしも、而も猶ほ事に當りて斷案を下すに際し、往々意に任せて縱肆の處置を敢てするを憚らず。又公會に臨みて演說するに當りても、或は事實を謬り、或は迂說を縷述して恬然たり。爲めに同派の士をして赧然背に汗せしむることありき。西郷も隱退の後書見自ら樂みしが、渉獵博からずして聞知する所の以て恃みとするに足らざるを悟り、知識を要するの特に切なる時に方りては、好みて他に讓り專ら之に託して衡に當らしむるを聞め、漫りに議論を上下して自己の無識を暴露する如きあらざりしは智なりとすべきなり。ガリバルヂーは毎に筆を執りて一代の作を試むるに意ありしが、文壇の聲譽は武名の赫赫たるに及ぶべくも無し。然れども全く文筆の材爲きに非ず。「其の議論はマジニーよりも正しく、其の著想はユーゴーよりも條理あり」とは一般の認むる所にし、夫の戰爭日記の若き、事の顚末を敍ぶる頗る委曲に、情緒の纒緜して外に溢るゝ所、洵に愛の掬すべきものあり。或は之を稱して曰ふ、是れ到底ナポレオン、ビスマルク等の企て及ぶ所に非ざるなりと。

西郷は先人の書に批見を加へ、又自ら詩を賦し毫を揮へり。固より彩筆の以て詞林に列するに足るあらざりしも、雄豪の力量亦優に見るべき無きに非ず。中村敬宇其の所作を見る毎に則ち曰へり、西郷の作りたる所誤謬無しとせず、然れども尋常人の畢に企て及ばざる所なりと。ガリバルヂーは平素赤色のシャツに長劍を帶び、王侯貴人の席に列るも嘗て斯風を更へず、居常自ら奉ずる極めて淡泊なり。西郷も好みて綿衣を纒ひ邊幅を飾らず、心は己れの美田の上に在らざりしなり。

# 東西英雄一夕話

## 凡例

一、本書は「東西兩國の英雄」と題して大阪朝日に連載した者で、新聞に日を以て分割してあるを、玆に題を以て分割して置く。文中幾分の改刪もある。

一、各英雄に相當の行數を割宛つべきに、後世人口多く、英雄多く、限りある紙數に於いて後ほど割合を減ずるの已むを得ぬを遺憾とする。

## 總說

### 人間學の捷徑

『人間の學問は人間である』とは、希臘で言ひ始め、英國詩人ポープが之を詩の中に引用してより、廣く英語の行はれる範圍に知れ亙つた。其語は斯くして一番の格言となつたが、其意義は昔から何處にでも知れて居り、近世科學の勃興する迄、學問と云へば殆ど悉く人間に關する事に限られた。儒教の經典なる大學の劈頭に『大學之道、在レ明ニ明德一、在レ新レ民、在レ止ニ於至善一』とある。而して人間を知るに其代表者たる英雄を知るを捷徑とすることが、自然に人の頭腦に浮び、東洋で史記、西洋でプルタルクが、功名心ある者の最も愛讀する所と爲り、今も其形跡が遺つて居る。

直接に人間より離れたる事業、即ち理化學の研究の如きは、全く英雄に趣味なくも差支なく、人間に關係あるものでも、社會的現象の統計に從事するなど、英雄を棄て置いてよい。英雄に氣をとられて冷靜なる判斷を妨げられてはならぬ。併し政治家として立つに至り、英雄に趣味を感ぜずして到底目覺ましい運動を敢てすることが出來ぬ。政治家に種々あり、幕僚として政務調査に專らなるのは、冷々淡々水のやうにして勤まるが、自ら幹部で指揮し、又は陣笠となつて活動するには、多少英雄に趣味を感ずるを要し、之を感ぜねば政治家に成り甲斐がないとすべきである。

多數の力を考へ、群集に注意せねばならず人口の增加し、古代の簡單なると違うては尙更であるが其の統率者若くは指導者として現はれる者を認めるの必要がある。事理を研究する場合は格別、實際の取扱に於て、ニーチェの如く群集が有つても無くても何うでも宜いとして置ける。出師準備に色々と思案し、輜重の末まで注意するとして、扨て敵軍と砲門の間に相見えては、何人が指揮するかと云

ふ事が重大なる問題になる。如何なる政治家も手の着けやうのないことがあれど、權力者が遁げ出した時、一人勇進して衆を引纒め、優に政界を支配することがある。百年の後より見て何程のことがないにしても、其當時にあつて頗る重大なる事件たるを失はぬ。勝と西郷とが談判せねば、江戸が丸燒に爲つたかも知れぬ。丸燒になつても回復するに極まつてゐるものの、一時の騷ぎは何とも譬へやうがない。人は其時代に生きるので、百年の後に生きるのでなく、其時代には其時代が肝要であつて、亂の平定し人に安心させるのが、其時代幾十百千萬の利益になる。

是れは政界ばかりでなく、人間より離れたと見える自然科學の研究に於ても認め得られる。科學界には何人が大政治家であるかを問はず、斯かる事は何の痛痒がなけれど、新發明新發見を成し遂げたものを重んぜずに居れぬ。某國の某が云々の發見をしたと云ふが強い刺戟を與へ、新發明を促すの原因となる。ニウトンなり、ダルウィンなり、其人が出なくとも早晩其說が知られたらうが、其人の爲めに何程か年數を早めたのを打消す譯にゆかぬ。スペンサーは英雄よりも南洋の土蠻に重きを置いたが、夫れにしてもアダム・スミス富國論の影響を稱し、眞の權力者であるかに論じ立てて居る。普通の英雄豪傑を好まぬだけで、或る個人の勢力を打棄つて置くことが出來なんだのである。日本にも東京帝大にニウトン祭、ダルウィン祭がある。科學界に案外英雄崇拜がある。

## 英雄と凡人

英雄と凡人と違ふのは、程度に過ぎぬ。若し尺度で測り得れば、其の程度も大きなものでない。幾百の相撲取の中で横綱が傑出し居り、特に太刀山が傑出し、或は古今獨歩と稱せられる。併し他と何程の違ひがあるか。脊が高いとて宮內省の山口氏位であり、體量が重いとて衆議院の野田氏より少し重い位である。相撲仲間では驚くべき程の者でなく、實に僅かの違ひである。僅かの違であつて優劣が明かに定まり、幾年間も一人の之に勝つものが無かつた。美人といひ、醜婦といひ、全く違つたもののやうに取扱ひながら、其違ひは僅かばかり目の上り下り、僅かばかり鼻の高い低い僅かばかり口が大きい小さいと云ふ所で、尺で測つて二分か三分、全く言ふに足らぬ。普通に優劣と云ふは、皆僅かの差を指して云ふに過ぎぬ。

劣等の間は差が多く、優等に進むに從うて差が少くなり、其少い差が著しい違ひと認められる。草木の成長するや、初め日々目に見える程伸び、漸くにして目に見えなくなる。碁を習ひ始めれば、井目風鈴より幾日も經たぬのに風鈴が取れ、八目となり、七目となり、質が良ければ一年の內に初段に四目まで漕ぎ付け、或は夫れ以上進むが、夫から後の進歩が甚だ遲い。天才と云ふので、二十歲に三

四段に上るのがあるが、八段まで進むのは稀である。而して四段と八段とは一目の差あるか無いか位實に僅かの差が本因坊の位置を決する。總てのことが然うであつて、最初ほど進歩が早く、漸くして殆ど平等に達するが、平等にならうとして容易になれぬ。四人の横綱は殆ど平等と云へるし、前頭の上になるも平等に近いけれど、遂に太刀山に讓らねばならなんだ。

人は殆ど平等まで達するを得、人を以て悉く平等とするのは、大體に於て誤りなく、畢竟するに僅かの差に止まるが、其の僅かの差を認むる所が人智の發達した結果である。運動會で記錄破りと云ふのは、一吋に足らぬほどのことがあつて、それだけ違つて何程のことがあるかと言へは言ふものの、人類が微細なる差違に注意したればこそ、能く大なる社會を組立て得たとする。英雄彼れ何者ぞ、蓋世の雄とて、凡人との違ひは僅かである。

凡人と同樣に食衣住し、婦人が短刀にて突けば立ろに死んで仕舞ひ甚だ脆いものである。併し僅かの差があつて、其差で著しく優劣を生ずる。臺灣の生蕃が繪畫展覽會を見ても大抵同じやうに思ひ、優劣を云へば內地人の判斷と顚倒するやうなことがあらう。繪畫に僅かの差を認める判斷力を養つて居らぬのである。

英雄を賞美するのは、人物として向上心あるを暗示する。同じく賞美するにしても、單に高嶺の花と眺め、之を取らうとせぬのがあり、或は崖を登つて取らうとするのがある。碁を打つても、笊碁で滿足し、別段進歩しようとせぬのが澤山ある。當人自らそれが愉快であつて、初段になるなど夢にも思はない。何も初段にならねばならぬ必要がなく、刻苦黽勉を以て無用な心配と云へる。英雄なんか何うでも宜く、凡人で澤山であると云へるが、是れ年長じて向上心の止まつた頃のこと、進歩し得る間は進歩するに努むるのが宜い。運動會で選手になつたとて知れたもの、記錄を破つたとて夫までのことと云へても、運動會に加はつた以上、選手にならうとして勵むのが、運動會全體の能率を高むる所以となる。

人が悉く英雄と爲らうとして爲れず、爲れぬのに努力するのは無駄骨たるを免れぬが、多少努力するだけ社會に於ける活動の程度を高める。三十を越えて體格が定つてから力士になつても仕方がないが、二十で力士にならうと思へばなるが宜い。必ずしも三役に上れると限らず、幕內に入れぬかも知れぬけれど、何れだけか力士らしくなれるに違ひない。力士を志したとして、幾分か志を達し得たことになる。斯かる志望者の多いので相撲が繁盛する。暗い中からヒョロ〳〵した小僧が土俵で投げたり投げられたりするのは、隨分難儀であつても、其の中に將來の三役がある。若し誰も彼も力士になつたとて仕方がないとすれば、力士は消滅して仕舞ふ、英雄も其邊の處である。

## 英雄趣味

大隈侯は、維新の英雄が消滅したから、自分は生き殘つて其の後繼者を作らねばならぬと云つたりするが、其場限りの放言にしても、大英雄を心掛けて居るとも云へる。別段賞めた事ではないけれど、其の元氣は此の氣分に伴ふ所があらう。老人が後進者の路を遮ればこそ邪魔になれ、邪魔せずに自ら向上に努めるのは效能があれば、夫れだけ益になる。

老人になつて早く引退し、新陳代謝を速かにするのは宜い、場塞ぎはわるい。併し引退してブラブラして居るのは社會の厄介者であつて、何がな働けば夫れだけの利益があらう。青年も相應の年齢に達して引退しよう、官吏の恩給を得、貴族院議員に爲らうと考へるよりは、一つ思切つて努力し、英雄の列に入らうとすれば、普通よりも力が伸びるであらう。氣ばかり高くて何もせぬのは困り者であつて、平生ぶらついて居りながら、一機會到來せば天下を驚かして遣ると口癖に云ふが如き誇大妄想狂でも、餘り面白くない方であるが、只ぶら付いて居るのでなく、ヨリ以上の事を爲さうとしてヨリ以上に努力せば、英雄になつてもならなくても多く努力して居るだけ、當人の爲めになり、少しでも國家社會の爲めになる。國家の發展は之を組織する人々の努力を以て成し遂げられ、國民の努力の多い國家が、其の少い國家を壓倒することになる。

意識的に英雄にならうとするが宜いか惡いか、是は疑問であるとして、向上心の熾んなる頃に凡人を以て甘んぜず、成る可く向上しようと努力するのは宜い。眞ッ直ぐな樹の間に成長すれば、自ら眞ッ直ぐになる、英雄に趣味を持てば、其の英雄の惡い所に倣はぬ限り、何等かの益がある。凡人たる事は決して惡い事でないが、內心凡人を以て居るを欲せずして、努力を厭ひ、外聞を憚り、殊更凡人を標榜するが如き、自ら欺き人を欺くの嫌を免れぬ。且つ世間の多數が斯くして强ひて安心を求めたならば、列國競爭の烈しい時代に於て、國家の進展を遲延し、後れを取るやうなことが無からうか。人は成る丈け向上心の長續きするが宜く、其の續く間强ひて凡人としての安心を求むるにも及ぶまい。

歷史に英雄として顯はれて居る者は、概ね英雄に越味を覺え、自ら之に私淑し、或は其れ以上に出ようとして居る。豐臣秀吉は殆ど全く書を讀まなんだが、向上の精神に富み、羽柴と名乘つたのは丹羽長秀、柴田勝家に肖かつたとも言へるし、此二人分の働きをする意氣込であつたとも言へる。鎌倉で賴朝の像を見、之を撫でて曰ふには、空手で能く天下を取つたのは貴公と吾とであつて、吾が氏素性のないのは貴公に優ると言つた。是れ前より賴朝に肖かつて居たが爲めであるのは、一時足利義昭

の養子となつて、將軍職を得ようとしたのでも察せられる。西郷隆盛の詩句に『建業只期華盛東。鬪爭獨希拿破崙』と云ふのがある。果して西郷の作であるかは疑はしく、壯士の言草に似て居るが、或場合に其類の事を言はなんだとも限らぬ。諸葛孔明が自ら管仲樂毅に比したのは、儒家の悅ばぬ所であり、標準の宜しきを得なんだと言はれるが、管仲樂毅は實務の才に於て多く得難いもの、未だ志を得ざる前、此邊に私淑したのは不思議でない。

奈翁一世は古代希臘の英雄を稱し、羅馬帝國に倣はうした所があり、奈翁三世は該撒傳を作つて居る。傳は時の文相の作つたのであつても、私淑した所もあり、自分の政策を辯護した所もある。奈翁系統の理想は羅馬全盛の再現に在る。現代では獨逸の皇帝が、少壯の時に歷山王の再生を以て居つたことが、何程か目今の戰亂を豫定せぬではない。ルーズヴエルトは何かと云へはワシントンとリンコーンとグラントとを擧げ、自分が其後繼者であるかに仄かし、人の笑ひを招くを辭せぬが、凡常と違ふ丈けは認めねばならぬ。古代希臘羅馬を賞讃するは、猛獸狩したり、出征しようとしたりするのと照應する。大抵世に多少の印象を遺して居るのは、前代若くは他國の偉人物の印象を享けて居る。自ら著名の英雄に擬して何事をも成さず、笑ふに笑はれぬのもあるけれど、其故を以て偉人物に私淑するのを悉く笑ふ譯に往かぬ。柄にない性分を以て私淑するのを滑稽とし、私淑せずして單に趣味を覺えるのは惡くない。

## 英雄談

萩生徂徠が豆を嚙んで古今の英雄を罵るを以て最も愉快とすると云うたのは、英雄に趣味を覺えての事である。自ら何物かを以て任じて居つたかも知れぬ、天の靈寵にて李王の書を得たと云ふので、李于鱗に肖かつたとも言へる。李に肖かつては志が小さいやうであるが、企て及ばぬものに肖かるよりも宜いと言へぬではない。徂徠が努力すれば李を凌ぐに難くない。其の英雄觀が何うあつたにしても、豆を嚙んで英雄を罵るの愉快は隨分世間で知つて居る。寄宿舍でも、下宿屋でも、英雄豪傑を批評し合はぬ所がない。何の益もなく、時間潰しとすれど、少くとも樂みになり、何れかと云へば好い樂みであつて、其の間に人間に關する知識を得る所がある。藝術として埒もない不具者を取扱ふのがあつて、單に藝術よりせば其れも宜いけれど、國家社會を念としては、今一層堂々たる心掛を要する。書物を讀んで書物に讀まれるものが珍らしくないにしても、同じく書物を讀むならは、精神の不具なのよりも、其優越した者の進退動作を知るのが宜い。

講談物が流行し、全國の新聞に載つて居るのは知識の低い階級に於て英雄に趣を覺えて居るが爲

めであつて、舊幕時代の下流教育は概ね此邊から來て居る。今日學校で種々の知識を詰込みつゝ、人間に關する知識が割合に少く、教育敕語の講義も形式に流れ易く、男らしい男、女らしい女に對する知識慾を滿たして呉れるものに乏しい。そこで古びた講談が擴まつて居る、無いよりも增しとなつて居る。英國にスコツト物が擴まつたのは種々の事情があるにしても、多少之に似た所がある。戀愛の縺れ合ひも宜いけれども、誰も彼も此類の事のみに沒頭して居れぬ。沒頭しては興國の氣分ありと云へぬ。低級の社會に娯樂と利益と並び得られるとすれば、今の所で趣味の粗雜なる講談類を推さねばならぬ。

支那に水滸傳が何程行はれて居るかは判らぬが、今日の支那は依然水滸傳流であつて、其の百八人の如き者が活動して居る。水滸傳は八犬傳より舞臺が大きいにしても、人物は浪花節流儀である、博徒式である。切つたり張つたりである。日本の講談物は水滸傳ほど曲折に富まぬ代りに、締りがある。水滸傳は支那の社會に適して、其以外に適せぬ、場面が餘りに他と違つて居る。舊幕時代から色々の譯あるに拘らず、割合世間に擴まらなんだのは、娯樂の分子又は利益の分子が缺けて居るからであらう。磊落不羈、事に臨んで乾坤一擲する所が面白く、普通の束縛を脱するの氣分を養ふに效があるにしても、要するに博徒仲間の類に終る。博徒の親分子分は頗る面白いところがあるにせよ、普通の筋道を立つる所に適合せぬ。日本で最も長篇の小說なる八犬傳は、水滸傳の眞似をして舞臺狹く、僅に房總半島に限られて居る。併し只舞臺が大きいと云ふのが尊い譯でなく、空間に於ける大きさから言へば、西遊記の如き極めて大、實に天地を一にして居るが、人間に關して頗る單純である。

日本でも八犬傳より舞臺の大きいのが色々あるけれど、其の割合に人生の曲折を悉くして居らぬ。普通に講談物となつて居る所は、略々普通の人情を現はして居る。講談師の道德及び知識が低いとしても難かしい道理を說くなら格別、普通の人情を說くに於て、必しも資格を缺いて居るとせぬ。何代か前から言ひ傳へて聞き傳へて居る所、人情の尤もとする所に落着いて來て居る。高尙になり、難かしくなつては、狹い範圍に向いても、廣い範圍に不向になる。但だ現在の狀態では、一般知識の進む比例に於て進まず、中學若くは高女を卒へた程度で飽足らなく感ぜられる。歷史小說の好いのがあれば結構であるが、歷史を小說にしたのよりも、實錄の儘で興味を覺えるのが少いとせぬ。歷史及び傳記で娯樂と利益とを兼ねるのが澤山ある。

## 謂ゆる東洋の豪傑

徂徠は古今の英雄を罵つて樂しんだが、其當時の眼界では、廣いと云うても全く東洋に限られて居

る。新井白石の頃から歐洲の事情が知れ、林子平がカタリナを賞讃し、賴山陽がナポレオンを詩に入れるやうになつた。けれど今日と較ぶれば、舊幕時代の所謂英雄豪傑は世界の一局部に偏して居り、之を罵るを樂みにした徂徠も氣の毒なものである。今は取扱ふべき英雄の數が遙に多く增加し、之を罵るを樂みとせば樂みが大いに增加して居る。罵るとは强ち惡口雜言することでなく、惡く言へば善くも言ひ、批評と云ふ位の所で徂徠の話も詰まり英雄談が面白いと云ふに過ぎぬ。

純粹の歷史として種々研究すべきことがあり、何の方面からでも研究の步を進め得るが、普通に傳へて居る傳記のみで今更の樣に思ひ當ることが多い。西洋の史傳が知られてから、從來、英雄を『東洋の豪傑』と呼ぶことが行はれ、今尙ほ其の末流を汲んでゐるのである。何かと云へば夫れは東洋の豪傑であつて、此の文明時代に合はぬし、それが尤もらしく聞えて居る。其の尤もらしく聞えるのは西洋の英雄談が耳新しかつた爲めで、漸く馴るゝに伴ひ、それ程でないことが分つて來、分らぬのは分りつつある。『東洋の豪傑』は『西洋の豪傑』と何の點が違つて居るとするか、西洋の豪傑とは何人を指すのであるか、之を尋ねねばならぬ。東洋の豪傑と云ふ語を使つた連中にも、全く相異なる見解があつた。一つは東洋が勿れ主義で窮屈、人物も社杙着たやうな調子であるとし、又一つは東洋は眞の道德が無く、英雄人を欺き、英雄色を好み、豪傑は不品行の別名であるとする。而して孰れも相應に例を擧げられる。然らば西洋の豪傑はどうであるか、之と全く異なつて居るか。何かと云ふと經典の句を引き、窮屈で人の氣を詰まらせるのがある。品行とても、方正なのがあれば方正でないのがある。西洋の豪傑に甚だ不品行なのを求めることが出來る。東洋と西洋と相異なつたものを對照すれば、相違ふと見えるのが當り前であつて、其の反對に相同じきものを對照すれば、相似ると見えるのであらう。何を東洋とし、何を西洋とするか、多少の反省を要する。冷笑の意義に於て『東洋の豪傑』と云ふのは、何と考へての事か、實に思はざるも甚だしい。

東洋と西洋と、種々違つて居る中に似た所があつて、其最も似たものは英雄豪傑である、啻に東西相似たばかりでなく、今古相似て居る。動物の進化は驚くべき程度に行はれて居るが、其の最大部分は數百萬年間に於てし、近く數十萬年に個體として餘り著しい事がない。人類が數十萬年前に現はれたとし、歷史が始まつてから約一萬年、稍々明白を覺えてから約五千年、社會として著大の變化を呈しながら、頭腦に特別の變化あるかが疑はしい。自然淘汰で幾分の變化はあらうが、牛馬犬鷄の遺傳する樣に往かぬ。遺傳の率が明白でない、凡人視せられた家から偉人が出で、偉人視せられた家から凡人が出て居る。偉人が遺傳しても精々で二三代、もつと續いても强いて尋ねる位、新たに精良な種族が出た例がない。今後は兎に角、今日迄遺傳が人類に大なる力を占めたと云へず、偉人が出るのは

遺傳よりも偶發及び境遇に因るのが多く、五千年前に傑出したものが、略々同樣の境遇で現代に現るれば、現代にも傑出し得ると思はれる。

二三千年來となつては尙更であつて、孟軻なり、プラトーンなり、現代の大學敎授に優るとも劣りさうにない。政治家も然うである、殊に群衆を取扱ふ政治家に至りては、古今東西を通じて最も相類似する。學術は對象が違へば研究も違ふが、政界の對象は何處でも群衆に限つて居る。小群衆を支配するの能ある者が、必ずしも大群衆を支配するの能がないとも限らず、一地方の長官が一國の首相たるに堪ふることがあるが、假りに小と大と趣を異にするとし、東洋と西洋と群衆に於て特別の差違がなく、寧ろ東洋の方が數に於て優つて居る。印度歐羅巴として數が東洋に匹敵しても、歐洲だけで不足する。先づ之を同等と見做せば、群衆に對する政治家の手心が相似、隨つて政治家として成功する英雄が相似て來る。

地形が違ひ、氣候が違ひ、人情が違ふと共に、群衆を支配する政治家の態度も違ふけれど、違ふのは外觀のことで、手心に變りがない。個々人々を觀れば、性も區々であるが、多數を概括すれば、性情は略々定つて居る。酒を飲んで泣き上戸怒り上戸笑ひ上戸があるにしても、一般の人が斯く三通りに分れて居るのではない。大略喜怒哀樂の情を具へて居るとして取扱へば間違なく、特別の場合に事が違つても、多數を平均した場合に相一致し、其の多數を支配するに何等かの呼吸がある。其の呼吸の宜しきを得た者が政治家として秀で、或は英雄と稱せられる。別段に今古東西の差別がないと見てよい。嚴密に云へば、二人として同じなのがなく、人心の異なること其の面の如しとは、英雄の上にも言へる。殊更違つたものを求むれば求め得られ、違はぬものを求むれば求め得られるが、今日から觀て著しい差があると氣付くのは、時代の變化である。東洋と西洋と著しく違つたのは、西洋に近世史が始まつてからであつて、古代と中世とは其程でなく、頗る相似て居り、延いて英雄豪傑も頗る相似て居る。東洋の英雄と近世歐洲の英雄とを較ぶれば、何處となく異なるを覺ゆるが、古代及び中世の歐洲に較ぶれば、相符合するのを見る。而して近世の英雄にて古代及び中世と異なるは、內實よりも外觀に於てである。

## 英雄の特性

何處でも英雄といへば、何事かに於て尋常に優らねばならぬ筈であるが、單に他人の及ばぬ所を優るとせば、誰でも或點に於て尋常に優つて居る。何人も容貌で特色を備へて居るが如く、精神にも特色を備へて居り、其特色は他人の眞似し難い所である。兩手が無くて足で樣々の藝當をするなど、他

人は到底企て及ばぬ、企て及ばぬとて夫れで英雄と稱する譯に往かぬ。常人よりも能力を備へ、多數の人を動かすのは英雄に列しさうであつて、必ずしも然うでない。古來權力を得て大國を治める者が幾人となく出て居り、廣い意義で悉く英雄とし得ぬではなけれど、普通に之を英雄と稱せぬことになつて居る。藤原氏の盛んな頃に隨分權力を振ふのがあり、津々浦々まで其の命を聽いて畏まつて居つても、公卿連中では英雄らしく思はれぬ。百人一首の法性寺入道前關白太政大臣は世に知らぬ者がなく、又智略あつて保元の亂に關係し、能く大亂を泳ぎ切つて居るが、どうも英雄とすることが出來ぬ。戰爭で强いのが英雄かと云へば、梶原景時、高師直、明智光秀等、如何に善く戰つても、英雄の列に入れにくい。

『群雄割據』といふが如き場合、多少其頭を擡げる者は悉く英雄とするも、稍々意義を限る時はさうは往かず、一種英雄らしき氣分を備ふるを要する。金や、銀や、銅や、鐵や各々色が出來繪具で書き現はせるが、特殊の光澤を書き現はすことは出來ぬ。金は單に黃色でなく、銀は單に白色でなく、黃色白色のものは他に幾らでもあつて、金銀と見えぬ。同一の能力を備へながら、甲は英雄であつて、乙は英雄でない。普通に言ふ所の神は人間の造つたもので、人間と同じ心持をして居りながら、普通の人間に見る可からざる所があつて、何處となく神々しい。古代の英雄は概ね半神半人の相を備へ、漸く歷史に入つて神の分子を去るに至り、尙ほ天籟とか、神籟とか、インスピレイションを得たかに感ぜられる。均しく人間の體を備へ、心を備へ、慾を備へても、何處となく一二段高いやうな氣がする。頭を回らせば英雄皆神仙と云ふが、頭を回らさずとも神仙の分子を含んで居る。普通の俗人であり、極めて俗物であつて、而も脫俗した所があり、或は普通の俗情を以て推すことの出來ぬやうなのがある。

天下の重きに任じて居るかと見れば、僅かのことに感激して、死んで仕舞ひ、死生を見るや甚だ輕い。輕いかと思へば、艱難に堪へ、恥辱を忍び、容易に死なうとせず、尋常の規律を以て律し難い所がある。斯かる特色の多いのがあり、少いのがあるが、全く之を缺いたと見えるのは、何程の能力を備へ、何程の事業を成し遂げても、狹い意義の英雄とならぬ。德川時代二百幾十年、大老若くは老中として太平に貢獻したのは、一通りの勤勞でなく、中に能力の稱揚すべきものがあるが、謂ゆる英雄は有るか無しかである。英雄たるべき者がないかと問はるれば、然りと言はれぬ。斯かる久しい間に英雄の居らぬ筈がなく、英雄として顯れる機會のない所もある。判で捺したやうに極り切つた所では英雄の特色を發揮しやうがない。

何時の代でも英雄たるべき者がありながら、其の顯るゝに適した時代があり、其の顯はるゝに適し

ない時代がある。鱒の刺身を食へば腸に條蟲が宿ると云ふことであるが、鱒に條蟲の如き長いものがなく、人の腸に入つて幾らでも長くなる。他では伸びることは出來ぬが、腸に入つて思ふ存分に伸びるのである。是れは悪い例であるが、英雄が或る境遇で愚物扱ひされ、一旦境遇の變じて大に力を伸ばすのも、之に似て居る。或は之を蛟龍の雲を得るに譬へ、雲を得ぬ間は蚯蚓同樣であつて、雲を得ると共に天上に飛躍するといふ。何にしても蛟龍竟に池中のものでないと云ふ例がある。世間で英雄と稱するのに隨分如何はしいのがあり、餘り當になるものでなけれど、全く無意義でなく、當にならぬ中に幾分か要點を得て居る。脫俗と云ふか、垢拔と云ふか、半神半人とまで往かなくても、十分一或は百分一、神妙な所がある。或は『眞摯』と稱し、或は『至誠』と稱し、或は『熱』と稱し、或は『涙』と稱し、又別の名稱を以てし、世間有り觸れの食うてはこして寢て起きて只其の儘死ぬのと違ふ。斯かる類が何處にでも潛んで居り、或機會を得て天下の檜舞臺に躍り上り、觀客に片唾を呑んで凝視せしむることがある。其が古來如何なる狀態で現れ來つたか、歷史の大部分は之を示すに努める。

## 太平洋側と大西洋側

人類が初め東半球に現はれ出でたやうに、英雄も東半球に現はれ出て居る。太平洋を東にし大西洋を西にする絕大の陸上に幾多の英雄が出沒した。近世史は西半球の發見から起り、近世の英雄は西半球と關聯して居るのがあり、今後愈々西に輩出するを見るであらうが、古代及び中世は東の方で太平洋側、西の方で大西洋側を主にして居る。中間なる印度洋に面して特別の人物がある。普通に神と云ふをば佛とするが如く、普通の英雄を英雄とせず、特別の人物を揚げ、場合に依つて普通の英雄より廣く力を及ぼして居る。而して南方でこそ木の蔭に坐つて沈思冥想するに專らなれ、北にヒマラヤ山を越し、成吉思汗なり、タメルランなり、東西の何人も及ばぬ飛躍を敢てした。而して驚天動地眞に千古を通じての蓋世の雄かと見れば、忽ちにして後が消滅し、洪水の氾濫して直ぐと元通りになつたやうである。驚く可き現象でありながら、人類に何の印象があつたか、殆ど判つて居らぬ。人類の歷史の正系を形造るのは、太平洋を東にした方と、大西洋を西にした方とである。

面積及び人口に於て一方に支那を主にし、他の一方に歐大陸を主にする。支那は國の如くして國でなく、『天下』である。七國となつたり、三國となつたりしたことがあり、統一して一國の形を成しても、普通の一國と違ふ。歐大陸も羅馬帝國の下に統一して居つたことはあるが、此れとて多くの國を寄せ集め、『ムンヅス』として存在し、後に列國分立して現在の狀態となつたのに不思議はない。支那も歐大陸も、一國であつて一國でなく、さりとて列國分立するに及んで、其間に少からぬ共通點があ

り、自づと大陸的氣分のほの見える所がある。

英雄が群衆を代表する所より言へば、人數の多いほど活動舞臺が廣く、夫れだけ手腕を揮ふことが出來る。普通に英雄とするは、所謂中原に鹿を逐ふの徒である。中原とは支那四百餘州を指す。歐の英雄も、大陸を濶歩した者のことになつて居る。大きな舞臺でなければ、思ふ存分に活動し惡い。けれども量の大なるものを以て注意を惹くは素人感しの類に屬し、質から言へば小さくて差支ないことがある。今日游泳の達人は熊本人が多い、水が有るか無いかの川で泳ぎ馴れたのであつて、水の滿ちた大川で修業したのでない。それで大川に於ける游泳の師範となつて居る。牛津劍橋二大學のテームス河に於ける端艇競漕は、世界の評判ものであるが、劍橋の川は曲り折りして端艇の自由を妨げる。不便な處で練習するので却て勝を得るやうなことがある。

古代及び中世に英雄の活動する大舞臺は支那若くは歐大陸であるけれど、支那と海を隔てて日本があり、歐大陸と海を隔てて英國がある。孰れも島國であつて舞臺が小さく、對岸の舞臺の十分一に足らぬ。併し英雄の活動すべき餘地があり、大陸の英雄に比して劣らぬ。但だ日本は支那より隔ることが比較的遠く、多くの事業に於て相互の間に關係がなく、英國は大陸に近いだけ密接の關係があり、大陸から島に渡り、島から大陸に渡つて活動した者が多い。表面のみに注意を拂ふ者は、日本に支那程の英雄なく、英國の英雄の大陸を驚かしたのと違ふやうに思ふが、是れ思ひ違ひの甚だしいものとする。全く距離の關係であつて、日本が朝鮮半島に位して居れば、今幾層か彼の中原に關係が多い。滿洲が明を滅したのは、豐臣秀吉の朝鮮に出兵した兵よりも弱い者を以てして居る。日本が失敗して滿洲が成功したのは、全く距離に由來する。往昔の帆船を以てしては日本は日本で別天地を造るの外なかつた。舞臺の大なる所よりせば、支那又は歐大陸でなければならぬが、技倆を現はすに於て、舞臺の狹いので少しの障りがない。甚だしく小さく、例へば琉球の樣では、如何なる英雄も手の伸ばしやうがないが、日本や、英國や、左まで狹いものでない。國内に腕を揮ひ得れば大陸に押出しても相應に揮ひ得ることは疑を容れぬ。

曾て支那の書を讀み、寧ろ書に讀まれた者は、日本を以て中華の大なるに較ぶべくもないとしたが、近頃支那の動搖する所から觀れば、日本に於て何等及ぶ可らざるを感ぜず、戰へば勝つと同じく、活動の力に於て優るとも劣らぬのが明かになつて居る。追が僧雪舟は畫に於て傑出した丈の事がある。彼は支那に行き、當時の畫家の賴むに足らぬを知り、名畫及び自然を寫して歸つた。雪舟ほどなのは支那にも多く見當らぬのである。英雄も然うと云へる。所で人の活動は或る程度まで舞臺に順應するを餘儀なくされ、支那と歐大陸と多少趣を同じくして居り、前者の英雄と後者の英雄と相對照し得る

のがある。之と共に日本と英國とを並べ言ふの便利を覺える所がある。舞臺が狹くて、實に於て往々妙神に入る。

## 往昔の日本と英國

### 傳說時代及び其以後

何處でも歷史が古ければ神秘的傳說が殘り、半神半人が知られて居る。日本では神代の英雄を擧げ得ぬではなく、伊弉諾尊を純粹の神とし、素盞嗚尊や、手力雄や、金剛力を想はす所がある。けれども後の英雄と同列に扱ひ難い。神武天皇は確か、英雄であつても、皇祖として特別に敬意を表することになつて居り、猿田彥や、八咫烏や、長髓彥や、英雄とするに餘りに後世の事情と違ふ。英雄の始まりは、景行天皇とせねば、日本武尊とすべきであつて、後者は英雄としての傳說が十分に出來上つて居り、若し史詩又は稗史にしたならば、世界の傑作となるであらう。何程傳說で何程事實かは議論は免れぬが、英雄の氣分は遺憾なく認むることが出來る。其の三十歲で薨去あつたのは更に悽愴の感を加へる。實に勇氣に於て秀で、而して多感多情、人情の極めて麗はしい所がある。御陵より白鳥が飛ぶが如き、最早普通の人間界より離れ、餘韻を遺す所が多い。

英國ではアーサー王の傳說が略々此邊に當つて居る。王であつて太子でなく、且つアングロサクソンの侵入に抵抗し、後遂に不利に終り、日本武尊の國內を平定し、皇室を萬全にすると違つて居るがアーサー王ほど後に稗史の材料となつたのは少い。英國內で種々の物語となつたばかりでなく、廣く大陸に傳はり、各地で種々の物語を作られ、後英國に逆輸入し、何かに付けてアーサー王が引用され、近い所でテニスンが詩に作つて居る。王は勇氣があり、智略があり、而して情緖纏綿、物語となつて頗る興味に富み、單に物語に止まらず、其の古蹟と傳へらるゝのが諸方にある。エヂンバラを見下して居る高臺は、アーサー座と言はれて居り、此の高臺を見上げるものは、多少アーサー物語に懷ひ及ぶこと、恰度伊吹山を仰いで日本武尊の舊事を懷ひ起すやうである。而してアーサーは死んで靈魂が鳥に宿り、再び人として現はれる時があると待設けられたのは、尊の白鳥化と相對して面白い。東西に於ける英雄談は斯くして始まると見て宜しからう。

普通の年代記にては、日本武尊とアーサー王と約四百年の差あるが、眞實の歷史に於て更に接近しさうに思はれる。景行天皇に續いて、成務天皇も、仲哀天皇も、英主の資を備へ、剛健の時代といへる。仲哀天皇と神功皇后との間に何か行違ひの事があつたと察せられるが、皇后に至つては武略の程

長く後世の推稱する所に係り、事實が傳奇以上に傳奇の質を帶びて居る。歐洲に類似を求め難く、先づ西亞細亞のセミラミスを以て最も近いとせねばならぬ。併しセミラミスの事は大部分事實で無い。皇后より數百年間、日本に於て半島の一部を領有し、屢次出兵し、其間に相應の良將が出て居る。大伴狹手彦は其一人であり、松浦佐用媛との關係も一の戲曲を形づくる。けれども半島より文物を輸入し、佛敎の普及するに伴ひ、前の勇武の氣風が衰頽し、後半島が唐に併され、日本が大陸に足場を失つてより、全く外に出兵するを斷念し、只內地の政治を整備し、之を潤飾するに汲々たる有樣となつた。唐が全盛になつて威力を輝かしたので、日本で之と爭はうとせぬのみでなく、成る可く唐に模擬するに努め、英雄らしいものの輩出する機會がない。垣武天皇は英主であり、同時代の坂上田村麿は蝦夷まで進み、幾許か稱揚すべきものがあるが、何分にも多年の勢で、國內一般に懦弱になり、唐の風俗に倣うては尙更の事、殺伐なることを野卑と考へ、男が化粧して女と歌の贈答するが如きに全力を盡すに至つた。日本が半島に兵を用ゐたのは、英國が佛國の一部を領有したのと同一の勢であるが、英國では其間に英主良將が幾人も出て居り、『黑太子』の名を轟かしたのは、日本で前に日本武尊、後に大塔宮に當る所であつて、戰爭が烈しい丈け、勇戰健鬪の目覺ましい事蹟が遺つて居る。日本の平安朝は商工業の發達に利益があるにしても、英雄の活動に適せず、他愛もない狀態に打過ぎたとせねばならぬ。

英雄は必ずしも軍人たるを要せぬ、平和時代にも相應に働くことが出來る。和氣淸麿の如き、毅然たる大丈夫と言へるし、菅原道實の如きも、尋常人でない。藤原氏の氏長たる者は、概ね少からぬ經歷がある。併し孰れも所謂英雄の俤を認めるに難かしい英雄らしい。

## 奧羽と蘇格蘭

英雄らしい英雄は支那の感化を受けない處に出で易く、卽ち自由の土地に自由の空氣を吸ひ、自由に活動し得る處に於てする。田村麿の類が代々朝廷に仕へて居らば、其儘平穩に過ぎたであらうが、公卿が懦弱に流るゝに伴ひ、遠方の地で獨立の實を示すやうなのが多い。源氏は軍職を帶びて關東地方に屯し、京都公卿の生活狀態と離れて別に生活して居る。京都の權力の下に立ち、公卿より劣つた官位を得て滿足しながら、事實に於て殆ど獨立の位置を保ち、偶々安倍頼時が奧州に割據し、子貞任が之を襲ぎ、源頼義及び義家が征伐に馳せ向ふことになり、幾年間も戰爭した。源氏が力を逞うするは是からである。

貞任は飽くまで抵抗して遂に滅亡したが、是れ英國で蘇格蘭のロバート・ブルースに當ると言へる。

ブルースは英國で有數の英雄の中に計へられて居る。其の蘇格蘭の獨立を謀り、英軍と戰つて屢々勝ち、時として死んだと噂され、突如として英軍を襲ひ來るなど、後少青年の喜んで語り合ふ所である。將門は言ふに足らぬけれど、貞任は氣魄及び勇武の稱すべきものがないとせぬ。奥羽を合せて蘇格蘭の大さになる。蘇格蘭が多年獨立し得た所から見れば、奥羽獨立も强ち無謀でない。其の一賊魁として取扱はれるのは、國内の統一を標準として見るからであつて、安倍氏が源氏に對抗するは相當の理由あると見ねばならぬ。多年我が管内として支配し來つたものを、朝廷の命を奉ずるとは言へ、源氏の爲めに土地を奪はるゝこと、祖先に申譯ないと信ずる所がある。何處までも抵抗し、斃れて後已んだ所は、形勢を知らず順逆を辨へぬながら、多少祖國に意ある所を諒とするを要する。

英國でブルースを賞讃するのは、蘇格蘭人が今尚ほ勢力を張つて居るのにも困る。蘇格蘭は既に大不利顚として英國と合一して居るが、陰然獨立の地歩を占め、外國人に英人と呼ばれて悅ばず、『我はスコッチである、ブリチッシュと呼ばれるのは宜い、イングリッシュと呼ばれるのは迷惑である』と辯ずる。而して英人の名に於てする世界の事業の重要なる部分は、此の蘇格蘭人の手に成る。蘇格蘭人の忍耐勤勉は英人の畏れ憚る所で、其れ丈け彼のブルースが偉人物と稱されて居る。

日本では之と同樣に見ることか出來ぬが、奥羽人が蘇格蘭人程の力なきは、安倍貞任をして一賊魁たらしむる所がないとはせぬ。源義經は奥州の秀衡を賴つて寄寓し、源氏の旗擧げまで待つて居り、後賴朝に斥けられ、再び秀衡に寄寓することになり、秀衡は賴朝に對して陰然獨立の勢ひを占めて居つた。英國ならば斯く獨立を維持するの勇氣を賞讃して措かぬであらう。朝廷の命を受くべきは勿論であつても、氏族競爭に獨立を謀るは、勇氣なくして能くする所でない。共同の敵に對して合一する以上、平素獨立に努めるのは、即ち己れの力を發揮する所以となる。英國が統一の困難を感じたのは日本の比でなく、今尚ほ幾許か英倫と蘇格蘭と愛蘭に分れ、愛蘭自治案は難問題になつて居る。威爾斯さへ特色を失はうとせず、今のロイド・ジョージは其の爲めに騷いだことがある。斯かる事は統一の害になれど、一面から見れば各々獨立するに努め、容易に他に降らうとせぬのは、日沒せざる英帝國を造るに與つて居る。安倍貞任が今少しく規模を大にしたならば、一の英雄として顯れたであらう。腰圍七尺四寸といふ所、容貌だけでも尋常でない。阪本龍馬は西鄕隆盛の容貌を之に比したことがある。

## 源氏、北條氏、足利氏

源氏は賴義、義家等皆武將たるに恥ぢず、用兵の術に於て他に能く及ぶ者なく、兵を以て爭ふ場合

に、一世に雄飛し得られる。併しさう云ふ氣分を養成するに至つて居らず、京都の公卿に從ひ、其言ふが儘になつた。正直と云へば正直、單純と云へば單純、個人ならば少年時代又は青年時代で、まだ大人になつて居らぬ。所が保元の亂に政權爭奪が一に兵力を以て決すると知られ、兵力が頓に重きを成し來つた。源氏側は殆ど一人の臆病武士がなく、平氏と段違ひである。但だ何處となく若く、徒らに勇を顯して傍若無人の振舞ひする迹がある。爲朝は實際若く、實に年十九、僅かに少年から青年に移らうとする所で、其割に能く事理に通じて居るのを稱揚せねばならぬ。爲朝が作戰計畫に就て發言し、容れられずして事の必ず敗るゝを知りつゝ、尙ほ職分を重んじて奮戰し、故さらに兄義朝の兜を射るなど、危急に臨んで綽々餘裕がある。其調子で大舞臺に出たならば、理想的英雄に成り得たらうと思はれる。

義朝は武略に於て當時第一に居り、今少しく思慮周密であつたならば、權力を握るに何の難いことが無い。思慮を缺くのみか、惜しい事に爲朝のやうな英雄的氣分がない。爲朝ならば決して父爲義を殺さうとせず、何とかして一族を助けようとしたであらう。義朝に人情の微妙な所がなく、力ばかり恃んで孤立に陷るを知らぬ。武將として兵を用ゐるには賴朝よりも遙に優つて居らうが、賴朝の事に臨んで急がず慌てず、徐ろに大勢を察し、萬全の策を決するのと較べ物にならぬ。賴朝に至つて、義朝の智略が幾段か圓熟し、人の殆ど端倪し得ざるものとなつて居る。父祖の遺傳に加ふるに境遇の練磨を以てし、實に煮ても焚いても食へず、敵も味方も手の附けやうに苦しむ。但だ何を云うても家柄であり、お坊さん育ちの所を免れぬ。蛭ヶ子島に流されて居つても、北條時政及び其他に侍づかれ、眞實の事情に疎い所がある。義經は武略の天才であり、源氏が皆武に長じて居る中で最も長じ、眞に天下一品であるが、案外普通の世情に通ぜず、下らぬ所で面相を變へ、戰爭で敗れずに、一場の座談で取返しの付かぬ失敗を演じたりする。

それから觀れば、北條時政及び子義時は實事に明るく、特に義時に至つては總ての人の肺肝を看破り知らぬ顏して打過ぎ、事ある場合に機先を制すること誠に掌を指すやうである。彼は面白い所なく、愉快な所なく、英雄に見るやうな慕はしさを感じさせぬけれど、人をして磐石の如く信賴せしめる所がある。是非曲直は兎も角、義時に從へば損する事が無いと思はれて居る。彼は英雄の神妙な所、殊勝な所がない代りに、英雄の辛辣な所を備へ、如何なる動亂が起らうとも少しも狼狽せず、勢に隨つて勢を制し、必要と見れば晴天に霹靂を迸らするを辭せぬ。實朝や、尼將軍や、其の手の中にある。京都で鎌倉征伐の議あり、檄文を發するや、若し賴朝ならば、流石に腹黑い男も多少處置に迷うたらう。源氏と戰つても、義經の來る迄物が捗らず、大事を取るだけ事が後れる。其處は義時であつて、

豫て斯かる事あるを承知し、其際どれ丈けの事になるかを看破つて居る。武勇の譽ある和田義盛が兵を起した時でも平氣であつた程で、素人の公卿連が兵を起したとて何程のことがあるかと多寡を括つて居る。

彼れ自ら戰鬪に長ぜず、戰線に立つて我こそはと大音聲に呼はるは全く出來ぬ藝當である。併し鎌倉の諸將を〻括り、我が意の儘に指揮することが出來る。事が起つたとて、自ら先んじて當らうとせず、成るたけ人の意見を聽かうとし、時として自ら處置に惑ふやうな顏をするが、併し泰時をして單身出發せしめ、道々兵を集め十九萬に達するなど、誠に必勝の算があつたと謂はねばならぬ。京都を處分するに就ても、少しも惑ふ所がない。三上皇を島流にするは由々しき大事ながら、保元の亂に先例の明かなものがあつて、其通りにすれば宜いと云ふのである。源氏が關東で獨立生活を營み、京都の氣風に遠ざかつてから、絶えず武骨を鍛錬し來つたのが、義時に至つて其の絶頂に達した。

普通の語を以て云へば、源氏は主に膽液質であつて、賴朝の如きは殆ど血の氣がないほど膽液で充ちて居る。遺傳よりも境遇であつて、北條氏も代々膽液質で、只高時に至つて違ふ。之に較ぶれば、北條氏の亡びた後に足利尊氏の出でたなど、甚だ手輕く、單に勢に漂ふに過ぎぬ。尊氏は多血質であらう、或は神經質であらう、粘液質のところもある。併し決して膽液に富んで居らぬ。豫め何を爲すかに就て一定の見識がなく、只度量の大なる所を取得とする。度量は圖拔けて大きいと言へる。却て新田義貞に鎌倉流卽ち膽液質を見る。鎌倉ほどの氣魄もなく、才幹もなけれど、信ずる所に向つて進み、如何なる困難にも耐ふる執着力がある。尊氏のやうに勢ひ次第といふのと違ひ、其れ丈け風向が惡ければ困難に陷る。併し如何に南朝側で事を成すのが困難であるにしても、義時、泰時、時賴、時宗の如くんば、何とか勢ひを制し得たらうと察せられる。

英國のクロムウエルは義時に似て居るか、尊氏に似て居るか、之を合せた程の力はないけれど、何程か之を合せたところがある。而して日本で義時及び尊氏を奸物とし、英國でクロムウエルを英雄とするは、國體の關係もあり、他にも事情あるが、義時及び尊氏は朝廷の爲めに利祿を奪はれるのに抵抗して居り、クロムウエルは人民の權利を擁護するを主眼とする事になつて居る。利祿の爲めに君主に抵抗するとあつては、卑劣の感を免ることが出來ぬ。利祿も根本に於て權利であるけれど、權利として餘りに原始的に屬する。利祿の爲めに力づくで爭へば、始末に了へなくなる。英國でクロムウエルを以て英人の精神を發揮した者とするのは、時代の進んだ所もある。クロムウエルは尊氏より三百年後に出で、義時より四百年後に出て居る。其れでも英國でクロムウエルを賞め出したのは一世紀來の事であつて、其以前は逆賊として取扱つて居り、今でも逆賊扱ひにして居るのが少くない。彼の義

時及び尊氏が利祿の爲めに朝廷に反抗したのは甚だ下種張つて居つても、彼れ自ら利祿を貪らず、頗る質素に過した。北條として高時、足利として義滿が豪奢を事とする樣になり、義時及び尊氏は單に己れ自らの事を考へなんだやうである。高時が驕り散らして北條氏が滅び、義滿が驕り散らして長い間の戰亂となり、共に相應の制裁を受けた。義滿が一時平定し得たのは、自分の力もあり、世が亂を厭うた所もある、執れにしても勝に乘じて驕り散らし、世が亂れる上に亂れたのは、義時及び尊氏に及ばぬ所であらう。

義時及び尊氏がクロムウエルに似て居るのは、政治的運動の上のことで、思想上に似て居る所があれば、殆ど無意識と謂ふべく、一方は封建武士であり、他の一方は平民の自由の爲めにし、年數に距離があつて、思想にも距離がある。クロムウエルとなれば、全く近世の人物に屬し、古代及び中世と離して見ねばならぬ。

# 東亞大陸と歐大陸

## 史記とプルタルク列傳

近世に入つて、日本が東洋で主要の位置を占め、英國が歐洲で主要を占めるやうになつたが、古代及び中世では、大陸が本舞臺であり、日本や、英國や、其の附屬物たる形を免れぬ。古代の英雄は史記とプルタルク列傳とで略々盡し、後世英雄豪傑を語る者は概ね之に據つて居る。此の二書は相一致する所多くとも、支那では歷史が連續し、卽ち夏殷周より秦漢に連續し、歐洲では大略希臘と羅馬に分れ、變遷の順序が違ふ。根本的に違ふので無く、周と秦と起原を別にし、希臘も後に羅馬に併合し外觀よりも似て居る。但だ支那は土地が全く接續して渾一の度が强く、希臘と羅馬とに區別するやうな譯にいかぬのである。

人智の發達に應じ、史記とプルタルクと同樣の體裁で出來上り、言はゞ列傳體に編纂されながら、史記では帝紀、世家、列傳として種類別に年代を逐ひ、プルタルクは一々希臘の人物と羅馬の人物とを並べて居る。史記では同じ型の人物でも、時代を異にすれば別々に取扱ひ、プルタルクでは希臘と羅馬と時代を異にしても、同じ型の人物と見て一緒に取扱ふ。此點で互に違ひつゝ、自然に相一致する所がある。史記には時代を以て列し、同時代に二幅對と見做すべきものがある。項羽本紀と漢高祖本紀と續いて居るのは後世此二人を對照するに便利を與へて居る。齊太公世家と並んで居る。孫子吳起が一列傳となり、蘇秦張儀が並んで居り、孟嘗君、平原君、信陵君、春申君等が並んで居り、廉頗、

蘭相如が一列傳になつて居る。屈原と賈誼を一列傳にしたのは、全く時代を異にした者を併せたのである。期せずしてプルタルクと一致し、英雄豪傑を考へるに便利が多い。

プルタルクは希臘と羅馬と相對し、全く時代を異にする者を比較する爲めに、無理の出來て居るのがある。口に希臘、羅馬と云ふものの、多くの事情に於て相違ひ、人物も違ふ。違ふのを一緒に取扱ひ、其儘何時でも並べ言ふことになつて居る。後世英雄の標本と云へば、アレキサンダー（原名アレキサンドロス）とシーザー（ケーザル）であり、漢字で歷山該撒と書けば、直ぐと理解される。所が二人は時代を異にし、延いて活動の範圍をも異にし、必ずしも並べ言ふべきものでない。希臘で最も能く遠征した者と、羅馬で最も能く遠征した者とを合せたに過ぎぬ。デモステネスとキケロとも、時代を異にして居り、同時代の蘇秦、張儀を並べ言ふの例に依れば、デモステネとエスキネスとを並べ言ふべきである。史記は時代を以て言ひ、プルタルクは時代に關はらず、希臘と羅馬とを對するに務める。けれども希臘と羅馬と全く國を異にすると見做し得るだけ、同時代であるかに取扱ふことが出來英國のシエクスピーアと獨逸のゲーテと相對するやうな所がある。之も便利であつて、一長一短、一得一失、史記とプルタルクと、古代の英雄を書き現はすに遺憾なしとする。

史記は支那に限り、プルタルクは歐洲に限り、雙方に連絡がないが、連絡を付ければどうなるか。萬里相隔り居り、希臘と羅馬との比でなければ、年代に於て略々一致するが上、活動の範圍に於て相匹敵する所がある。夏殷周が黃河附近に榮え、後秦漢に一統した所、希臘半島が文明の中心となり、後羅馬帝國の下に一統したのに當り、雙方に輩出する人物も相比較するに難くない。史記を讀む者は夫々興味を以て讀むが、同じく帝紀、世家、列傳でも、多く讀まれるのがあり、少しく讀まれるのがある。項羽本紀や、高祖本紀や、頻りに讀まれる、蘇秦張儀も頻に讀まれる。プルタルクも然うであつて、歷山該撒の如き、最も多く讀まれる。デモステネス、キケロも、能く讀まれる。人に好き嫌ひがあり、或は此等を讀まずして、全く他を讀むのがあり、且つ多く讀まれるのが必ずしも人物の傑出したと限らぬ。何の時代にも、人氣者と云ふのがあつて、實力及び事業の如何に拘らず、世間に持て囃される。歷史の人物も然うであり、英雄に人氣英雄がある。何でもない事で英雄らしく知られて居るのである。けれども英雄として知らるゝのは、何程か此類の者であつて、千年二千年、格別世に知られぬのは、實力に於て蓋世の雄を凌いでも、人心に關係が薄いとせねばならぬ。歷史家の見解は別とし、普通英雄豪傑と稱するは、世間で最も多く知られる所を主にする。

最も多く知られても、堯舜の如きは餘りに太古に屬し、事業も簡單であり、英雄中に加へにくい。プルタルクには、初めに希臘のテセオスと羅馬のロムルスとを擧げてあつて、此れとて餘りに太古に

屬し、歴史よりも神話に近い。所で支那では聖人が天下を治める樣に傳へられ、歐洲で英雄が權力を握ることになつて居るのと違ふ。史實がどうであつても、支那太古の執權者に英雄らしいのが少く、歐洲では概ね英雄の氣分を帶び、腕力にさへ勝ぐれたのがある。支那に平和主義が勝を制して居つたとも言へるが、是れ土地の事情に依ることであつて、猶太などは執權者に皆豫言者の風がある。支那にしても、愈々國家の形を整へては、執權者も多少後世の所謂英雄に似て來る。希臘のレコルゴスなり、ソロンなり、テミストクレスなり、皆當時に傑出し、後の英雄に劣らぬにしても、事蹟が詳かに知られて、眞に英雄らしく感ぜらるゝは、ペリクレスであり、支那ならば武王か、周公か、太公望に當る所である。

## 周と希臘

ペリクレスが希臘の全盛を代表するは、彼れ一人の力でなく、其の下で働いた多數の力であつても、ペリクレスの名を以て一切を代表することが出來、且つ彼に夫れだけ資格があると言へる。周の始めはさうはいかぬ。文王は後世周の第一人として推す所なれど、是れ亦例の聖人の列に居り、英雄らしく見えぬ。武王に至り、自ら兵を率ゐて時の執權者を倒し、自ら權力を握つたのであるが、何程の實力を備へて居つたかは明瞭でなく、普通に知られて居る限り、餘り實力に富まず、兵に於て太公望に任せ、政治に於て周公に任せ、事實上此の二人が分擔して居る。而して太公望の人物は明白を缺き、別に影武者があるやにも考へられる。周公は事業として傳へらるゝ所より推し、頗る政治の才に富んで居つたのを察し得るけれど、何分にも之を詳かにすることが出來ず、何でも善い事を周公に歸することに爲つて居る。併し先づ此の三人が相寄つて周の天下を造り得たといふべきである。實際はどうあるにしても、周室が鞏固になり、名義だけでも三十七世八百六十七年續いたのは、支那に珍らしい事で彼の三人は此の珍らしい例を作つた者として記憶せられる。勢の順調ばかりでなく、何程か實力を備へて居つたらう。

ペリクレスは此の三人の力を併せたものとは言へぬ、時勢もあるが、周のやうな太平を致す譯に往かなんだ。けれども三人よりも約六百年後れて出で、文明は周の郁々乎たる文明に優るとも劣らず、而してペリクレスの手の善く行屆いたことが、記錄を以て比較的明かに知り得られ、國家に首長として、三人の誰にも優るを斷定して不可ない。希臘は後内亂にして衰弱し、マケドニアに併されたが、若しペリクレスの計畫通りに行はれたならば、啻に能くフイリツプに抵抗し得たばかりでなく、羅馬にも抵抗するを得、アドリア海を境として兩立し得たらうと推察される。ペリクレスは當時の施設に

於て最も宜しきを得、後世の爲めに圖るにも最も宜しきを得、只反對者が其の計畫の實行を妨げたが爲めに國家の衰滅を來したといふは、確かに一理がある。是にも種々の事情が交り、名門の利益ありが小國分立の不利益あるが、少くも表面の道筋に於て然うなる。ペリクレスは周初三傑を合せた程の力なくても、之を合せて三分したよりも力があり、折半若くは三分二に達するであらう。ペリクレス以後、希臘各地に幾多人物の輩出し、中に英雄を以て目すべきものが少くない。雅典のクレオン、ニキアス、コノンなり、スパルタのブラシダス、リサンドロス、アゲシラオスなり、テーベのエパミノンダスなり、其他相應に實力を示すのがあり、單に群衆を支配して國難より救ひ得るのみでなく、甘んじて己れを犧牲にし、人格の頗る奥床しいのを見出す。けれども此等を知るは、歴史を調べる者又は傳記を喜ぶ者のことであつて、一口に英雄と云へば、歴山を推すことに定まつて居る。歐洲で英雄らしき英雄は歴山を以て始まる。

## マケドニヤの興隆

支那で誰が歴山に當るか。時代の似て居る所から言へば、秦の始皇と羅馬と該撒と明かに當るが、之に先んじて支那に如何なる英雄が出て居るか、聖人を標準にする丈け、歴山に匹敵するものが出て居らず、強ひて言へば齊桓晉文と云ふ所とする。桓公は躬自ら實力に富まず、功業は管仲の手を以て遂げられたが、周領に權力を振ひ、國外に威力を伸ばした所、歴山の活動範圍に劣つて居らぬ。桓公と管仲とを合せば、武略に於て歴山に及ばず、治國の才に於て之に優る。支那に相應の英雄的人物が出て居ながら、兵力を以て經營するものがなく、兵力を以て經營しても、其兵力は程の知れたものと思はれる。春秋戰國に於て、盛んに兵力を用ひ、名將の續出すれど、歴山の獅子奮迅の勢あると同日に言ふことが出來ぬ。君主自ら兵を率ゐて活躍するは極めて稀れで、戰爭好きといふのも、將の出征を命ずるに止まり、將は命を承けて出發し、敗北すれば嚴刑に處せられ、一の受負師たる形がある。馬上を以て天下を取るの最も目覺ましいのは、項籍及び劉邦であつて、支那の英雄らしい英雄は茲に始まる。

記錄の傳へる限り、歴山は如何にも英雄らしい英雄と云へる。若し蓋世の雄を想像に描くとせば、自づと歴山の如く男らしきものとなる。歴山該撒と並べ稱するけれども、快男子たる點に於て、該撒に多くの缺點がある。歴山は三十四歳の元氣盛り歿にし、餘計な缺點を現さなんだ所もあり、或は短命で幸ひとも言へようが、兎も角も一生を通じて寸分の隙なきまでに蓋世の雄たる俤を留めて居る。該撒は之に較べて何處となく俗物と見え、大人物として凡人の大なる者に屬する。歴山は天馬の昇り

て空に行き、降りて地に走るが如く、何人にも手に汗を握らすやうな興味を覺えさせる所がある。項籍は武勇人に勝れ又、人情に厚く、氣分の歷山に似た所あるが、割合に薩張せぬ、心に蟠まりがある。韓信が言うたやうに、人の病氣を見て涙を流しながら、與ふべき物を惜んで與へず、餘り器局の大きい方でない。歷山は此點に於て頗る綺麗で、只世界を切り從へるに力を致し、區々たる財寶の如き、土地の如き、何とも思はぬ。廣大なる土地でも、人に呉れてしまひ、頗る薩張して居る。力山を拔き氣世を蓋ふと云ふは、實に彼の事である。

父なるフィリップは、夙に其の英才を認め、其の悍馬を御するを見て曰ふ、『我領土は汝に取つて餘りに狹い、汝新たに領土を得るの外ない』と。新たに領土を得るは其頃の氣風であつて、歷山も只之を念とし、有りと有らゆる國を悉く平げようと思ひ込んだ。父も遠征を志したが、暗殺されて仕舞ひ歷山は二十一歳で位に卽き、國內の反抗を鎭壓し、隣國の背いたのを壓伏し、二十三歳で三萬五千の兵を率ゐ、波斯征伐に出發し、屢々寡を以て衆を破り、遂に全く征服するを得た。運用の妙ばかりでなく、勇敢にして陣頭に立ち、往々劍を拔いて敵と渡り合ひ、兜も鎧も傷だらけになる。而も敵に對して徒らに殘虐を事とせず、王族の捕虜となつたのを待遇すること頗る宜しきを得、王ダリウスも之を聞いて嗟嘆して曰うた、『若し勝利を得れば、歷山の如く敵を取扱はう、到底滅亡を免れぬならば、歷山の手に滅されて滿足する』と。歷山は後更に印度に遠征し、最早他に進むべき土地なきかと嘆息して兵を返した。歷山は幾何か波斯の奢侈に感染し、酒色に溺れる迹はあつたが、常に自ら節制することを忘れず、當時の風に比して能く節し得たのを認めねばならぬ。感情が强くて怒り易く、怒れば一刀の下に斬りたくなるのを出來る丈け忍耐し、最早耐へ切れなくなつて癇癪玉が破裂する。功臣クリトスが罵つた時、林檎を面に拋げ付け、側の劍を取らうとし、周圍の人が仲に入つて頻りに詫びるので氣を靜かにして柔らいだが、其の愈々增長して傍若無人の振舞するや、槍を取つて一擊の下に刺し殺した。殺して我に返り、槍を自身の咽喉に當て、左右に遮られて俯伏し、其夜も翌日も、悲嘆の涙にくれ、人が之を慰めるに餘程の困難を感じた。多情多恨、動もすれば情に馳せて止まる所なく、只自ら節制に努めて、其の甚だしきに至らぬのである。感情も强いが、意志も强い。千軍萬馬の間に起臥しつゝ、政治に深く心を用ゐ、死ぬる頃、波斯の灌漑事業を思ひ立つて居つた。

歐洲の文明を西亞細亞に傳へ、印度の富を歐洲に知らしたのは、實に歷山であつて、平生我が位置のみを念とせず、其の死する時、誰に帝國を引渡すかとの問に對し、『最も適當の人物』と云ふに止まつた。英雄らしき態度は歷山傳の何處にも附纏つて居る。彼は感情が强過ぎはせぬか、英雄は喜怒哀樂を色に現はさぬが宜いではないか、時と場合とあるが、事々物々、一々打算し、利害得失を圖るに

專らなるよりも豪快を感じさせる。彼は猪突猛進するけれども、決して無謀の戰ひをせぬ、進むに臨んで必勝の算を立てる。直覺して勝敗を知り、其の直覺が滅多に誤らぬ。沈思冥想して複雜なる問題を解するの能力を具へながら、大抵の事は卽斷卽決、何等惑ふ所がない。熟慮せずして熟慮したと同樣の結果を得る。歷山の如き人物は支那に類を求め難く、日本の上杉謙信に似て規模の大なるものと云ふが適當である。謙信は入道となつて冷かな所があるけれど、時に感激して殊更に困難を招くことがある。動員の兵數も歷山に讓らぬ、京都に攻め上らうとした時の兵は三萬五千位でなかつたかと思はれるが、何分にも百數十里の活動で、距離を以て云へば甚だ狹い。謙信をしてマケドニアに在らしめたならば、歷山になつたであらう。共に俠氣に富み、利益を得るよりも、危險を冒すのを愉快とする迹がある。

危險を冒すの性分は、歷山の遠い親類に當るエペイロス王ピルロスに於て著しく現はれて居る。ピルロスは歷山に私淑し、歷山が東に進んだ代りに、西の方羅馬及び其他を併さうとした。歩兵二萬、馬三千、象若干等を率ゐて出帆し、南伊太利で羅馬兵と戰つて勝ち、羅馬城へ七八里の處まで進んだが、數回の激戰で自ら兵を損すること多く、引續いて追擊する譯に往かなんだ。其後或はカルタゴと戰ひ、或は羅馬と戰ひ、遂に利なくしてエペイロスに歸り、マケドニアと戰つて之に勝ち、更にスパルタと開戰し、アルゴスに進んで四十七歳で戰死した。羅馬は波斯より强く、歷山の如く連戰連勝するを得なんだが、冒險の氣象に富むことは更に超えて居り、用兵の術に於て孰れが優つて居るかは言ひ難い。若し西歐に勝利を續け得たならば、歷山と並び稱せられるのである。其れでなくても、戰史の上で並べ稱するの價値がある。

## 漢楚戰役

支那では君主は概ね軍事に長ぜず、良將があつても、君主に使はれるだけで、必要の場合に使はれる。秦の白起王翦の如き、眞に名將であるが、兵事に於ける一技術家に止まる。支那で活動の範圍の最も廣いのは秦の始皇に始まり、規模の雄大なる羅馬の該撒も及ばぬ位である。併し彼れ自ら何程の實力を備へたかは分らぬ。平凡でないのは確かであつても、自ら兵を率ゐて戰つたことが無く、將としては將に將たりとでも謂はねばならぬ。是れ君主の位に登つてのことであつて、位に登らねば、諸將が命を聽かぬかも知れぬ。制度が定まり、百法が整ひ、永く後世の模範となつたのは、幾多官吏が從來の制度を考へ、統一の事情に鑒みて制定した所に繫る。萬里長城とても、前代からあつたのを修

復したり、增築したに過ぎぬ。彼の如く連亙して築き上げるのは、始皇にして初めて爲し得るとしても、扶蘇蒙恬等が與つて力がある。始皇は坐して英雄を操縱するの形がある。而して是れ支那に於ける英雄の理想であつて、眞に劍を拔いて立ち、軍隊の力を以て權力を握り得たのは、覇王項籍を除いて幾人もない。

歐洲の所謂英雄らしき英雄は、項王を第一に推す。彼れ實に兵に長じ、兵を以て進む處、能く敵し得る者がない。如何なる戰術を以てしたかは分らぬけれど、到る處碎けざるなきを以て、將材の最も優つた者なるを察し得られる。彼の如きが國外の遠征を企てたならば、東洋に歷山該撤を出現することになつたらう。實際支那の統一は、歷山該撤の侵略と大差がない。歷山は自分の領土が狹いので他國に討つて出で、該撤は他國に出られるので出ることになつた。支那戰國は列國分立して居り、之を統一するのが功名心の絕頂を形づくるに足る。支那を統一して、夫から何處に出征すべきであるか。北に匈奴があつても、漠たる沙漠で之を得たとて何の利益がない。始皇は政治的技倆あつて軍事的技倆がなく、長城を築いて自ら守るの外ないと云へるが、項王は軍事的技倆に於て何人にも優り、若し地位を鞏固にし得たならば、何處へか出征しようと考へ、歷山と同じく『世界は是れで終りか』と嘆息したかも知れぬ。或は後の漢武帝の如く、匈奴を併さうとし、武帝が將を遣はしたと違ひ、自ら出征したらうとも思はれる。何にしても項王は兵力を以て天下を治める珍らしい例に屬す。

支那で馬上に天下を治むると云ふのも知れたもので、何程も兵を動かして居らぬ。其れさへ拙策とされ、只能く文武の才を用ゐると云ふものが最も宜いことになつて居る。自ら兵を率ゐて東奔西走するの時、眞の英雄とされず又實に兵に長ぜぬものに破られることがない。項と劉との競爭が之を例證する。兵を率ゐて進んでは、勢ひが一局部に限られ、群雄を操縱することが出來なくなる。今日支那で電報を以て戰ふと云ふが、電報を打つに巧みなのは、一部の將よりも智慧が優つて居る。項籍は兵に將として向ふ所敵なく、夫れだけ群雄の操縱を忘れる處があり、遂に劉邦をして漢高祖と爲らしめた。

## 支那英雄の模範

劉邦なる漢高祖は、支那の誂へ向の英雄である。彼は項籍と戰ふ每に敗れるばかりでなく、自ら無能を以て得意として居る。方略に於て張良に若かず、軍事に於て韓信に若かず、經濟に於て蕭何に若かず、只能く之を用ゐて天下を得たと明言し、之を聞く者は皆成程と感心した。支那には、さう云ふのが權力を握るに適して居る、卽ち飽迄大風呂敷で、肝腎の所に括りを付けると云ふのが群雄を駕御

する所以である。高祖は生れも惡けれど、隨分不作法千萬で、儒の冠に小便したり、人を罵り飛ばすことを何とも思はぬ。何とも思はぬが、斯くするのが不利益と氣が付けば、何時でも改める。

無禮講が悅ばれるやうに、不作法な事をすると、人が遠慮せずに集まる。併し不作法ばかりで治まりが付かぬと、謹直な連中は不快を感ずる。そこで不作法なのに顏を顰め、今少しく御注意をと願へば、直ぐに恭しくなる。今惡口雜言して居つたかと思へば、膝を直し恐れ入つて詫びるなど、小言を言つた者が、餘りに早く諫めを容れられたので恐縮せずに居られなくなる。特別に自分を尊敬し吳れたと己惚れたりする。實は不作法にして急に改めるは難かしくない。氣が咎めて敢てすることが出來ぬだけで、是れほど手もなく出來る事は他にない。頭を下げさへせば其れで濟む。頭を下げたとて、痛くも痒くもない。其何でもない事が普通に出來ねので、喧嘩が絶えぬ。頭を一寸下げる下げぬで、青筋を立てて爭ふは割に合はぬ。彼れ劉邦は其邊を見て取り詫びろと云ふなら幾らでも詫びると、一種の悟りを開いて居る。度量の大なること驚くばかりと言はれ、無能の身を以て群雄を手玉に取ることが出來た。彼の如く人を容るゝは、實に他人の及ばぬ所であるが、斯くして權力を占めるは、支那に適用することで、歐洲に多少其形跡があつても、今一層個人の實力を備へなくてはならぬ。漢然取止めのない大風呂敷で群雄を引括めるのは頗る難い。

地形が違ふ程、其點が違つて居る。支那の漢然たるのと、歐洲の錯綜するのとを較ぶれば判る。支那では自ら特別の能力を備へるよりも、有能の士を多く狩集めたのが勝つ。歐洲では有能の士を集めねばならぬが、夫ばかりでは人の侮蔑を招き易く、何等か能力に於て他に優るを證明するを要す。高祖は巧みに人を用ゐるの能があつて、其の能が勝を制したにしても、人の能を使用するのと自分の能を發揮するのと、英雄として差異がある。單に人を使用するのは、秩序を回復し又は事業を擴張するに適するけれど、其人の生存した爲めに新たなる現象の起るのを望む譯に往かぬ。歷山が人を使つたのみならば、歐洲と印度との交通を開くに至らなんだらう。當時歷山の此擧に反對して、大抵に思止まらさうと努めたのが幾人もあり、中には公然不平を唱へたものもある。歷山は自分の思立つた事を何處までも決行しようとし、又之を決行するの力を備へて居つたが爲め、萬難を排して大遠征を遂ぐることを得た。後何時か此交通が開けるに極つて居るけれど、歷山の力で何程か早くなつたのを認めねばならぬ。彼の遠征があつてから、歐洲と印度との交通が一の大なる希望となり、千八百年後の新世界發見も、之に關聯して居る。コロンブスが米洲に到着したのは、印度に到着する目的に於てし、バスコ・ダ・ガマが喜望峰を回つたのも印度を目指したのである。前に企てられなんだ所をば、進んで道を開き、幾代も人をして『印度へ、印度へ』と憧憬せしむるが如き、歷山ならでは出來まい。

人を使ふに止まるのは、當時の人の考へる所の外に出づることが出來ぬ。高祖は人の註文を聞き、成る可く之に應ずるだけで、破天荒の事を企てるなど、殆ど想像したことも無い。

併し支那では斯かる傾向を自然とする。支那は內地で事が足り、內地の平和を維持しさへせば、功名心の限りを悉すことが出來る。支那から印度を征服するのが不可能ばかりでなく、內地だけで果てしない世界を形づくつて居ると云ふのが自づと人の頭に浮び、隨つて高祖の如き人物を最大英雄とすることに爲る。歐洲では新たなる道を開くの可能性があつて、能力がなければ夫までのこと、人に優るの能力があれば、何等か現狀を打破し、局面を展開して呉れるであらうと望まれる。人の能を借るのみで、英雄たるに至らぬ。英雄とせられても、大英雄とせられぬ。

## 支那の對外發展

高祖は內地の平和を念とし、其の平和を維持し得れば足るとしたが、惠文景三帝を經て、武帝に至り、斯くして滿足せず、世界の有る限りを統一しようと企て、衛青、霍去病、李廣利等を遣はして、匈奴を擊つた。是れ普通の支那流と異なる所で、歷山、該撤が支那に現はれたものと見做されさうである。實に支那に珍とすべきであつて秦始皇と並べ稱するに足り、剩へ共に兵を國外に用ゐながら、始秦皇は守勢を取り、漢武に攻勢を取り、漢武こそ歷山、該撤の經略ありと言へるらしい。所が然う言ひにくいのは外でない、武帝が世界統一を思立つて領土を擴げたことは、歷山、該撤を凌ぐにしても、自ら坐して事を成さうとし、歷山、該撤の自ら兵馬の間に起臥するのと違ふ。

高祖は無能と云はれても、相應に戰つて居る。負けるだけで、戰ふの勞を厭はぬ。自ら兵を率ゐて匈奴と戰ふなど、始皇の敢てしなかつた所を敢てして居る。彼は匈奴を征服しようと思ひ込んだけれど何分にも軍事に長ぜず、物の見事に負けて仕舞ひ進退維谷まつて體の好い降參をし、辛うじて平和を克服し得たので、實に懲々し、成るたけ兵を用ゐぬことにしたのである。後繼者も其方針を守り、何處迄も恥辱を忍んだが、漸く年數を經て財政が裕かになり、尙ほ匈奴が衰弱したとの報道を得たので、之を引括めて領土にしようと考へるやうになつた。太平で功を立つるに苦しんだものや、出兵の騷ぎで大儲けしようとする者や、相依つて武帝を煽て上げた所もあるが、何にせよ、武帝は大に勇奮し、志に於て歷山、該撤に優つても劣らぬ。併し高祖よりも人を賴りにして居り戰功があれば賞し、失敗すれば罰し、單に賞罰を以て世界を統一し得るかに考へた。前よりも領土を擴大し得たけれど、得る所、失ふ所を償はず、歷山、該撤が分捕品を以て本國を飾つたのと、同列に言へぬ。斯くても、武帝を以て英雄とし得るか、英雄とせば、蓋世の雄とするに躊躇せねばならぬでないか。併し夫れと

て支那の事情から來て居り、支那では之で濟むのである。濟むが爲めに蓋世の雄たるの志あつて、蓋世の雄たるを得ぬこともある。若し武帝が項籍であつたならば、幾層が面白いことをしたらうと思はれるが、何うであらうか。

## 羅馬帝國の建設

歐洲で希臘の歷山に次で羅馬の該撒を擧げ、該撒の大陸を一統した所は、正しく秦始皇に當るが、始皇以前に有力な人物あるが如く、該撒以前に有力な人物がある。伎倆よりせば、誰が最も傑出して居るかを言ひ難い。始皇若くは該撒と同等の伎倆あつても、氣運の熟するまで始皇若くは該撒と同樣の事を爲す譯に往かぬ。始皇は現はれた所に於て、最も政治的伎倆に富んで居り、軍事上に見るべきことがない。懷手で天下を取つた形である。該撒は幾年も身を戰場に曝し、歷山と並び稱せられるのも其の爲めであつて、時代の遲れて居るだけ、歷山よりも規模が大きく、眞に蓋世の雄と稱せられさうであるが、果して軍事上に傑出して居るか、軍事上よりも、政治的伎倆の業を了へたのでなからうか。該撒以前のマリウスなり、スルラーなり、一廉の人物であつて、軍事に於ても、該撒に劣ると思はれぬ。該撒は軍事に長じたに相違ないけれど、他に類のない程に見るのは見過ぎて居る。其の遠征して勝利を得たのも、軍略の卓越した所を證明するのが少い。

軍事にかけて歷山は天才であつて、該撒は能才である。歷山は殆ど軍神と稱するに足り、何事にも秀づる能力を具へて居つたが、何分にも早く歿し、何處まで到達し得たらうかを知ることが出來ぬ。之に次でピルロスが天才であり、カルタゴのハンニバルも天才である。ハンニバルは軍人として傑出し、後の該撒の比でない。併し該撒は軍事こそ非常に卓越して居らざれ、其の當時一切の事に於て尋常に優り、政治的運動を以て、優に他を壓伏するに堪へた。其の能く政敵を滅ぼし、全權を握つたのは、政治上に勢ひを制するの巧みな所から來て居る。當の敵たるポムペウスと戰場に相對し、無造作に之を破つたのは、戰場の驅引に通じた所もあれど、ヨリ以上に政治的運動の巧みな所がある。ポムペウスが如何がはしい軍隊を以て對陣したのは、眼の利かぬ所あるにせよ、早く勢ひを制せられ、十分に準備を整へることが出來なんだ。或は其の餘りに腑甲斐なく負けたのを精神の異狀に歸する。

該撒が『賽を投じた』と叫んでルビコン河を渡つた時は、早くも勢ひを制して居る。之を渡るに就て躊躇し、幕僚も議論區々になつたが、遂に斷然馬を河に乘り入れた所、遺がに勢ひを見るに機敏である。而して其の機敏は戰場に於てよりも、政界に最も著しく現はれ、羅馬の實勢が何の狀態で、何人も操縱し、何處より如何に支配すべきか、之を打算するに妙を得て居る。政治上の勢を察し、敵の

機先を制し、遂に能く大帝國を建設したのは、正しく始皇と東西に相對する。

始皇の人物は詳かに知られず、時の政府の施設を以て其の方寸に出でたと假定し、智略の群に拔いたのを推察するの外ない。實に秦の制度は後世歷代の則る所となり、全く其範疇より脫するのがなく、此點に於て歐洲列國皆多少該撒の制定した所に據ると似て居る。始皇、該撒が百世に傑出する人物と云ふのでなく、大勢の趨く所に始皇、該撒の名を附け加へたとし得るが、普通の君主若くは大統領と違ひ、個人として特別の能力を具へたのを認めずに置けぬ。該撒は比較的經歷が詳かで、明かに才能の如何を知ることが出來る。殆ど何事にも秀でて居り、辯舌に於てキケロに次ぐの勢ひである。始皇の事は分らぬとし、漢高祖は無能で天下を得たと評判さるが、該撒は確かに有能で、多藝で、何にかけても相應に遣つて除けることが出來る。盲判を捺す所か、人一倍に物が判る。けれども如何に多藝多能なるにせよ、大帝國の權力を握つたのを以て之に因るとする譯に往かぬ。軍事上に左程傑出せずして能く戰勝を收めた如く、政治的伎倆に傑出せずとも、權力を握り得ぬとは限らぬ。

該撒は高祖ほどに人任せでないが、大勢に乘つて權力を握つたのは、高祖と大差がない。其のポムペウスに勝つたのも、高祖が項王に勝つたのに似てゐる。ポムペウスより能力が優つても、其の事業の大なるほどに能力が優つて居るのでない。ポムペウスは餘りに多寡を括り、羅馬政府で該撒を公敵と布告した以上、該撒の軍隊は該撒に背いて歸服するであらうと見込み、一向準備を整へず、弱い貴公子達を連れて輕々しく戰つたので、譯もなく負けて仕舞つた。相當に準備すれば、決して彼の如く脆くない。準備せぬのが智慧の足らぬ所としても、其處は驕る者久しからずで、該撒に取つて勿怪の幸ひとなつて居る。一方は一生懸命、一方は油斷大敵、勝敗は戰爭を待つまでもない。韓信は高祖を『所謂天授にして人力でない』というたが、該撒は高祖より有能でも、何程か斯かる跡がある。人物の知れた所で、該撒に對し高祖を引合に出すが、勢ひの上で、該撒が始皇に當り、甥のアウグストが高祖に當る。

秦は漢に滅ぼされた形あれど、是れ外面のことで、漢は專らの秦制度及び政策に據つて國を治めて居る。秦と戰つたものは、何でも破壞しようとしたのに、高祖は其れ程でなく、殊に其の隨一の幕僚蕭何は秦の圖書を取出し、之を參考にして秩序を回復し、且つ維持するに努めた。始皇は名義をこそ高祖に奪はれたれ、事業に於て高祖といふ好い後繼者を得て居る。高祖を始皇の養子と見做して妨げない。該撒はブルツス一味の徒に殺され、羅馬は自由になつたと叫ばれたが、幾ほどもなくアントニウス及びォクタヴィアヌスの爲めに復讐され、尋で此二人が相爭ひ、後者が勝利を得てアウグストになつたこと、恰度項籍と劉邦と相爭ひ、後者が勝利を得て高祖になつたのに似て居る。支那は高祖の

即位を以て政治變動に一段落を告げ、歐洲はアウグストの尊號を以て政治變動に一段落を告げた。

## 對君雄辯と對民雄辯

周より秦漢に至る間、種々の人物を輩出したことは、希臘より羅馬に至る間に於けると相對する。周が春秋戰國を經て秦に一統され、封建が郡縣となるの際、雄辯家が頻りに出で、中にも蘇秦張儀が飛躍してゐる。七國が戰爭に忙殺され、何事も武力を以て決するの側、辯舌を以て勢ひを動かさうといふ奇妙なる現象を呈し來つた。劍と舌と孰れが强いかといふ所であつて、動もすれば舌が劍に勝たうとする。何處でも良將を求め、良將が優待せられるに拘らず、蘇秦が六國の印綬を帶びたやうな盛んなことが無い。張儀が妻に向つて我舌尙ほ有りやと問ひ、有りと答へられは宜しと言ひ、遂に秦に宰相となり、六國の盟約を解いたなど、事實は記錄ほどに無造作でなく、頗る込入つた曲折があるにしても、大體に於て雄辯の效力の著しく認められたのを否定することが出來ぬ。歐洲で雄辯デモステネスが之に匹敵して居る。舌はそれほど力あるものかどうか。

舌といへば簡單に聞えるが、腕力のみで事が辨ぜず、別の力を要するのである。軍隊のみで解決することが出來なくては、他の力を必要とする。七國の聯合及び分離に關して、外交が最も重きを占め外交上の伎倆として最も雄辯を要し、味方を增すも、敵を增すも、辯の如何に因る。其時代に雄辯家多く、單に蘇張のみでないけれど、時務に適切なのと、適切でないのとある。徒らに雄辯滔々、人を煙に捲き、而して煙の如く消え去るのがある。蘇張は共に鬼谷子に學んだと傳へられ、多少の素養あるに相違なく、刻苦黽勉は諺になつて居る。書を讀んで睡むたくなれば、錐を以て股を刺し、血が流れたとある。何を讀んだか、何を考へたか、兎もかく口先ばかりを恃んだのでなく、議論に根柢があつて、時務に適切と聞えた所があらう。其列國に說く所は、一定の順序に於てし、形式は蘇秦と張儀とに變りがない。鬼谷子の門に斯かる雄辯法若くは修辯法があつたか何うかは判らぬにしても、同一形式を以てする所、何處かで練習したとせねばならぬ。形勢を說くの詳かなる所より推せば、常に辯舌を錬磨したのでなく、頻りに材料を集めて調査したと考へられる。

歐洲で雄辯はデモステネスがフィリップを攻擊する所で大いに振つて居る。希臘は以前より雄辯を重んじたが、鄒か舌かとの爭ひで、此時が最も盛んである。デモステネスに對し、同じく雄辯を以て名あるエスキネスがある。少しく下つたが、或る程度まで蘇秦に對する張儀に較べ得られる。所で支那の雄辯家は列國の君主に說き、歐洲の雄辯家は一般公衆に說き、其處に違ひが現はれる。支那では雄辯を以て公衆を說かうとせず、只君主をして承知せしめようとし、其の納得しさうな、理解しさう

な、悦びさうな事を言はうとする。デモステネスは公衆に訴へ、之を激勵し、飽迄フイリツプの侵略に抵抗させようとし、エスキネスは之に反して能ふ限り公衆の心を鎖め、手和に傾かさうとする。蘇秦とデモステネスと、萬里を隔てつゝ略々同時代に雄辯を以て鳴り、而して訴ふべき對手を異にして居る。君主と公衆とに分れるのは、國情の違ふが爲めであつて、支那に民主思想があつても、必ず特別の執權者なかる可からずとし、歐洲で民主政治の名ある時に、寡頭政治の實あるにせよ、先づ多數民衆の同意を得るを以て得策とする。歐洲も外交政略の爲めに列國君主に說くことの行はれたが、其の普通となつた後でも、雄辯と云へば公衆に對するものと考へられ、君主に對する雄辯は特別に注意せられて居らぬ。外交家は辭令の巧みなるを要すれど之は雄辯を以て目すべきものでないとされて居る。外交は概ね祕密を尙び、如何なる調子で事が纏まつたかも知られず、雄辯よりも他の事情で決することが多い。戰國時代には、雄辯が君主に對しながら、蘇秦が何と辯じたが、張儀が何と辯じたか、一々記錄に上り、殆ど今の議會筆記錄の如く傳へられたらしく、國事に注意する者の皆等しく知る所となつた。其點で支那の對君雄辯と歐洲の對民雄辯と、多少一致する所がある。

蘇秦張儀は立派に政治家の資格を具へ、特に雄辯を以て顯れたのである。共に自身の功名の爲めにし、只榮達をさへせば宜いとして居るが、蘇は張よりも人物が淡泊で愉快、一の快男子であつて、夫れだけ締括りの足らぬ所があり、張は之に比して頗る腹黑く、煮ても焚いても喰へず、夫れだけ强く締括つて、相手をして身動きも出來ぬやうにする。張は默つて居つても、優に勢力を贏ち得たであらう。デモステネスは人格に於て此等の比でなく、只愛國心に驅られ、如何にしてもフイリツプの侵略を擊退しようとして居る。單に口先のみでなく、實行の衝に當つたが、何分にも希臘の民心を一にし全力を以て敵に當る譯に往かぬ。前から議論が多く、何事でも直ぐと議論が分れるが上、マケドニアから手が入り、マ探が跋扈するので、進んで戰ふのに甚だ困難である。モデステネスは其の困難を知りつゝ、何處までも努力し、歷山王の死んだ時に、再び獨立を圖り、捕へられて獄に投ぜられ、是りよ脫出し、勢ひの窮するに及んで毒を仰いだ。デモステネスは人物として最も稱揚すべき者の一に居る。支那で特殊の興味及び同情を以て屈原を見ることになつて居るが、デモステネスは屈原の心を以て蘇秦の辯を振うたものと云へる。其の演說筆記は、今日に遺つて人の讀む所であり、屈原の離騷と趣を異にして、人に悲愴の感を與へる所が相似てる。今日フイリツプ及び歷山王の跡形なく、而してデモステネスが生ける如くなるは、或は最後の勝利を得たのであらう。

支那で蘇秦が六國を聯合して秦に當り、遂に秦に滅ぼされ、蘇秦の雄辯が徒勞に終つた。けれども秦が一統するにも、張儀の雄辯を用ゐ、雄辯が軍隊よりも劣勢でないことを示す。デモステネスに對

抗するエスキネスは、失敗してローデスに退き、雄辯學校を設けて評判高く、一日嘗て振ひし雄辯を再演した時、人が怪しんで尋ねた、『斯かる雄辯を以て何故に負けたか』と。エスキネスは徐ろに答へて曰ふ、『君がデモステネスの雄辯を聽けば、何等怪しむべきを覺えまい』と。實にデモステネスの雄辯は天下能く敵する者ない勢ひであつたが、其の驚くべき雄辯が全く劒の先にて破られ、舌の劍より劣るを證明した。支那で雄辯が勝ち、歐洲で雄辯が負けたのは、雄辯の質を異にし、卽ち對君と對民との差違からも來て居るが、支那で雄辯が強いのでなく、軍隊が弱いのであつて、歐洲で雄辯が弱いのでなく、軍隊が強いのであると解せらる。

軍隊も時勢に依つて強くなつたり、弱くなつたりするけれど、支那は大體、上に弱いとして差支ない。項籍が負けて『戰ひの罪でなく、天吾を亡ぼす』と言うたのは、負け惜みでなく、眞實を語つたもので、實に軍事に劣つて居らず、政治的伎倆の足らなんだのである。軍隊は政治的伎倆で集つたり散つたりする。劉邦は韓信の如き良將あるにせよ、籍の如く戰爭に長ぜず、自ら兵を率ゐて進めば必ず負けるに極つて居つて、而も能く天下の權を得たのは、政治上に運動するに巧みなのに因る。該撒は兵を用ゐること神の如しと行ふほどでないが、劉邦に比して大いに優り、それ丈け優つて居らねば權を得ることが出來なんだ。人を使ふ丈けでは、天下分目の合戰に勝を得ることが出來ぬ。支那で權力を握つた者は、兵を用ゐぬではないが、軍人として稱揚するに足るのがない。大帝國に君臨した始皇及び高祖は、何の戰爭にも、戰略の妙を現はしたことがない。夫から見れば該撒の優つて居るは勿論、アウグストさへ優つて居る。兵力が弱くして政治的伎倆の最も重きを爲す處では、對君でも對民でも、雄辯が大いに力を現はし得られる。支那では大抵天下一統し、君主が一人と限られて居るが爲め、對君雄辯を振ふの餘地に乏しいが、幾國かに分るれば雄辯の必要を感ずる。

## 君的英雄と臣的英雄

### 秦漢の宰相と羅馬の君主

支那は戰略の力ある國でなく、政略の力ある國である。而して獨裁君主の名ありながら、必ず宰相が輔佐することになつて居り、政治的技倆に於て君主よりも宰相の方が世に知られる。殷湯に伊尹あり、周武に呂望あるは言はずもがな、始皇に李斯があり、高祖に蕭何、張良等がある。君主と宰相と必ず相竢ち、或は龍の雲に於けるが如しと言はれる。希臘及び羅馬は君主自ら最も力を伸ばし、宰相は其の命を聽いて勤務するの形がある。該撒なり、アウグストなり、各々有力なる輔佐ありながら、

輔佐は權力者の名に掩はれ、特別に擧ぐるの價値ないと思はれる。是れ一つは兵力に關聯するのであつて、常に軍隊を動かしては、大元帥たるべき者の命を待たねばならぬ。合議體などは迅速に事が運ばず、最高權で事を決するやうな習慣になつて居る。支那は政治的運動が主になり、一々大元帥の命を聽かねばならぬ程でなく、大事は君主が決し、小事は宰相以下百官が決するとし、事實上宰相が專斷して妨げない。且つ支那では君主が世襲に定まり、希臘羅馬では夫れほどに定まらず、世襲でも選擧の形にしたりする。世襲にては、幼少で位に卽き、或は低能で位に卽くので、有力なる宰相の輔佐を待たねばならぬ。名君は名君で良宰相を得て愈々力を伸ばさうとし、太平の世は勢ひ國務を宰相に委ぬるに傾く。それで事が濟むのである。隨つて『暴君汙吏』といひつゝ、暴君といふ程の者が少く宰相の責任が重くなつて居る。選擧の形にては、如何に無能とて甚だしく無能でなく、只宰相に任せて甘んぜず、有德なるは力を善政に致し、不德なるは力を惡政に致し、善かれ、惡しかれ、何事をか成す。歐洲で宰相が力を表はすのは、列國分立して後のこと、卽ち世襲の君主を輔佐し、政治的手腕を振ふ所に於てする。

秦始皇や、漢高祖や、英主と稱せられても、宰相の力が大に現はれ、宰相に英雄があるやうになつて居る。宰相は君主の任命する所、一旦其の怒りに觸るれば、職を免ぜられるのみか、死刑に處せられ、一家斷絶するにしても、其の全盛なる時は君主に代つて事を行ひ、動もすれば君主を蔑ろにし、甚だしきは其位を奪ふに至る。從つて君主に英雄を求めるよりも、宰相若くは將軍に英雄を求め得られる。始皇の政治上に施設した所は、殆ど悉く李斯の手になつて居るかと思はれる。實に其の始皇に於ける大江廣元の賴朝義時に於けるよりも力あつたらしい。

若し秦の政治が其計畫になつたとすれば誠に一大政治家と稱せねばならぬ。新たに帝國を建て、帝政を布き、細大の事悉く改めるは容易の事業ではなく、而して始皇が世を終るまで、李斯が一門の繁榮を極めたのは、驚くべき妙手腕又は怪手腕である。併し始皇が歿するや、直に失脚し、一門悉く亡びたのは、專制時代の常とは云へ、餘りに脆い。趙高に利害を說き附けられ、善い頃に圓められて仕舞つた。權力者の下に手腕を振ふに適し、自ら權力者として手腕を振ふに適せぬのである。事務官の優秀なのであつて、英雄として取扱ふことが出來ぬ。又英雄として取扱はれて來て居らぬ。

項籍の謀主なる范增に至つては、初めの間何れが上か分らぬ。增は智略に於て籍に優つて居り、只だ籍の勇氣及び武略なく、之に臣として從ふの餘儀なきに至つて居る。智略に於て李斯に劣つても、此れよりも英雄の資格がある。籍が己れを疑ふを察して斷然隱退した如きは、思ひ切が宜い。不平滿々で死んだのも面白い。一層早く思ひ切れば宜いにと言はれるが、何しても思ひ切る所で思ひ切つて

居る。李斯は斯かる思ひ切がなく、能く政治を扱つても、自分の利害得失となれば、とつおいつ甚だしく惑ひ、愈々惑うて愈々拙い、籍に增あるが如く、劉邦に張良がある。良も初めより邦の臣でなく之に從ふの世に活動するに便利なるを認めて臣となつたのである。併し邦が皇帝となるまで、悉く指導して居る。邦の度量の大なる所もあるが、邦をして天下を取らしめた良の才幹も偉大である。帝王の師とは彼の如きを指す。併し邦に力を添へるは良ばかりでなく、蕭何あり、韓信あり、陳平あり、其他幾人もあつて、中にも蕭何は女房役となり、邦に取つて最も功がある。其外に現はれずして內に畫策し、能く邦をして過なからしめたのは、或は邦よりも度量が大であつたかも知れぬ。其眼から見れば、若干豪傑の血眼になつて奔走して居るのが氣の毒なやうに見えたであらう。宰相として理想的とすべきである。併し英雄とすべきであるかどうか。廣い意義に於て然りと云へるが、英雄に鋭氣潑剌なる所を要すとせば、然らずと言はねばならぬ。謂はゞ循吏の最も大なるものに屬する。

支那には宰相として現はれるのが多い代り、君主として現はれるのが少く、而して宰相として雇人の形あるだけ、英雄の面目を發揮するに難く、君主として世襲の故を以て徒らに虛位を擁するやうに爲り、一世の雄として特筆大書すべきものが僅かしか無い。羅馬の政治は支那の政治に似て居るが、君主が比較的多く權力を振ふだけ、明君として大いに稱するに足るのがある。漢では文帝景帝共に明君であつて、武帝が英略を以て顯はれ、後に宣帝が明君であり、光武帝が中興の業を擧げてより、明帝昭帝が明君である。明君と目せられないのは、何等稱すべきものがない。羅馬ではアウグスト以後チベリウスを初め、暴主暴君が續き、ウェスパシアヌスに至つて成績が擧り、後一のドミチアヌスを除いて、百年間明君が續いて居る。暴主暗君と呼ばれるのがあり、英主明君と稱せられるのがあり、同じ君主で餘りの違ひであるが、暗君ばかり續く譯に往かず、明君ばかり續く譯に往かず、多少相錯綜するので單調を破る。

漢の明君は實に君主の資格を具へて居るけれど、能く治平を維持すると云ふに止まり、英雄と稱するに距離がある。時勢もあるが、卓犖不羈、縱橫に手腕を伸ばすと云ふやうなことがない。羅馬のチッスなり、ネルヴァなり、トラヤヌスなり、ハドリアヌスなり、アントニヌス・ピウスなり、マルカス・アウレリウスなり、皆明君であつて、中に英雄の氣魄に富んで居るのがある。漢と同じく國外の蠻族に侵され、之を防ぐに努めねばならず、漢よりも蠻族の力强く、之を擊攘するに困難であつて、其の困難なるだけ、武勇及び智略を發揮するの機會がある。漢でも匈奴の力が一層强ければ、君主若は宰相が更に多く力を伸ばしたらうと言ひ得るやうで、聊か考ふべき事情がある。『盤根錯節、以つて利器を判つべし』困難があつて才幹が顯はれる筈ながら、支那の兵力を以てしては、蠻族の强いの

を禦ぐことが出來ず、五胡の亂をして一二世紀早からしめたかも知れぬ。武帝のやうに英邁で遠征を好んでも、自ら戰鬪に長ずるのでなく、自ら出發しては、高祖が北方で敗北したと同じく敗北せぬと限らぬ。

之に較べれば、羅馬は兵力の衰へたにせよ、君主自ら兵を率ゐて邊境に戰ひ、蠻族を懲したことが屢々である。邊境に戰ひつゝ國內民衆の幸福を增進するに努め殆ど聖人と稱するに足るのであらう。

## 聖人的英雄

マルカス・アウレリウスは立派な聖人といへる。ストア派の嚴肅で慈悲深く、賢明で學問あり寧ろ退いて靜かに沈思するを好みながら、皇帝として內憂外患に當り、二十年間劇務に奔勞した。本來健かならぬ身體で絕えず戰場に出で、能く紛亂を鎭壓しつゝ、餘暇に書卷に親しむ所、聖人と英雄とを兼ねて居る。堯舜の如く神秘的でなく、事蹟が詳かであつて、缺點もないではないが、實際の人間の上に見る所として、理想に近いと謂はねばならぬ。基督敎を迫害したけれど、基督敎徒に於て其の最も基督敎的なるを許さずに置けぬ。何にしても斯く明君が續いては、時として暗君が出づるや、其の陋劣が甚だしく目に立つ。是れも悉く記錄を信じ難く、種々の事情で誤り傳へられたのもあらうが、陰謀を企て詐術を逞くし、人を陷れ人を殺すを厭はなんだのは確かである。時代の風潮として少しく恕するにしても、所謂暴主暗君とは斯の如きかと思はしむるのである。中に全く話にならぬのもある。ストエニウスの十二該撤傳は、面白い書物として廣く讀まれて居るが、之を譯せば風俗壞亂で禁止されるかも知れぬ。

漢代は英主明君が羅馬程多くなく、暴主暗君も羅馬ほど多くなく、總じて羅馬の程度を低めて居る。而して君主が羅馬に劣つて居る代り、宰相の顯はれたのがある。中で聖人と英雄とを兼ねた形あるのは、漢末三國の諸葛孔明に於て見る。マルカス・アウレリウスの如き大なる領土に君臨せず、活動の範圍が狹いけれど、頗る之に似た所がある。三代聖人の傳說があつても、事實が詳かでなく、只形容詞を多くして聖人と崇めるに止まり、果して聖人とするに足るやの疑はしいのがある。孔子は言行が稍々詳かで眼前物語を聞くが如きを覺ゆるが、事蹟の精しい所よりせば、孔明を推さねばならぬ。固より精しいとて比較的のこと、且つ演義三國志は今の所謂歷史小說であるが、小說の材料となつた所でも、他の類のない性格を認められる。

何程事實に誤りあるにせよ、出師表が遺つて居り、それで推せば、普通に傳はつて居る事實も多少據り處ありとせねばならぬ。孔子の言語は談片的に傳はり、出師表は順序立つて首尾一貫して居る。

論語を經典とせば、出師表は別に一種經典の質を備へる。表に現はれた所でも、其の出處進退は普通に人の理想的とする所である。孔明は利祿に念なく、蒼生を濟するの意に於て奮つて起ち、功が成れば人に讓り、功が成らねば倒れて已まうとして居る。斯かる事は、夙に人が聖人的英雄として描き出した所に屬し、世界史に一とし泛んで居る。

事なければ田を耕したり、魚を釣つたりし、事あらば劍を佩びて世を救ふといふのが、誰れ言ふとなく理想的英雄の生活の如く考へられ來り、伊尹や、呂望や、此種の人として知られ、羅馬のキンキンチッスも然うとされて居る。併し何程迄事實なるやが分らず。歴史を穿鑿するほど事が疑はしくなる。久しく景慕された人物が、ニーブール等の調べで箔が剝げたりした。只斯かる人がないとはせぬ。近い所で華盛頓とガリバルヂーとが、此型に入り、日本で前に楠木正成、後に西郷隆盛、亦さうと云へる。記錄の傳へる限り、孔明は凡ゆる美點を備へて居つたと見做し得られる。三國志は作り事が多いけれど、千數百年も信ぜられて居り、若し事實でなければ、假裝的人物として最も完全に近いものとせねばならぬ。能くも彼の如き立派な人物を描き出したのである。最初は伊尹の傳說に似て居り、傳說に滋味を以て湯に說いたと云ふのと、湯が五たび人をして聘迎せしめたと云ふのと二つあるが如く、孔明に就て二說あり、出師表で隴畝に耕し三顧されて玄德に仕へたと云ふのを確かとするが、劈頭に三分の計を立て、吳と聯合して魏を敗り、次で軍事に政治と智略を運らし往くとして可ならざる無きを示して居る。併し智略だけでは他に類なしとせぬ。困難に陷つて愈々職分を重んじ、至誠盡忠の人として現れた所に、其の眞骨頭を見る。世に智略ある者は誠意なく、誠意あるは智略なく、其の最も併せ難き智略と誠意とを併せ、遂に一身を至誠の結晶とするに至つて、殆ど人間を超越する彼の如き智略を以てせば、能ふだけ榮華を求めるのが普通なるに、絕えて其の形跡なく、豫め桑八百株、田十五頃を以て家族の生計に供へ、少しも他に求めようとせず、全力を國家に效し、自ら斃れて已み子なる膽、膽の子なる尙、亦戰死した。誠に天晴れと謂ふべきである。出師表は政治の經典とするに足り、其の出處進退の記錄に遺つて居るのは、後世にどれだけ影響を與へたか知れぬ。キンキンナッスのことは虛傳にしても、後に好影響を與へて居る。孔明は之に比して實傳が多く、少くも否定の證據の擧らぬ間、聖人的英雄とせねばならぬ。羅馬の明君中で、マルカス・アウレリウスは聖人的英雄といへるが、孔明は宰相で活動の範圍こそ狹けれ優に此と對立するに足る。

## 群雄續出

所が三國では獨り孔明が傑出するのみでなく、他にも稱揚すべき人物が多い。孔明が野に在る時に

伏龍若くは臥龍といはれ、之に對して龐士元が鳳雛といはれた。士元は大に伸びる事が出來なんだが伸びる資格を備へて居つた。孔明を玄德に紹介した司馬徽及び徐庶も、尋常の人物でない。後世業績に於て之に讓らぬ人物があり、歷代其人を見ると言へるが、何分にもそれほど興味を覺えぬ。

三國の人物は德不德となく、何處か氣分が面白く感ぜられる。講談流に作られたが爲めかと云ふに幾分か其の迹があつても、悉く然うであるとはせぬ。當時幾多人物の輩出した理由がないでは無い。支那數千年の歷史中、二つの著大なる事變がある。一つは周が天下を一統し、後に分裂して七國となつたこと、一つは漢が天下を一統し、後に分裂して三國となつたことである。周の天下は北部に偏つて居り、秦を經て漢に及び、初めて後の所謂支那を形づくり、同じく一統しながら、小と大との差がある。七國の爭ひは、比較的狹い範圍に於てし、三國の爭ひは、全土の大競爭である。周の文明を承けて七國が分立し、其の競爭が頗る見るべき價値があり、後漢の文明を承けて三國が分立し、智見の上に一層向上した跡を認める。其後幾回も變亂があり、何等かの進步があるけれど退步した所もあり畢竟するに漢末の變亂を繰返すのみとして差支ない。特別に新らしい現象を認めると謂へぬ。支那で人物の活動すること、七國及び三國に於て略々盡して居る。後に出でた者は、前の人の請賣りたる形を免れぬ。周代の四書五經が經典として永く傳へられた如く、改治家及び軍人として七國及び三國の人物が模範視せられて居り、後の人物と較べて原版と複寫の差がある。複寫は綺麗に出來ても、物足りなく感ぜられる。七國の人物も、十分に能力を發揮したものの、舞臺は三國ほど大きくなく、支那に於て十分に能力を發揮するとなつては、主なる標本を三國に求め得られる。後世に同一模型の物が出づれど、三國は何處か若々しく青年らしく愉快に感ずる。劉備にしても、關羽にしても、張飛にしても、事情が入組んで居りながら、後の人物よりも薩張した所がある。朝起きて氣分が淸々して居るやうに思はれる。後世の人物は晝になり夕になり、分別があつて睡氣を催すやうになる。曹操は『治世の能臣、亂世の姦雄』と云はれ當時第一の姦雄であるが、割合に餘り腹黑くない。必勝の算が立てば大得意で『周公吐哺、天下歸心』など歌ひ、計畫が失敗して危くなるや這々の體で逃げ出し、それで辛うじて安全になれば、前のことを忘れた如く、又々天下我物顏で大平樂を並べ立てる。可笑しいといへば可笑しい。高祖ほどに度量が大きくなくても、可なり大きく才幹及び藝能に於て之に優つて居る。或は治世の能臣として顯はれる方が宜かつたかも知れぬ。

吳の孫策孫權等、皆日本で源氏流の人物に屬する。智慮があつて、勇氣があつて、計畫が堅實である。卑怯なことをせぬ。劉備が曹操に迫られて遁げた時、孔明が吳に使ひして攻守同盟を結んだ。吳は人に富み、魯肅の如き、私財を以て軍費を辨じて居る。蜀の關羽が後に神に祭られ、關帝廟が多く

出來たのは、一種の迷信からであつても、支那で軍神を擧げれば先づ此邊である。軍人として模範的と稱し得られる。白起なり、韓信なり、用兵の術に於て之れ以上であらうが、軍人としての性格に缺けた所がある。關羽は何如にも軍人らしく、畫にかいた容貌もよい。馬から落ちて捕虜にされたのは支那流となつたが、是れは思はず不覺を取つたのであらう。生命惜しさに捕虜となつたと思はれぬ。所で吳に周瑜が居る。用兵の術に於ても當時最も傑出し、眞に天品たる觀がある。若し夭死せなんだならば、何處まで到達したか測り知られぬ。關羽は戰鬪に於て第一に居り、周瑜は戰略に於て第一に居る。關羽は戰線に立つて能く刃向ふものなけれど、作戰計畫に長ぜず、其の爲めに取返しの附かぬ失敗に終つた。瑜ならば其の失敗を免れ得たであらう。

蜀では孔明が政治と軍事とを兼ね、寧ろ國家全體を擔任し、作戰計畫に巧みでも、手廻り兼ねることが多い。軍事を專らにせば、一層立派な勝利を得たらうが、一人で餘り多くの業務を負擔するので遂に負擔倒れになつて仕舞つた。玄德は死に臨んで孔明に『君の才は曹丕に十倍する』といひ、實に其の才は驚くべきものであるが、最後の勝利を得るは必ずしも才に比例せぬ。孔明が兵を率ゐて出づれば、敵は容易に迫らうとせず、司馬仲達は何と云はれても進んで戰はず、弱蟲として婦人の服を贈られても忍んで居り、遂に死せる孔明は、生ける仲達を走らすに至つた。けれども其處は支那であつて既に曹操が孔明ほどの才なくして最大領域を占め、子なる丕が皇帝となつた如く、仲達は人に笑はれながら、次第に位置を高め、其孫なる炎が皇帝となり天下を一統し、司馬氏が最後の勝利を得た。

## 時代の成功者

時勢にも依ることであつて仲達が今少しく早く出て居れば功を伸ばすに苦しみ、或は無能として侮られたらうが、既に豪傑が大抵爭ふだけ爭ひ、世間が漸く疲れて太平を希望する頃に出たので、誠に誂へ向の人物となつた。もつと晩く出れば尙ほ更良かつた。彼は只如何にして勢ひを制すべきかを考へ、其の最も宜しきに從ふのみで、何と言はれても氣にかけず、守つて喰止めて居りさへせば、其中に死するものは死し、敵側に事變が起らうし、何も慌てることがないとする。曹操よりも誰よりも落付いて居る。鳴かぬなら鳴く迄待たう子規と極め込んで居る。果して事が着々思ふ壺に嵌まり、氣運と言はうか、僥倖と言はうか、勝利は待つ者の手に歸した。何處でも此の類の事があれど、支那では殊に著しい。三國各々獨立し、相爭つた結果、左程の人物と思はれなんだ司馬仲達に運が向き、曹操や、劉備や、孫權や、若し地下で知るならば、噬齒痒く思うたであらう。

併し權を得ると否とが、人物の高下を決せぬ、後に仲達を見ること孔明の如くでない、關羽周瑜ほ

どでもない。權力を得るに巧みであつて後世の人と精神上に浚交渉である。支那が司馬氏の下に晉として一統しつゝ、人物が三國六十餘年の間に輩出し、後に人物は只繰返しと見えるのは、歐洲で百年間に羅馬の明君が續いて出で、後に明君と云うても之に及ばぬかに感ぜられると同じい。晉で一統したと云うても、何分納まりが付かず、常に何處かが亂れ、五胡十六國が出來、南北朝に分れた。羅馬が東西兩朝に分れたのは之と事情を異にするが、絶えず蠻族に侵されたのは、之に似て居る。雙方共に一君主の下に大帝國を統轄するのが難かしく、自づと二つに分れたのである。支那は縱に長くて、南北に分れ、歐洲は横に長くて、東西に分れた。孰れも相應の人物が出で、若し一層勢ひが宜かつたならば、更に力を伸ばし得たらうと思はれるが、詰り三國の人物が繰返すか、羅馬全盛の小模型に現はすかに止まる。或は如何なる人物も十分に力を伸ばし得ない時代とも云へよう。

同じ滿潮にも、普通の滿潮があり、大潮といふのがある如く、順境逆境にも大小がある。秦皇なり漢武なり、該撤なり、アウグストなり。大潮に乘出したもので、誰でも之を望むことは出來ぬ。潮干狩に驚くほど魚介を獲たやうなものである。南北朝の間又は東西朝の間、隨分働き手が出て居りながら、默り場に組打してゐる形がある。斷えず陰謀をたくみ、陰謀に於て到らぬ所なく、實に陰謀が尋常になつて居つて、其の割合に成功が少い。人間が事業を成就するよりも、智力を練磨する時代と云うて宜からう。中に豪傑肌の人物があり、隨分性格の愉快を覺えるのが、矢張り詐欺取財のやうな迹を免れぬ。後趙の石勒が『大丈夫事を行ふこと、當に磊々落々、日月の皎然たるが如くすべきであつて、曹孟德や司馬仲達やが寡婦孤兒を欺いて天下を取つたに倣ふべきでない』と云ひ、其の語が一の格言となつて傳はつたのは時代の弱點を喝破したのである。其後は何等珍らしいものでなく、石勒の事業も知れたものであるが、餘りに詐欺的權謀が行はれるので、偶々斯かることを言ひ、幾らか之に近い行をしてゐたが、闇夜に一の提燈を持出したやうに見えた。微かな光でも、人が是れはと目をつけたのである。他の時代にも陰謀が盛んなれど、それ程甚だしくなく、甚だしくなければ、斯かることを言うたとて別段人の注意を惹かぬ。石勒の語は恰も『正直な最良手段』と言ひ出したに似て居る。彼は陰謀の競爭を見、それだけで何程の事を成すに足らぬと見拔いた所であらう。孟軻が戰國に仁義を說いたのと違ひ、理窟で考へ附かず、實際に悟つたのであらう。相互に陰謀の奧の手を出して爭つたとて好い結果がない、何もさう云ふことをするに及ばぬ、正々堂々天下晴れて潤步せば善いと認めたのであつて、世間では成程と思ひ、頻りに語り傳へた。平凡の語でも、南北朝に於ける一の名句である。

東西羅馬の對立する頃も、之に劣らぬ陰謀時代で、人を陷れて位置を奪ふことが當前になつて居る。

コンスタンチヌスは新たに基督教を普及したので、基督教徒の間に評判が好く、或は羅馬第一の明君の如く言はれ、大帝と稱せられるが、陰謀にかけては實に逞しく、陰謀の競爭に於て、何人にも勝つ、辛辣で、殘酷で、子をも妹をも叛逆罪で殺した。若い時に苛められて僻んだが爲めとの說あるが、後の人が全く考へ及ばぬやうな陰險なことを敢てした。案外暴君の名ある者が、夫れ程でないこともある。案外といふだけで、暴君たるに相違ない。暴君でも、暴君でなくても、一般に人を騙したり、殺したりするを何とも思はぬ。基督教が行はれたとて、利害關係のない時に、尤もらしい事を言ひもし思ひもし、必要の前に何事をも辭せぬ。暗世では、支那でも、歐洲でも、有力者が己れの位置の定まらぬ間、畏まつて居り、位置が固まると共に、君主に迫つて位を讓らしめ、又は之を殺して位を奪ふが普通の順序となつて居る。姥捨山のやうに、弱い君主を好い加減に捨てて仕舞ふ。其間に力量の秀でて群雄を駕御するに堪ふると見えるのがあるが、詰まり闇討上手、靑天白日に出られる身分でない。

## 隨唐と神聖羅馬帝國

長い間、攻めたり攻められたりして居つた擧句に、支那では南北朝が隋で一統し、文帝及び煬帝が一統の勢ひに乘じて大いに力を伸ばさうとし、歐洲では一度羅馬が亂れてから、又以前の如く一統せぬが、シャールマン（カロロ大帝）の下に比較的大なる帝國を作ることになつた。隋は僅かに三代で亡び、唐となり、太宗が支那歷史を通じて第一の英主と謂はれる。シャールマンも之に較べて遠く及ばぬやうに思はれる。併し唐に限りはせぬが、太宗は頗る勢ひに惠まれたものであつて、秦の後に漢が出たと同じく隋の後に唐が出で、太宗は隋が一統して吳れたのを感謝せねばならぬ。隋の文帝は儉約に過ぎ、煬帝は奢侈に過ぎ、二人共に凡物でなく之を併せれば優に　始皇に當るに足る。一統してから年を經ること少く、未だ地盤が固まらぬのに、急いで經營しつゝ餘りに奢り散らしたが爲め、平和を維持し難くなつたが、今少しく地盤が固まつて居れば、煬帝が唐太宗の位置を占める所である。高麗に遠征して國力を消耗したりしたのも、天下の經營を急いだからであつて、個人の能力に於て何等太宗に劣りはせぬ。隋で一統し、再び亂れて唐となり、大雨が降つて地盤が鞏固になり、そこで太宗が思ふ存分に力を伸ばすを得た。

煬帝は奢り散らす癖があつても、事業好きであり、思ひ切つて大事を業起し、其の事業で後に永く益を遺したのがある。通濟渠や、永濟渠や、江南河や幾つも長い運河を開いた。隋に運河を開いたのと、秦に長城を築いたのと、孰れが益を後世に遺したであらうか。シャールマンは戰役に從事するの

傍ら、文物技藝を奬勵し、尙ほライン河とダニューヴ（ドナウ）河との間に運河を作らうとした。其邊で　帝とシャールマンと相對して居る。固より悉く相一致すべきでなく、シャールマンが羅馬全盛後の第一英主として、後に匹敵する者がない所は、唐太宗と比較するも宜からうけれど、一層順序を正せば、シャールマンが隋の時代に當り、オット一世が唐太宗に當るべきでないか。オットは領土が狹く、太宗の領土の廣大なると違ふが、支那は一統するのが順當であつて、歐洲は一度分裂すれば容易に統一せず、オット位が精々となる。シャールマン帝國が興り、オットが其の後繼者たる形である。隋が一統して唐太宗が之を承けた所より推し、オットを太宗に配當することが出來る。隋は文帝及び煬帝を合一せば勿論、合一して二分したとて相應の君主を得たであらう。大抵新たに君主として大領土を得れば、之を失ふまいとして儉約に過ぎるか、意の儘になるので奢侈に過ぎるか、どちらかに偏する。唐太宗が創業と守成と孰れが難きかを尋ねたのも其處であつて、之を程よくするのが難かしい。文帝も煬帝も、英主の俤ありながら、勢ひの不可なる所があり、英主の名を唐太宗に奪はれ、煬帝の如き動もすれば亡國の暗君として取扱はれる。毀譽褒貶は成敗の跡に於てせられるので、幸不幸がある。骨を折つて成績の好いのがある。太宗は骨を折らぬではなけれど、骨折に比例して遙かに好い成績を得て居る。英雄の氣分から言へば、煬帝の方が優つて居らう。用意の足らぬ所があり、道樂息子が身代を讓受けた形あるが、彼れ一代の爲めに社會の進歩を促したこと少くない。日本へ使節を派遣した所でも眼界の廣いのを察し得られる。各地より草木鳥獸を集めたのは、珍し物好きからであつても、此の爲めに動植物の知識を增して居る。月夜に宮女數千騎を從へて馬上に淸夜遊の曲を奏するなど、風流も尋常でない。馬鹿遊びも意表に出て居る。締るべき時に締つたならば花もあり實もあるとでも云ふ所であらうが、締ることが出來ず、徒花ばかりで敢なく落ちて仕舞つた。利發な生れでも、放蕩を仕過ぎて眞に愚になることがある。

唐太宗は此等の後に出で、能く利害得失を辨へて居り、決して下手なことをせぬ。人物として餘り有德の方でなく、隨分情慾が勝ち、勝手なことを仕兼ねぬが、權力を得るの念が强く、之を得且つ之を維持するに必要とあれば何でも忍耐する。情慾が勝つても勘定高く、煬帝のやうに飛離れた事をする氣にならぬ。而して太宗の代に著しいのは、偉人物が並び出たことである。何の朝でも、朝の代る毎に有力の人物が出づるが、唐は太宗が支那切つての英主と見做さるゝが如く、之に仕へる相將も傑出して居ると思はれる。秦始皇の時、良い相將がありながら、皆秦始皇に蔽はれて居り、漢高祖に至つて、相將皆各々力を振ひ、高祖は木偶の坊のやうに見られたりするが、唐太宗は木偶の坊でなく、殆ど何事にも堪能であつて、而も相將亦之に讓らず、君君たり、臣臣たり、實に人材の輝いて居る觀

がある。漢が亡びて、三國に人材多く、後六朝に爭奪が續き、隋を經て唐に及び、漢に優つた帝國を形づくるを得、頻りに人材が出るやうになつた。其の後唐ほど盛んなことなく、此れと同等以上の人物があつても、其れ程に見られぬ。

太宗が支那第一の英主と稱せられるのは、英雄時代の終らうとして居るのを示すとも言へる。實に領土の廣大なることは前代に優つて居るが、軍隊を以て妥協したのである。太宗自ら高麗を征伐して失敗し、魏徵が居れば征伐を思ひ止まらしたらうと云うたのは軍事に長ぜぬに因る。歷代陰謀が行はれても、戰國頃より兵力を用ゐること多く、秦漢を通じて兵力を恃み、三國に軍人の秀でたのが輩出して居るが、唐に軍人の秀でたのが稀れで、其代りに政治の才に長じたものが群がつて出て居る。軍人も政治家膚である。『力拔山兮氣蓋世』と云ふ類が出でず、出でても顯はれることが出來なんだであらう。騅騮馬と虞美人とをこんぐらかせて別れを惜むやうなことが無くなつた。之を眞に英雄らしいとすれば英雄はないことになる。寧ろ慾と色といふことになり、色も待合式の色になつて居る。けれども大なる帝國に權力を振ふのを英雄とせば、可なりに有る。

支那では兵力があつても無くても、能く人心を收攬すれば、權力を得ることになる。兵を用ゐたとて、眞に戰ふことが少く、多くの兵を列ね、多くの旗を飜し、威壓して屈伏させるのが主である。軍人よりも、策士が力を伸ばし易く、三略にも『主將之法、在ニ務攬ニ英雄之心一』と書いてある。唐太宗自ら陰謀の名人で、兄が太子となつて居るのを、兄と弟とを殺して自ら太子となり、次で父に位を讓らしめた。併し人心を收むるに妙を得、且つ能く人材を集めるとの評判で、功名心ある者は、我も我もと集まつた。太宗の政策が唐朝及び其以後の治世方針となり、太宗の時代に人物に富んだのが常に談まれて居る。人物は概ね政治の才であつて、一轉して文學の才となる。以前より文が武に勝たうとしたが、明かに勝たず、右文左武か、左文右武か、明白を缺いた。唐に至つて、表面は兎も角、文が一切を形づくり、文學が盛んで、政治と文學と互に相交つて居る。太宗からして一廉の文學者であり、宰相以下、文學の達人がある。項王が軍事一方で敗れ、漢高が單に人材を集めて、權力を得た勢は、次第に程度を高め、軍事の代りに文事を以て處置するやうになつて來た。軍事を離して專ら政治より見れば、唐に立派な政治家が幾人も出て居る。房玄齡及び杜如晦は申分のない政治であり、魏徵も大臣として立派であり、他にも幾人もある。而して軍事に劣つた丈け文學が盛んで、學問に秀づるのがあり、文藝に秀づるのがある。是れは斯くして世を經ることが出來るが爲めで、軍事に長じ軍隊を以て迫る者が出づれば、之を何うすることも出來ぬ。國內にも國外にも威嚇と妥協で太平を致すことになつて居り、太宗も國內で天子と稱し、國外で天可汗と稱し、華夷の區別を撤廢するを辭せぬ。

## 陰謀の競爭

蠻族が兵力を以て進んで來ねば、內地で權力爭奪を專らにし、陰謀の有る限りを運らし、最も陰謀の盛んなる所では必ず婦人が勢力を得、姦婦が出で女豪傑が出る。陰謀では、婦人が男子に劣らず、却て之を凌ぐことがある。陰謀が政治に必要となつて、延いて婦人が勢力を占めることは、唐に於て漢を繰返して居る。漢には呂后の亂があり、唐には武后の亂があり、共に女政治家として傑出する。高祖の粗豪に較べて、太宗が多智多藝のやうに、呂后に對して、或る點て武后が智術ありさうに見える。太宗が第一の英主ならば、武后が第一の女政治家であらう。內行が治まらず、世間に非難されながら、豪傑の心を得ることが頗る巧みで、婁師德とか、狄仁傑とか、當時第一流の人物と稱せられるのも旨く丸められた。意に逆ふのは何時の間にか殺して仕舞ひ、活殺頗る自由である。支那では丸めたり丸められたりするのを政治家の特色として差支ない。太宗が儒學を奬勵し、孔穎達、顏師古など一流の鴻儒を用ゐつゝ、大義名分を正すことが少く、正したとて、帝自ら破つて居り、形式ばかりにならうとし、只文字を穿鑿するのが主になり、皆相率ゐて勢に從ふ。武后八十二歳で死ぬまで思ふ存分に天下を我物にしたので、當時の勢ひを察することが出來る。

後に創業時代程に人材が輩出せぬが、之に似て小なるものが絕えず出て居る。陰謀に於て妙を得、寧ろ婦人の性格を備へたのが幅を利かす。玄宗は有爲の君主が墮落したものとせられるが、大抵の者が然うなるやうな勢ひになつて居る。國務に當る者は、相結託して陰謀を行ふに餘念なく、制度を整へたり、法律を作つたりするのは、實際の機微に通ぜぬ學究のこととする。機微に通ずるのは、李林甫と云ふ所が最も適任と認められて居る、表面は頗る柔和で、蟲も殺さぬ顏して、而も人を陷れることが甚だしく、口に蜜あり腹に劍ありと言はれた。十九年も宰相の位に居つたのは、斯かる陰險の性能の爲めであつて、當時誂へ向の人物である。併し陰險で何時如何なる事をするかも知れぬと云ふので、人が忠實を裝ひ、畏まつて居るけれど、之で長く世を治めて往くことは出來ぬ。李林甫が死んで安祿山の亂が起つた。漢ならば王莽の亂と云ふ所である。此二人は全く出處を異にして、形跡の上で同列に言はれる。

王莽は外戚の親に居り、同族皆顯榮の位を占め、廢立でも何でも出來るやうに爲り、先づ假皇帝の祚を踐み、次で眞皇帝の位に即き、國を新と號し、根本的に國政を改革しようとした。天下の田を天田と稱し、賣買を禁じたなど、一種の國家社會主義を實行した。銅で北斗の形を造り、出入に之を側に置いた所も、頗る空想を逞うし、或る點に於て宗教的信念が强いと言へる。漢には五行を始め、幾

多の迷信があつて、學者も之を免れぬ。莽が永く勢力を得たならば、羅馬法皇に類するものになつたかも知れぬ。眞か僞か、其の愈々敵に圍まれた時『天の德を予に生ずる、漢兵其れ予を如何』と云うたとある。孔子の口眞似で滑稽の次第ながら、何等か信念なくて出來ることでない。妄りに改革して世間を騷がし、兵に長ぜずして兵を用ゐ、遂に敗滅したが、其れでも十五年間位に居つた。改革を決行せず、平穩無事を旨としたならば、もつと久しく維持し得たらう。彼は惡漢でも、空想的改革家である。法皇として大に活躍し得たらう。

## 蠻族の勢力

安祿山は之と違ひ、蠻族から出で、罪せらるべき所を助かつたのである。肥えて太つて、調子が好く、愛嬌澤山で、宮中に取入り、大に用ゐられた。楊貴妃の兒となつた所などは、如才がない。王莽の威力を利用するのと違ふ。併し莽は都育ちで兵に長ぜず、何人か兵力を以て迫り來れば、何うする譯に往かぬ。祿山は宮中で他愛もなく戲れ、無邪氣で面白い人とされて居るが、蠻族の出だけに、兵力を控へて居り、いざとならば軍隊を持出さうとする。馬三千匹を獻ずると申出し、是で事を起さうとしたが、流石の玄宗も疑ひ始め、之を差止めた。祿山は使に對し、傲然として『馬を獻ぜずとも宜い。追つて都に上る』と云ひ、兵十五萬を以て出發し、自ら太燕皇帝と稱した。遊びに耽つた朝廷は之を何うすることも出來ず、顏眞卿と顏杲卿とが防いでも、防ぎ止められず、玄宗は出奔し、楊貴妃を縊り殺すの餘儀なきに至つた。祿山は兵を起し、天下を騷がしたものの、病に罹つて精神が狂ひ、相續者を替へようとして實子の爲めに殺され、一年ばかり世間を騷がしたに止まる。王莽のやうに國家的理想なく、天子になつて驕りたいばかりで、取り止めのない、悧巧らしい愚物である。併し若し祿山が病に罹らず、兵力を以て權を占めたならば、唐はそれで終つたであらう。

祿山死して肅宗が大權を收め、後幾代か續き、中に明君になれさうなのもあるが、何分にも基礎が腐り、一時無理して維持するのみで、盜賊が力を得れば、之に官職を與へ、平穩にさせて置くといふ位のこと、宰相其人を得ても、見るべき功がなく、其人を得なければ、尙更である。遂に大に亂れ、忽ち梁となり、忽ち唐となり、忽ち晉となり、忽ち漢となり、忽ち周となり、遂に宋となつて、一先づ治まつた。所で其の代變りとなるのは、安祿山の如きことを爲すに過ぎぬ。祿山は殺されて再び唐の天下となつた爲めに賊と呼ばれるが、五代は祿山の流儀を繰返して居り、而して主なる兵力は蠻族にあつて、蠻族から皇帝が現れたりする。實は蠻族が力を得たのは古い事で、支那は歷代之に苦しめられて居り、唐太宗とて、初め起つた時に突厥の兵力を借り、一統後も蠻族を手懷けるに餘程力を用ゐ

た。蠻族の酋長は、兵力を控へて居つても、智慮が足らず、中央政府で宜い工合に取扱つて呉れゝばそれで承知する。支那を悉く取らうとは、滅多に考へることができない。但だ支那自ら亂れ、全く抵抗力ないとなつては、蠻族に於ても何とか手を出すことになり、遂に天下を乘取らうとするに至る。祿山が今少しく智慮を備へて居れば、祿山から五代が始まるべきであつて、是れシャールマンの帝國が分裂したのに相當する。歐洲では一度分裂して、又統一することが出來なんたが、支那では分裂する代りに頻りと代變りする。支那も歐洲も、兵力は蠻族に移つて仕舞ひ、以前に文明を以て鳴つた所は蠻族の酋長の蹂躙するが儘で、只體能く蹂躙を免れようと努めるに過ぎぬ。五代の時に北方の蠻族が力を備へて居り、宋が天下を一統したとて、之を何うすることも出來ぬ。之を征服しようとしたけれど、戰へば敗れ、危險を增すばかりであつて、莫大な賄賂を贈り、其の亂暴を思ひ止まらすの外ない。契丹なる遼が宋の北部を侵し、女眞なる金が宋を半分にし、尋で蒙古なる元が宋を丸呑みにして仕舞つた。シャールマンは唐太宗に當るとし、太宗よりも一層蠻族の力に依つて居る。其後神聖羅馬帝國若くは獨逸帝國の名に於て續いたのは、支那で遼と云ひ、金と云ひ、元と云ふの類であつて、支那では元の下に全く統一し、歐洲では神聖羅馬帝國が一張一弛して、小さくなり、多くの國が成立した。斯かる時代は蠻族に英雄が出で、文明國に英雄が出ぬ。

## 外和內爭

支那では宋朝が到底宋族と戰ひ難いとし、懷柔に全力を致し、眼前の平和を維持するに專らになり治安策の上で相應の政治家が出て居る。蠻族に對して賄賂と甘言で宥める一方にし、國內で飽迄天子の威嚴を保ち、蠻族の方から服從を願つて來て居るやうに吹聽する。其處は文字の扱ひが巧みで、負けても勝つたやうにするに困難がない。何時でも普天の下、率土の濱というて居る。蠻族から兵力を以て迫つて來ぬ間は、四百餘州の天下を治めるだけで、政治家の大手腕を振ふの價値がある。最後の案は、如何にして蠻族を防ぐかと云ふにあつても、其處まで考へて施設する者が稀れで、大抵位置を得、位置を高めるに汲々とし、黨を樹て、他黨を排斥し、權力爭ひに忙殺される。蠻族を防ぐに兵力を要し、兵力のことは多年の習慣もあり、急に强くする譯に往かず、殆ど全く諦めて居り、斷然兵を以て戰はうとするものがない。强がりと言ふけれど、眞に戰はうとせず、偶に戰へば大敗する。實際の事情に通ずるものは、强がりを言うて亂を惹起するよりも、勢ひのまに〳〵自身若くは自身の黨派の利益を圖るに傾き、黨派の對立に於て進步を呈したと言へる。

昔から、黨派を樹てて爭ひ來つたが、宋に及んで頗る秩序立ち、殆ど政黨と稱し得る程に至つて居

る。朋黨の是非に就いて議論が盛んで、歐陽修と藍先震と『朋黨論の題で爭ふ所、後の政黨論に類似する。君子を以て居る者が朋黨を是認し、小人視せられたる者が之を否認するも面白い。政治を論ずるとて、人身攻擊を主にする形あれど、人身攻擊にしても、中々議論が立ち堂々と議論を發表する。政治の議論に於て、宋が最も秀でて居る。兵力を問題外に置けば、宋は立派な政治家に富んで居るが之を問題にすれば、全く言ふに足らぬ。强ち將材がないのでは無く、兵を强くするには、兵制を改めて新たに訓練せねばならず、是れ急に望み得べきでない。其の割に韓范の並び稱せられて、敵軍に重きを成したのを多とする。支那流の讃辭でも幾分の跡形があつたらしい。特に韓琦が歿して神宗自ら碑文を作り『兩朝顧命、定策元勳』と篆したのは偶然でない。琦は實に一大政治家たるを疑はぬ。琦は歿した時、年六十八、最早限りに達したが、琦の調子でゆけば、餘計な內輪喧嘩なくて濟んだであらう。琦が歿してから、黨派間の權力爭ひが始末に了へなくなつた。一方で自ら君子黨として小人排斥すれば、他の一方で百方抵抗し、君子と云うて何が君子か、自分が小人でないかと反擊する。神宗の志望は頗る良く、實に國政を刷新し、國を富まし、兵を强くし、以て外敵に當らうとするのであつて、王安石をして大改革を決行せしめたのも、其爲めである。併し改革が實際の事情に適合せぬのみか、安石が褊狹で、要らざる所に衝突する。若し安石が今少し學問自慢でなく、實際の事情に注意したならば、何とを成績が擧つたらうし、成績がなくても、騷ぎが起らなんだであらう。異議を唱へる者があれば『君は書物を讀まぬだらう』と云ひ、書物信仰が迷信になつて居る。兎角支那で改革を企てるには、唐虞三代を標準にせねばならず、周の制度が斯々と云へば、人が承知する。承知するけれども、之を行ふは至難の業に屬し、色々と骨折つて、詰り無駄骨折りに終る。骨折つて失敗すれば之を全廢して他の政策に取掛り、國政が試驗管で試驗せられる有樣である。之に慣れては蠻族の威嚇も餘り心配にならず、徒らに權力爭ひに日を送つて往く。徽宗の如き、繪畫に專一にすれば、大天才として顯れたかも知れぬが、其れが皇帝となつたので、自身の不幸、國家の不幸となつた。藝術の鑑識があつて政治の鑑識がなく、殿樣の商賣で、眼識の利を外交に求め、少しく儲けて大に損し、靖康の變に皇族三千人及び宮中の財產悉く奪ひ去られた。

## 對外軋轢

高宗が南方に移つて、夫れで大丈夫かと云へば、移れば移つたで壓迫される。既に南方に追はれたほどで、其儘にして居れば遂に滅亡を免れぬとて、愈々兵力を以て當らうとするのが出で來り、中にも岳飛が傑出して居る。自分で兵を募つて敵と戰ふので、確かに特殊の伎倆を備へ、孔明と關羽とを

合せた人物と言はれるのも、強ち賞め過ぎでない。合せた儘では過ぎる、合せて折半した所が適度であらう。けれども夫れで果して、勝ち誇つて居る金を滅ぼし得るか何うか。或は却て禍を招きはせぬか。政府關係者は多年の經驗で之を覺束なく感じ、强硬手段は必ず失敗すると定めたりする。殊に黨を分ちて片意地を張り、岳飛が勝手な振舞をすると攻擊する。

首相は秦檜であつて、開戰を不得策として居る。憖じ岳飛が兵を以て戰つては、或は金が激して思切つて兵を送り來るかも知れぬ。金とて妄りに戰ふよりは、坐して宋の贈物を受くるに若くはないので、租稅の一部を與へて居れば、平和に過ぎて往かれると云ふのである。此意見の下に、岳飛を以て宋の運命を縮めるものとし、之を殺すことになつた。後世一般に飛を憐み、檜を憎み、飛の廟に謁する時、前に置いてある檜の像を打つたりするが、日本で西郷と大久保の爭ひに似て居るとて、井上梧陰の如き、檜の思慮あるを說いたりした。宋が新たに大敗して、到底戰ふことが出來ず、檜が苦心して、南宋が百五十年も續いたといふに歸する。大久保の系統に此類の說が行はれて居つた。併し是れ二大戰役前の說で、其以後に自然と立消えになつた。檜が南宋を百五十年も維持したとし、其れだけ政策の宜しきを得たとすべきか、又は荒療治して萬死に一生を求むるを擇ぶべきか。岳飛のやうにして滅亡を早めたかも知れぬか、秦檜の如くして精々百五十年、それも敵の都合と見える所がある。天子が金に臣と稱して僅かに命脈を繫ぐが宜いか。飛が思ひ切り戰つたならば、勢を盛返し、金に勝つやうなことが無かつたらうか。

支那で兵力を以て蠻族と戰ひ、勝利の希望あるのは、飛を最後とする。後に文天祥が戰ふけれど、是れ亡國の死物狂ひで、自分で言ふ通り、父母瀕死の病に投藥するに外ならぬ。若し國論一致して飛を援助したならば支那に珍らしい英雄を出すやうなこともあつたらう。其の唯一の人物が消滅しては武器なしに盜賊に出逢ふと同じく、言葉巧みに說き付けて、財布の半分で事が濟むことがあつても、賊が承知せずに刃物を振り上げたが最後、何とも抵抗することが出來ぬ、宋の外交は一時遁れで、背後に恃むべきものがない。契丹に攻められて服從し、女眞が强くなつたので、之と共に契丹を滅ぼし、女眞に攻められて服從し、蒙古が强くなつたので、之と共に女眞を滅ぼし、而して蒙古の爲めに滅ぼされた、外交だけで國家を維持しようとし、剩く小策を以て恨みを晴らさうとあつては、さうなるに極つて居る。恨みを耐へ忍び、契丹をして女眞に當らしめ、女眞をして蒙古に當らしめたならば、尙ほ何程か命脈を長くし得たらう。

## 思想上の勝利

軍事に全力を注がず、思想を練つたが爲め、思想の方で進み、政治家の多くは相應に知識に富んで居る。無益な知識にしても、中々知識がある。程兄弟の如き、朱熹の如き、思想に於て戰勝者なる蒙古を化した所があり、其狀態は蠻族が西羅馬を滅ぼし、羅馬の基督敎を奉じたのに類似する。獨逸帝國が神聖羅馬帝國と稱したのも、基督敎に從つたのを標榜したので、兵力で勝ち、思想で負けて居る。支那には法皇のやうなものがなく、時として出ようとしたが、出ずに終つた、漢代に王莽が長續きしたならば法皇のやうになつたかも知れぬが、一の推測に過ぎぬ。唐は老子を尊重して太上玄玄皇帝と追號したけれど、特別に道敎を以て支配しようともしなかつた。佛敎が盛んになつても、政治と混一するに至らぬ。けれども上流に儒敎が行はれ、上流及び下流に道敎が行はれ、其の思想は戰勝者が如何ともすることが出來ず、却て之に同化するやうになる。文天祥の如き謝枋得の如き、基督敎の謂ゆる殉敎者に當る。陸秀夫が舟中大學を講じたとて笑はれるけれど、最後までバイブルを離さぬのと違ひがない。意氣地なく負けたものの、節を守つて死んだのは、儒敎の爲めに力を添へて居る。基督敎ならば、隨分之を賞め、頭に光の附いた像を造るのである。斯かる殉敎的行爲の影響は、支那よりも日本に效能が多かつた。兵力に乏しい支那も、異なる方面に於て勝利を得るの力があつたと言はねばならぬ。

併し是れ普通に所謂英雄と違ひ、謂はゞ坊主の仕事である。髮が長く葬式に立會はぬが、浮世離れして居り、力を以て迫らるれば、只投げられるだけで、抵抗の仕やうがない。英雄としては、力を以て迫る者に對して力を以て應じ、物の見事に取つて投げねばならぬ。さなくとも、弱くないのを證明するを要する。さう云ふ力あるものは宋朝に居らず、羅馬法皇廳に居らず、英雄は蠻族の仕事となつて仕舞ひ、蠻族の間に英雄が居り、偉大なる英雄が居る。支那は分裂しても直ちに一統し、列國分立して互に相爭ふ期間が短く、歐洲では羅馬が分裂して以來、神聖羅馬帝國が出來ても、一統するよりは列國分立して互に相爭ふのが盛んで、力を以て攻めたり、攻められたりするのは、歐洲の方が遙かに多い、けれども支那には此類の英雄こそ少けれ、蒙古から絶大の英雄が出で、一人で幾十英雄を兼ねた形がある。

# 東西兩洋の聯絡

## 絶大の領土

契丹にも女眞にも、各々英雄が出で、蒙古に至つて、成吉思汗が太平洋より大西洋まで力を及ぼした。元太祖なる成吉思汗の功業は、人力よりも地勢に依る所が多く、空前絶後の大領土を得たとて、其割合に能力が優つて居るとは言へぬ。けれども空前絶後の事を成すに堪へる人物が居つたのを認めねばならぬ。彼が絶大の領土を占めたのは、主に地勢であつて、天然の境界のない茫漠たる平原では、何處までも押して往かれる。後世露國が別段兵を動かさずに略々之れに似た領土を得たのも、其の爲めである。成吉思汗は單に無人の土地を得たばかりでなく、敵と戰つて勝ち、之を併せて他を攻め、又之を併せて更に他を攻め、幾多種族を統一するを得た。既に支那に入り、必ず之を征服し得べきを確信し、死ぬ時に方略を遺言し、相續人は譯もなく征服して仕舞つた。其の向ふ所敵なきに就て、土地の乾燥も一の原因に算へられる。病人が雨天で氣が鬱し、晴天で快くなると同じく、亞細亞の乾燥し切つた沙漠附近で成長しては、時として氣が晴々しく、身體が極めて活潑になり、世界を征服せねば滿足せぬと云ふ調子になるとも云へる。乾燥は或る時代に限らず、何時でもあつて、英雄が其れほど出ぬ所を見れば、此に重きを置くことが出來ぬけれど、乾燥した氣分とするのも面白い。如何なる原因からにせよ、世界に類を見ぬ戰勝者が飛出した譯であつて、彼の爲めに種々の變革が起り、奈翁の用兵術にまで影響を及ぼして居る。彼は支那人でなく、蒙古の蠻族であるが、支那が主な舞臺となり、彼をして絶世の大英雄たらしめた。歐洲列國分立し、各々英雄が出で、眞の能力に於て之に優つて居るのがあるも測り難いが、活動の範圍に於て其の何分一にも足らぬ。支那方面から劍を提げて立つた英雄が尠い代り、萬々馬を以て大陸を横行し、悉く斬り從へた者が出たのは、其の不足を補ふに堪ふる

事は成吉思汗に始まらず、昔から蒙古沙漠に徘徊する種族は東に支那を壓迫し、西に歐洲を壓迫し、時として東西に跨る。酋長の傑出したのは、產れ落ちてからの慣ひもあるが、頗る用兵の術に長じ、秦始皇も、漢高祖も、之を禦ぐに苦しんだ。弱きを示して高祖を深入りせしめ、俄に騎兵の大軍を以て之を圍み、莫大の利益を得た冒頓は、戰爭に於て眞に妙を得て居る。北方の野蠻として注意を惹かぬが、世界の名將の中に算へねばなるまい。約五百年を經て、アチラ(匈音ニツエル)が歐洲に攻め込み、現代の佛蘭西伊太利邊まで蹂躙し、歐洲諸國が全力を以て禦いで、中々禦ぎ切れなんだ。日支戰

役後に現獨逸皇帝が黄禍を言ひ出したのは、此邊のことを聯想して警戒を與へようとしたのである。アチラは獰惡兇暴、只破壞を事としたかに傳へられる。併し實は左程でなく、戰爭で必要なことを爲すに止まつたらしい。羅馬に攻め込んだ時、法皇レオ一世が之を宥めて還したなど、宥めた手際よりも、宥められて穩かに還つた溫情を稱するが適當であらう。ペテロとパウロの靈が現はれて之を却けたとか、種々のことが傳はつて居る。隨分勝手な事を觸れ廻してある。アチラは餘り物の分らぬものでなく、抵抗する者は容赦なく斬殺しても、柔順なる者に對して相當に保護を與へたと思はれる、獰惡一方で、廣い歐大陸を自由に荒し廻れるものでない。之に從ふ軍隊が神の如く尊敬した所でも、統率の宜しきを得たのを察するに足る。美人イルヂゴと結婚し、其晩に腦溢血で歿し、棺を三重に造り第一を金、第二を銀、第三を鐵にし、埋葬に使つた捕虜を悉く殺し、其棺が何處にあるかを永遠に知れぬやうにしたと云ふことである。

約八百年を經て、成吉思汗が現はれ出で、東の冒頓と西のアチラを兼ね、東西を合一するの勢ひとなつた。成吉思汗のことも色々と傳へ、文明の破壞者と言はれ、其の打勝つた土地は文明が消滅したとなつて居る。けれども成思吉汗は夫れほど分らぬ者でなく、戰爭の必要で都市を破壞したこともあらうが、文明の利益を十分に認識してゐる。耶律楚材の才幹を見出し　天の我家に賜ふ所として國政を委ねたのでも、事が推し測られる。楚材は一大政治家であつて、當時の學藝に通ぜぬ所がない。而して施政の方針は『一利を興すは一害を除くに若かず』と云ふに在る。安りに文明を破壞するが如きは萬々ない。而して文明の敵でない證據には、元になつて頻りに文物技藝を奬勵して居る。

成吉思汗が四方を經略し、子なる窩濶台が業を繼ぎ、之を元の太祖太宗とし、孫なる忽必烈が世祖として絶大の帝國を形づくることになつた。渤海から黑海邊まで馬車の通ふ大道路を造り、幾つも支線を設け、警察を嚴重にし、誰でも安全に旅行するを得た。世界を一にし、各地の長所を悉く集めようとし、儒敎も宜し、道敎も宜し、佛敎も宜し、回々敎も宜し、基督敎も宜し、宜いことは何でも取入れる。人が之を疑ひ、最も好いのを御採用あつては如何にと忠告した時、世祖の答へに總て宜いといふのを取入れゝば、何れが宜からう』とあつた、星學は郭守敬を得て發達し、高麗より滇地、鐵勒より朱崖まで、數十箇所の測驗所を設けた。醫學も發達し、凡そ支那の學問工藝は、殆ど皆此時代に發達して居る。蒙古出の君主が何の點で文明を呪うたかを知ることが出來ぬ。或點で破壞しても、他で之を償ふだけ建設する所なくては、到る處に勝利の旗を飜す譯に往かぬ。科學の知識を重んずること、元は確かに前代に優つてゐる。

類のないほど順境になつたのは、自然の勢にせよ、表面に現れた所では、世祖を以て支那英主中の

英主とすべきである。唐太宗がどうあるにしても、シャールマンがどうあるにしても、之に較べて規模が甚だ小さい。質に於て劣らぬとせば、量に於て大に劣るとせねばならぬ。古今を通じて、忽必烈ほど廣大なる領土を得たものがない。若し現代の如く文明の利器を備へたならば、大なる領土を樣々に活用し、中央亞細亞も賑かになつたらうし、鐵道が四通八達して、勢力を維持するに困難でなかつたらう。けれども如何に良い道路を造り、萬里の往來に便利であつても、支那から露國まで統一するには、寧ろ人力に及ぶ所でない。一時の勢ひに乘じて之を統一したものの、分裂は避く可らざる勢ひであつて、遂に八十年ばかり經て元が滅びた。

## 日本の發展

海を隔てて居る日本に、最も痛切の感動を與へたのは忽必烈である。支那とは久しい交際であるが彼より日本に兵を加へたのは、是れが空前絶後になつて居る。歐洲でも忽必烈の名は廣く知られ、コラリッヂが寢ながら夢中で之を詩に作つて居る。露國の如きは其の羈絆に屬し、今でも半蒙古狀態たるを免れぬ。而してマルコポーロが忽必烈の朝廷に居り、之を本國に告げ知らしたのは、歐洲人をして東亞細亞に對する興味を深からしむるに最も與つて居り、日本も其れで知れ渡つた。ジパングには黃金を以て家根を葺いた宮殿があると云ふので、人は如何にかして之を見舞ひたいと思つた。コロンブスが西から廻つて東に出でようとしたのは、印度へ到着する心組であつても、得べくんば此黃金國に立寄りたいと思ひもした。新世界發見は實に近世史を開いたが、其起りを尋ぬれば、忽必烈が世界の人を集め、世界の知識を求めた所から來て居る。元が滅びて支那が獨立し、明に相應の人物が出たけれど、漢唐ほどに盛んにならず、宋よりも幾分か兵力が强いといふ位の所で、其れでも遂に滿洲に征服されて仕舞つた。

忽必烈の時代は盛んであつても、其後支那は進むよりも退き、幾分か歐洲の人物に接しつゝ、古い店を維持するに努める形がある。忽必烈に刺戟されて國力の伸張し始めたのは日本である。日本は夫れ迄大勢上に支那の附屬物たる觀あるが、之と戰つてから、眞に獨立の氣運が盛んになり、新たに亞細亞に日本あるを明かにするやうになつた。其の以前も日本で絶えず大陸と交通したけれど、其の以後國家として支那を見、場合に依つて之と雌雄を爭はうと云ふ勢ひを生じた。若し日本內地が固く統一して居つたならば、元軍が敗れると共に新局面が開かれたらう。さなくとも時宗の壽命が長ければ何とか別に考へた所もあらう。其の早く歿し、鎌倉の威令が遠く關西に及ばず、京都で北條征伐の計畫があり、北條が倒れて足利が起り、足利が威力が足らなくて、群雄割據の姿となり、內亂に幾代を

も送つたのは、順序に於て先づ內地を統一し、尋で國外に及ぶと云ふ所である。人は之を意識せぬけれど、勢は自然に動いて居る。

## 日本の分裂及び統一

後醍醐天皇の鎌倉征伐は、何の事情があつても、要するに國內統一の爲めである。元寇が攻め來つた時、鎌倉で時宗が斷然之を討ち拂はうとし、京都で龜山天皇の神への祈願あり、眞に擧國一致の實を擧げたが、明かに國內に二個の中心點がある。愈々統一する場合に、鎌倉を中心とするか、京都を中心とするか、迷ふことになる。鎌倉の威力の衰ふるに伴ひ、京都を中心にするに努める者が增加し曾て鎌倉に從つた者も、鎌倉征伐に出掛けることになり、北條氏は譯もなく倒れた。けれども未だ京都を中心とする勢ひが熟して居らぬ。京都で國內を統一しようとすれば、威力が遠く關東に及ばず、關東武士は公卿連に從ひ、馱々を揑ねて曰ふ、自分等は生命がけで戰つたのに、宮中で遊んで居る公卿の下に附くことは何事か、位など何うでも宜いとして、祿まで減らされたり取上げられたりしては此儘にして居れぬ、何とかせねばならぬと。恰度其時に尊氏が武士の味方となつて現はれ出で、武士は救ひの船の如く取附いた。武士には將軍でなければならぬとした。けれども京都の勃興するは勢ひで、容易に防ぎ止めることが出來ぬ。公卿に力があつても無くても、京都に集中力がある。急に力を關東に逆戻りさする譯には往かぬ。遂に二個中心の衝突となつた。南北朝の競爭が半世紀も續き、此間に特殊の人物が現れて居る。主として足利氏と新田氏との權力爭ひの形になつたが、眞に朝廷の爲めに忠を盡さうとするのは少くない。武を以て立つた方にも、楠木正成なり、名和長年なり、種々ある。中にも正成の出處進退は眞に人生の最高美を發揮したと言へる。正成は千劍破城を守り、關東の大軍を防ぎて以來、各所に戰つて勝ち、智略に於て無盡藏の形がある。楠流の兵法と云ふは、後の作り物であるが、事に臨んで奇々妙々の策を運らす人と見られて居る。所が若し正成が作戰計畫の巧みを盡し、南朝の下に國內を一統し得たならば、稀代の名將若くは良相として知られたであらうが、後世の人が認めるやうな正成とならぬ。正成の正成たるは湊川の討死で斷案が下された。諸葛孔明が人に勝れた智略を以て國事に當りながら、難局に處して倒れて已んだ所に、其の眞價を見出し得る如く正成も滾々盡くるなき智盡を以て、勝算なきを知りつゝ討死をした所で、永く人を感發さする所がある。幾干か時勢が相距て居る。三國中、蜀が漢の正統であつて、既に倒れた漢を回復するのは甚だ難い。難い所で鞠躬盡力するのは、利祿を念とする者の到底企て及ぶ所でない。後醍醐天皇は蜀が漢を受けたどころでなく、明々白々の正統であるけれど、譯の分らぬ公卿連が多く、家筋ばかりで威張り

散らし、武士に愛想を盡かされて居り、勢ひの振ふ可くもない。公卿が武士に頭を下げて、多くの武士が擁護する北朝と爭ひ難い。正成は事の困難なるを百も承知し、飽迄力を盡して倒れようと決心し其通りにした。舞臺が狹いけれど、聖人の心を備へたのは、保元平治の亂が產み出した平重盛に次で南北朝が產み出した正成である。重盛は順境に能く英雄たるを得たかは疑はしい。正成は順境で英雄となり、聖人的英雄となり得たであらう。北畠親房は之と性分が似て居つても、其の智略がない。正成が今一層廣い舞臺に活動したならば、目覺しい人物となつたに相違ない。

正成は職分を守つて勢ひに抵抗し、勢ひの爲めに討死したのであつて、其の勢ひが一定の形に纏まるまで、多くの歲月を要する。南北朝と分れるばかりでなく、四分五裂、分れ得るだけ分れ、新たなる中心を得て統一しようとするのである。南北朝に分れたのは、寧ろ其の幕明きに過ぎぬ。實は北條氏が治めて居つたのは、公家流と武士流とを縫合せた儘に過ぎて來たので、何時か之を混ぜ合さねばならぬ。器械的を化學的にせねばならぬ。全國の隅から隅まで震ひ動かさねば濟まぬ。二百幾十年間種々有力なる人物が出ても、何とも統一する事が出來ず、一時統一しても、直ちに亂れ、亂れるだけ亂れる外はない。山名宗全、細川勝元の如き、隨分力を備へて居つても、只力で押合ふだけで、何程の事をなすことも出來ぬ。遂に六雄八將、二相爭ふ事になり、織田氏を經て、豐臣氏で初めて一統した。

豐臣氏前に出た者は、必ずしも信長又は秀吉に劣るのでなく、武田信玄なり、上杉謙信なり、毛利元就なり、力量に於て秀でて居るが、時代が早かつたり、土地が偏したりして活動の範圍に限りがある。一層有力なる者が出たならば、早く平定し得なかつたらうかとの疑もあるけれど、斯かる人物は殆ど望み難い。普通に英雄とする所では、矢張り勢ひの熟するを待つの外なく、それ以前に出た者は災難と諦めねばならぬ。況して中央より隔つて居つては、働いた程の效能が顯はれぬ。秀吉は好い時分に現はれ出でたが、其國內を平定したのは、軈て力を外に伸ばす事になり、朝鮮半島を經て支那を討たうとした。元代に支那軍が朝鮮を經て日本に攻め來つた反對に、同一の道を取つて明代に支那に攻め入らうとするのである。王朝時代に畏れて居つた支那に對し、元寇以後に稍々度胸が据り、秀吉の頃に對等以上の位置を占める信念を固めるやうになつた。東洋方面に於て、支那以外に日本あることが世界に知れたのは、元軍が敗れてマルコポーロが之れを記載したに始まり、秀吉の遠征を以て大に明白を加へた。歐洲で東洋通を振り廻す者がタイコーサマの名を知るの必要を生じた。

## 歐洲の列國競爭

支那は元が滅びて明となり、又淸となり、廣大なる土地を領有して居つたが、元の如き勢ひは再び見ることが出來ぬ。康熙帝及び乾隆帝は、前代の如何なる英雄にも優ると言はれるけれど、恰も多くの編纂物を作つた如く、國家社會として前代のものを拾ひ集め、之れを接ぎ合はしたに過ぎぬ。英雄が自由手腕を振ふは、元で絕頂に達し、實に世界史で絕頂に達し、其後何者が出ても其影に隱れることを餘儀なくされる。成吉思汗の勢力は長く殘らなんだが、次から次と東方より西方に侵略し、歐洲は常に之を防ぐに苦しんだ。樣々の民族が押移り、力に應じて國を立て、或は國を立てた者の藩となつて從ふ。歐洲全體に亙つての變動で、騷ぎは一通りでない。變動の間に大小幾多の戰爭があつて、中に大いに智を振ひ勇を奮ふのがある。シャールマンの祖父は槌（マルテル）の綽名を取り、十字軍及び其他の戰爭に勇名を轟かし、傳奇的人物の主なるものである。列國分立して相爭ふの際、國々に記憶すべき人物が居り、中に今日尙ほ活きて居るかに知られるのがある。佛國のジャンダルクの如き今でも繪畫彫刻に色々と裝作され、實に一の不思議なる女傑である。けれども斯かる時代は支那で五代の長引いたやうもので、舞臺が闇くて、檜舞臺を見るやうな心持にならぬ。支那では列國分立せずに統一したものの、前と同一の事を繰返して居るとしか見えぬ。何時でも同じ外題で演劇して居るやうで、入がなければ忠臣藏が宜いと云ふが、忠臣藏ばかりて往けるものでなく、況して忠臣藏ほどの興味なくて、尙更仕方がない。歐洲は斯く統一せず、列國分立して頻りに爭ふが、後から見て餘り興味あるものでない。列國相爭ふとて、相續爭ひが多く、君主の血統で國が合一したり、分離したりし御家騷動の大袈裟なものである。御家騷動も注意を要するが、御家騷動ばかりでは飽いて仕舞ふ。斯かる時代も、順序として經ねばならぬとし、日本の足利時代の如く、何事があつても多く興味を惹かぬ。有力者は皆力の有る限りを振つて居つたらうが、緞帳では餘り榮えたものでない。緞帳と檜舞臺と同樣に働き得る芝居であつても、緞帳は緞帳だけのことがある。

歐洲で芝居を作り變へ、檜舞臺で打出したのは、近世史の初期に於てであるが、忽必烈が日本を擊つて失敗したので、東洋の局面が變り始めたやうに、西班牙のフイリツプ二世が必勝艦隊を以て英國を討ち、全く失敗したので、英國が大陸に力を伸ばし、新局面を開いたと言へる。英國は大陸に近く必勝艦隊を破る以前にも大陸を攻めたり、攻められたりし、大陸との戰役が珍らしくない。アルフレツドなり、ウヰリヤム一世なり英主の中に算へられる。けれども愈々英國が力を伸ばし始めたのは、彼の艦隊を破つた勢ひに乘じてのことである。元寇が暴風で苦しんだ程でないが、彼の艦隊は暴風で

苦しんだに相違なく、日本で何人も之を元寇に對比しようとする。所が日本で元寇に惱まされてから、頻りに船を以て支那海岸を荒し廻ることが行はれ、支那では倭寇が頗る難問題になつた。倭寇は秀吉の明征伐の前提となつて居る。英國では世界に植民地を得ることに努め、西班牙の勢力の縮む反比例に其の勢力を伸ばした。

大陸では西班牙の衰へるに伴ひ、佛國が勢力を伸ばし來り、路易十三世の時、リシュリュー主教が宰相となり、内に貴族を抑制して君權を擴張し、外に列國と聯合して墺國の優越權を覆へしたのは、後のビスマルクを聯想させ、政治家として英雄の現はれ出でたのである。昔から此類の事があつても、ビスマルク式の人物及び態度は先づ此邊で著しく眼に着く。リシュリューは十七世紀佛國のビスマルク、ビスマルクは十九世紀普國のリシュリューである。リシュリューは死に臨んでマザラン主教を後繼者に推薦し、適當の人物を得たと言はれ、マザランは手段の辛辣に於て或は前任者を凌ぐが、貪慾で吝嗇、自分で巨額の貯蓄した丈、國家の財政を紊亂した。リシュリューは澤山取込んでも、政略に遺ひ棄て、人物は確かに上に居る。

## 佛國の榮華

マザランが死んだ時、路易十四世は二十四歳、直に實權を收め、内に專制、外に覇を稱するの勢ひを呈した。路易大王の朝と云へば、王權の全盛で、榮華の絶頂と知られて居る。コルベルが巨大なる財政を整理し、ルーボアが依りて大軍を動かし、英主良相並び出でた形がある。併し是れ大部分は中世の殘り物であつて、羅馬皇帝の餘り秀でたものでなく、隋煬帝の規模を小さくしたものに過ぎぬ。是ほど英雄らしく英雄らしくないのも珍らしい。其の盛んな時は、到る處に戰勝を得、大に國威を輝かし、列國は其の機嫌を伺ふに汲々とし、現在の獨逸皇帝在位のところで無かつたけれど、晩年甚だ振はず、國内は財政に窮し、國外は敗戰續きとなつた。彼れ自ら最後まで威力を逞うし得たのは、仕合せもののやうで、實に禍を後に殘した。本來左ほどの人物でなく、而して一世に傑出すると見せびらかすに長じ、俳優として世界的舞臺に活動して居る。濱劇の舞臺で扮裝するのでなく、實際の政治舞臺に扮裝し、能く人を瞞着するのは、面白くも可笑しい。列國の君主及び貴賓を集め、大廣間で談話し舞踏する時、脊恰好も群を拔いて堂々たる偉丈夫と見え、流石英雄は違つたものと思はれたが、愈々崩御となつた節、侍女が靴の踵の幾寸も高くなつて居るのを發見した。常に傍に伺候して居る者が其時まで知らなんだと云ふので、如何に扮裝に巧みであつたかを察し得られる。

路易十四世は、今でも何かと言へば例に引かれ、近世第一の驕り者、第一の派手者であるが、後七

十年ならずして大革命が起り、君主が斷頭臺に上り、盛者必衰の顯著なる例を示して居る。斯かる君主の附物として、文物技藝が進み、後に羨ましく思はれるけれど、後に割合に忘れられて、用兵の術に傑出し、戰史上に記憶すべき者にコンデ及びチューランがある。是れ眞に名將と言はねばならぬ。路易治世の初、至る處に戰勝を得たのは其力である。奈翁戰敗後、奈翁が以前の名將の名を掩うて仕舞つたが、其の以前は彼の二人が重きを成し、少くも佛國に於て將帥の模範とせられた。奈翁が古來の名將を批評して居る中で、此二人をも賞讃して居る。路易十四世が晩年に振はぬが爲め、其の惡政に與つたものばかりでなく、國威を發揚した者まで賞められぬやうになつたのであつて、用兵の術を言ふ場合には必ず彼の二人を擧げねばならぬ。單に用兵の術より見れば、驚くべき才能を備へたと言へる。此の二人が敵味方になつて相戰つたこともある。コンデは晩年退隱し、詩人ラシーン、モリエル等と遊んだ。

## 英國革命

佛國で路易十四世が六十幾年も位に居つて威權を振ひ、榮華の限りを盡し、末が何うなるかとの疑問になつたが、其間に列國に種々の變革があり、中にも對岸の英國で二回の革命が行はれて居る。最初はクロムウエルが兵を率ゐて君主チャールス一世を斷頭臺で刑したのである。クロムウエルは毀譽褒貶區々の人物であつて、近年兎も角も一の英雄たるを許されることになつた。他に何の缺點あるにせよ、自信が甚だ強く、國家は斯くあらねばならぬ、人民は斯くあらねばならぬとし、己れ自ら神より使命を受けて居るかに思ひ、我が罪惡と決定する所は斷然罰して容赦せぬ。

路易十四世が繁華な都で派手を極めた正反對に、クロムウエルは全くの田舍者で、四十歳まで何等知らるゝ所がない。君主が政治を誤り、紛擾の起つた所で、クロムウエルが鐵腕を以て現はれ出で、反抗する者を片端から壓伏し、遂に自ら權力を握つた。王冠を斥けて受けなんだけれども、事實に於て全く君主と同じで、殁して位を子に傳へることになつた。そこで簒奪者と言はれ、反逆者と言はれ、國賊と言はれる。併し平素の行ひが詳かになるに伴ひ、權力に戀々たるものでなく、國民の安全の爲めに斯くするの外ないとし、多くの私心を挾まぬと知られ來つた。君主同然になつたに就ては面白くない所があつて、後の華盛頓のやうにしたならば、明かに美德を認められたと思はれるが、彼が權力を握つて居る間、國內で畏れ憚るのみでなく、國外でも畏れ憚り、其の怒りに觸れぬやうにした。清教徒の力が與つても、クロムウエルの堅實なる性格は、之を統率し之を代表するに適當なるを證明する。特殊の時代に特殊の人物が出たのである。併し後繼者は夫れほどの力なく、勢ひは逆戻りしてチ

ャールス二世が位に卽き、クロムウエルの死骸を發掘し、其首を斬つて議會の家根の上に曝し、腐つて下に落ちる儘にした。民心も淸敎徒の嚴肅なるに飽き、其反對に浮華を喜ぶやうになり、前よりも多く墮落した。ジェームス二世の代に愈々墮落し、纍に淸敎徒が嚴肅を旨として革命を起したのが、全く跡方なくなり、無益な騷ぎを起したものと見られ、クロムウエルは惡人で、愚物で、惡魔であると言はれた。路易十四世は熟ら革命の有害無益なるを思ひ、それ見たかと言はぬばかりで、愈々君主の權力を增大するに努め『朕は國家である』との意を貫徹しようとした。實にクロムウエルの爲した事は下らぬものとしか見えず、英國でも今更之を後悔して已まぬ狀態であつて、佛國では愈々君主の權力を重んじ、何でも獨裁專制に限るやうに心得、面白可笑しく世を渡るのが當世の事、倫理道德など皆野暮の骨頂とした。英國も其通りである。所が英國は其の儘で過ぎ往かうとせず、是ではならぬと考へ始めた。若し過ぎ往つたならば、英國は大陸の支配を受くるを免れぬやうになつたらう。

クロムウエルの起つたのは幻でなく、英國人の代表者としてである。動あれば反動ある順序で、變動の急激な爲めに間もなく反對狀態になつたが、漸くにして落着いて見れば、チャールス二世及びジェームス二世の治世は餘りに不仕鱈で、何とも話にならず、斯くては仕方がないと云ふやうに考へ、其處でチャールス一世の孫に當り、ジェームス二世の娘と結婚した和蘭總統オーレンジ親王を、ウィリャム三世として迎へることになり、此人は餘り人望がなかつたに拘らず、英國の政體は此處で確定し、責任內閣といひ、政黨內閣といひ、要するに此邊よりす、世に『英國革命』といふは、クロムウエルの分よりも此分を指す。佛國では依然路易十四世が位に居り、英國で餘計な騷ぎして居るのを冷笑した、ウィリャム二世は之に反抗し、聯合軍を以て當つただけ、彼は之を好まず、革命の起る國家を以て禍ある國柄とする。路易自ら何を言うても、何を行うても、世間は服從して居り、實は此處に測る可らざる禍が潛みつゝあるを知らなんだ。勢ひは到る可き所に到る、英國クロムウエルの首を獄門にしても、それで必ず世が治まるものでなく、若し第二の革命が平和の間に行はれなかつたならば幾年かを經て第一のクロムウエルの出るのを防ぐことが出來なかつたらう。路易十四世は英國で餘計な騷ぎするのを冷かに笑つたが、英國君主の位は之で安全となり、再び後革命を起さうと企てないやうになり、早く厄拂ひをして仕舞つた。他國では路易十四世が奢れるだけ奢り、十五世が放蕩爺の放蕩兒として惡い點を眞似、國政は紊れる一方で、何とも救濟の道がなく、流石不仕鱈な君主も死に臨んで『朕の後は洪水』と云ひ、而して十六世は斷頭臺で刑せられ、皇后も同じく刑せられ、英國の革命よりも一層悲慘な狀態を呈した。クロムウエルは佛國で冷笑するやうなものでないと知られた。

## 北歐の英雄

佛國のブルボン朝は勢ひに乘つて全盛を極め、後下り坂となり、土崩瓦解の避く可らざる有樣となつたが、英國は一時內亂に苦しみながら、次第に國家の基礎を固くし、海外に發展し、海上權を占むる樣になり、而して露國は新たな彼得（ピオートル）の下に一大帝國とならうとして居る。路易十四世は自ら蓋世の雄と心得て居つても、後から見れば英雄でく、英雄の假裝したものであつて、內兜が餘りに見え透いて可笑しい。英雄らしいものは、蠻族から出で來つて、彼得は路易よりも英雄らしい。蠻族も國を成して秩序が整ふと共に、都會風になり、野蠻風が無くなり、彼得も務めて文明國に倣ひ文明を輸入したが、彼れ自ら蠻族の酋長たるを免れぬ。頻りにハイカラにするけれど、容貌からして、態度からして、蠻族の垢が拔けず、血族に蒙古人の血が混つて居り、ハイカラ振つても蠻カラたるを免れぬ。蠻骨稜々であつて、必要なる點に飽く迄文明を活用する所に、近世の英雄たる面目が現れる。文明を活用せねば、中世の喧嘩に日を暮した豪傑連と違ひがなく、或は中央亞細亞の土豪のやうに見えるであらう。彼得は精力が餘りあり、腕力も强く、腕づくで人に勝つた、それで我を折つて新知識を吸收するに努め、到らぬ所がない。宮中の陰謀を切拔けて、國家の經營に從事し、人に國外視察を命ずるが上に、自分で出掛け、自分で學問もした。和蘭で造船術を學んだ如き、眞に能く勉强し、天文地理から解剖外科にまで及んで居る。

彼は絕倫の精力を以て新知識を活用し、東歐に大帝國を新設し、世界に力を伸ばさうと考へ、都をも莫斯科より海岸近くに遷した。現代の彼得具羅土は、初めイングリアといひ、彼れ自ら造つたものである。土地は決して良くなく、當時勢ひが許したならば、他に適當なる位置を選定したであらう。併しイングリアも辛うじて得たので、何でも之を首都にせねばならぬとし、沼地で仕方がなくても、彼れ彼得は斯かる事で屈せず、自ら仔細に計畫し、一切を監督し、都らしい形を成せねば已まなんだ。彼は建築の設計をするばかりでなく、自ら大工になり、細工人になり、馬車も造れば、椅子も造る。力仕事でも、普通の勞働者も叶はぬ。而して夫れが政治の餘暇であるとすれば、驚く可き精力と謂はねばならぬ。今でも其の製作した器具が殘つて居る。政治の方では此れ位のことでなく、國內を平定しつゝ尙ほ、新たに土地を得ようとし、絕えず軍隊を動かして居る。露國が後歐洲列國の畏るゝ所となり、世界の畏るゝ所となつたのは、此からである。所で彼は精力が强く、努力を惜まず、自分で何でも爲し得るけれど、餘り器用でなく、天才よりも勉强で勝ち、忍耐を以て總てに勝たうとする。生來暴戾で、淫縱なのを忍耐で抑制した所がある。其の頻りに帝國の建設を圖つて居る時偶瑞典に軍人

としての一天才が現はれ出で、彼を窘めて窘め拔いた。即ちカロロ十二世である。此系統からは、前にも英雄は現はれた。グスタフ・ドロルフの如き、人格も、才幹も、英雄の名を値する。若し三十九歳で戰死せねば、一層飛躍し、且つ後に好い影響を遺したらう。カロロも眞に英雄肌であつて、彼得との競爭は項籍と劉邦とに較べられ、又謙信と信玄とに較べられ、性格の純粹で俠氣ある所は謙信流で、更に猛烈を加へる。謙信及び信玄が全く性格を異にしつゝ、各々英雄たるを失はぬが如く、カロロと彼得と相對して居るのが面白い。片意地が强く、思ひ立つた事は、誰れの言ふことにも耳を假さず、戰爭の爲めに戰爭する形あつて、思慮を缺くの嫌ひあるが、何人も及ばぬ長所がある。軍事のみでなく、商工業の事も能く判つた。三十七歳で彈丸に中つて歿し、『北方の狂人』或は『光輝ある狂人』と言はれるが、若し生存して圓熟したならば、何うなつて居らうか。軍人の常として際どいことを敢てする場合がある。死地に陷つて死なぬことがある。カロロは死地で死んだが、其の勇敢、其の智略眞に天才として瑞典の爲めに氣を吐くに足る。カロロと彼得との競爭は、路易十四年の晩年のことで京都に於て謙信と信玄との競爭を聞くの思ひであつたらう。彼の二人は殆ど事毎に正反對である。

## 歐洲七年戰役

次に普魯西に弗列特力（フリードリヒ）大王が現はれ出づる順序となる。既に近世史が開けても、中世と混合すること多く、殊に英雄は餘り時代に關係ないが、少しづつ變遷し來つたのが、積んで漸く近世史的と認められるのであつて、弗列特力に及んで其の色彩が頗る濃厚を加へる。

七年戰役は著大なる事變であつて、後奈翁戰役で形勢を一變したに拘らず、印象が深く刻まれて今に及んで居る。佛國は一度大に膨脹して、直ぐと元の狀態に收縮し、根柢ある發達を遂げ來つたのは、獨逸と英國とである。將來の獨逸帝國を形づくるべき普魯西は、普列特力の手で建設したと云ふべきであつて、王國及び帝國の興隆と共に、其の活動の跡が知れ渡つた。一種特別の人物で、性格が隨分複雜である。若い時は軍隊式に育てられるを嫌ひ、遁げ出して文藝に凝り固まり、政治に役立たずと見え、父に責め訶まれたが、二十九歳で位に即いて以來、政治に熱中し、名將として大陸に傑出した。露國、墺國、佛國等を敵に引受け、英國と提携して戰ひ、勝つたり、負けたり、度々の變化があり、三回も勢ひが窮し、或時は自殺するばかりになつた。けれども思ひ掛けなく敵側に變が起り、窮した勢が俄かに通じ、通じた機會に乘つて驀地に進み、大勝利を得た。

現代の大戰亂とは、墺が味方になり英が敵となつた違ひあるが、或點で似て居る。大敵であつた露國の女皇が崩御し、其の後繼者が味方となつたのは、現代の獨逸が露國革命で一方の肩が助かつたと

同じである。七年間勝つたり負けたりして、最後に何程かの利益を得て終結し、之が獨逸帝國の基礎となつた。英國は普國を助くるに、兵を以てするよりも金を以てし、自らは海外に於て佛國と爭ひ、其の植民地の大部分を奪ひ、世界政策の基礎を築いた。今は二國が兩横綱となつて、大陸に勝負を爭つて居る。

七年戰役は變亂が複雜なるだけ、有志の人物が現はれ出で、普には弗列特力が君臨し、英にはピットが首相となつて政界を指導し、墺には女主人公としてマリアテレサが控へて居る。政治界は隱謀が多く、殊に外交は權變に富み、詐欺に對するに詐欺を以てするを免れぬ。愈々固く約束し、互に笑つて喜ぶかと思へば、其の裏面に之を破壞する陰謀が熟して居る。油斷も隙もあつたものでないとは外交界の常で、其の機微に通ずる者でなくては、飛躍するに堪へぬ。近世は中世の陰謀ばかりなのと違ふと見えるが、外部こそ文明を以て裝飾すれ、一皮剝けば、中世の陰謀丸出しである。陰謀を專一にすれば、其當時に働き得ても、世界の進運に與ること少く、盜賊が宮殿に住つて居るとしか感ぜられぬ。陰謀に於て負けて居らず、詐欺をしても敵の上に出でながら、將來の方針を指して向上する所あるので、政治家の價値を認めることが出來る。弗列特力は目的の爲めに手段を擇ばず、辛辣なこと、惡辣なことの限りを行ふが、それで何程か文明を心得て居る。戰亂に忙殺されながら、民力の休養を慮り、禍を被つた地方の租稅を二年も免除し、其れだけ極度に政府の費用を切詰めた。而も借金せぬのが妙である。尙法律を正しくし、宗敎言論を自由にした。勢ひ窮して自殺しようとする場合、徐ろに詩を作るが如き、面白い餘裕があり、政務の餘暇に著作も少くなく、七年戰役史も書いて居る。皆佛文で書いて、獨逸人が苦笑するが、何にしても近世に現はれ出でた英雄である。

ピットは國柄として己れ專斷で事を成し得べきでなく、君主と黨派關係とにて色々と掣肘せられるが、それで國策を決行し、之を遂行し、英國の世界に於ける利權を擴張したのは、勢ひの自然とは云へ、難局に相應しき手腕と謂はねばならぬ。自ら兵を用ゐぬけれど、能く勢ひの宜しきを制する所に英雄の面目を見る。併し此等は種々の事情が附き纏ひ、何程まで當人の力であり、何程まで勢ひの致す所であるかが判明せず、痛快を覺えることが少い。其邊になればクライヴは天性の軍人で古代の英雄が再現した調子がある。

## 英國の印度領有

英國は海外に植民地を得るに努めたが、政府の施設は餘り手際好くなく、佛國に較べて兎角遲れ走せにならうとし、實際の成績は政府の力より居留民の力で擧がり、特に印度を斬從へたるが如き、ク

ライヴが勝手にした所として宜い。彼は東印度商會の一書記として印度に渡つたのであつて、何の能力あるかが知られず、下らぬ惰け男と輕蔑された。一旦印度人が佛國人と共に英人を壓迫しようとし衝突が起ると共に彼れ俄に軍人としての天才を閃かし、兵を募集し、之を訓練し、寡を以て敵の衆に當り、連戰連勝した。印度の兵は言ふに足らず、緞帳で働き榮えがないが、緞帳でも十分に能力を發揮し、此れならば檜舞臺に出して、何れだけ働くであらうかと、人をして想像を逞うせしめる所がある。

印度方面は、前から特別の人物が出沒して居る。成吉思汗の帝國が分裂し、後其の後裔なる帖木兒（チムルレンク）が活躍し、成吉思汗同樣な事を成さうとし、殆ど之に匹敵するの勢ひになつて病んで歿し、其の曾孫なるバベルが印度を征服し、波斯人の所謂モガルス帝國を建設し、子孫業を承けて數百年に續き、デリーに、アグラに、幾多の遺蹟が遺り、當年の全盛を想はしめる。支那より離れ、歐洲より離れ、別世界を成して居つて、他で深く注意を拂はなんだが、人口では多く支那若くは歐洲に讓らず、其興亡は世界の重大事たるを失はぬ。現に建築物の遺つて居るのに婦人の勢力を證明するものあるは奇である。『女が種族として奴隸扱ひせられる處に個人として權威を振ひ男女平均する』とは、最も著しく印度に於て見る。皇后ヌール・ジェハンは『世界の光』の名あつたが、其姪なるムンタザ・ゼマニは『時代の最高』を意味し、其遺言で建てられたのが今日世界の一美觀なるタジマ・ハルである。伊太利人の手に成り、構造に幾分の非難あつても、建築物で此皇后の廟ほど莊嚴と美麗との感に打たれしめるものがない。夫なるシャ・ジェハン帝は、河を隔てて自分の廟を造り、橋を以て繫ぐ積りであつたのに、國が亂れて皇后の側に葬られて居る。彼が美人としての評判は、支那で楊貴妃といふ所で、略々同齡で歿したが楊よりも賢明、楊よりも幸福、楊よりも一般の氣受けが良い。印度の繁華は歐洲人が常に想像に描き、寶の山と考へたが、クライヴは空拳を振つて寶の山を奪つて仕舞つた。帝國が既に衰微して居つたけれど、居留民を引纏めて之を征服した所、餘り類のない手並と謂はねばならぬ。英國は政府の施設が遲鈍で間々大に失敗する代り、政府の力を借らずに活躍する者の出るのは結構である。斯くして印度を領有し、他にも大なる植民地を造るを得た。

## 東亞細亞の動搖

七年戰役で獨逸及び英國の基礎が成つたが、七年戰役の名に拘泥するでなけれど、東洋に於て約百五十年前、朝鮮半島に日本と支那の相衝突し七年戰役を實現して居る。歐洲では幾多の戰亂が續き、漸く纏まつて七年戰役と言ふ大戰亂になつたが、東洋では國內に戰亂が絕えずとも、國と國と斯く迄

戰はず、順序が違つて居る。併し豐臣秀吉の朝鮮に出兵したのは、東洋に新たなる勢ひを造り、歐洲の七年戰役と並べ言へぬではない。東洋の新形勢は實に玆に兆して居る。古代朝鮮が日本の一部を領有し、屢々其處で戰つたけれど、支那と戰ふには餘りに隔つて居り、唐天竺と言へば、月の國と擇ぶ所がない程である。忽必烈が軍艦を以て襲ひ來り、全く失敗してから、日本で支那を相手にすべきことを考へ、西國の船持が彼の海岸を荒し廻り、只內亂續きで外に出兵する暇がなかつたのが、秀吉の代に一統して、愈々支那と爭はうと決心した。王朝から門閥續きで、相當の氏族でなければ、權力を得ることは出來ず、北條氏が三上皇を島流しする力ありながら、名ばかりでも將軍を戴いて居り、足利氏が之に代つて實權を握つたのも名門としてである。群雄割據皆氏族の競爭に過ぎぬ。所が次第に氏族が破滅し、遂に氏素性の分らぬ藤吉郎が關白となつたのは、明かに社會狀態の一變化を示す。單に主權者に反抗して實權を握つた所から言へば、義時や、尊氏やクロムウエルに似て似るが、素町人が實權を握つた所では、秀吉とクロムウエルの相對立する所がある。而して其の勢ひは秀吉に止まらず、長く後に及んで居る。新たに封建制度が整ひ門閥で固まつても、其門閥は多く百姓上りか何かで御用學者に系圖を造らしめたのであり、新大名として無事太平で續くのみで、一度事が起れば、門閥で間に合はず、足輕連が天下の事を行ふやうな勢ひになつて居る。秀吉の頃に幾多の豪傑が輩出し、秀吉を初め、家康と云ひ、利家と云ひ、孝高と云ひ、氏鄕と云ひ、一本立で何處へ出しても相當の力を振ふに堪へ、國の狹い割に人物が有り過ぎると見える。そこで大陸に押渡つて思ひ存分に力を伸ばさうと云ふことになつたが、日本で英雄時代と云ふほどに人物が多く、それが七年間只徒らに戰つて何の結果がなかつたのは、不思議でないかとの疑ひがある。

秀吉が大陸で成功しなかつたのは種々の事情がある。土地の不便もある、卽ち支那と戰ふに運送の不便ばかりでも容易でない。幾百年も戰亂が續いて、漸く太平になつたので、一般に戰爭に倦み果て居る所もある。且つ愈々朝鮮に押渡つて、何がな分捕物をと見れば、我が內地より貧弱であつて、糧食も敵地で得ることが難かしく、折角支那へ押渡つても、結構なことはなからうと云ふが武人の頭に浮び、如何にして北京迄進まうかと云ふよりは、如何にして早く切上げようかと云ふのが先になる。而して秀吉自ら年老い、若い時分の元氣がなく、自分で海を渡らうと考へたり、又之を止めたり、頻りに惑ふやうになつた。若し土地の便利が宜かつたならば、大陸に大變動を起したであらう、明政府では出來るだけ日本を防がうとし、兵を半島に送つたが、是れ亦容易の事でなく、隨分其の爲めに人民に負擔を迫り、世間を騷がした。そこで滿洲から奴兒哈赤が起るやうになつた。